

凡例

一 岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫に収められている「御評定書」二冊（総目録番号E3-1・2）「御留帳評定書」一二冊（E3-3、14）のうち『池田家文庫資料叢書3・御留帳評定書』上・下（岡山大学出版会）として刊行されたものに続き、残りの四冊（E3-11、14）を翻刻する。あわせて寛文六年の「大寄合之覚書」（E3-22）を付録として収めた。

一 解説は『御留帳評定書』上のものを参照されたい。

一 翻刻にあたっては、できるかぎり原本の体裁を再現するように努めたが、紙面の都合上、または読みやすさを考えて、変更を加えたところもある。改行はいちいち指摘せず、闕字・平出は一字あけで示した。

一 表紙は、およその形状を罫線枠で囲んで示した。朱書された貼紙の内容は、「」を付けて記し、右肩に（貼紙朱書）と注記した。

一 付紙は、およその場所を※印を付け、その付近に内容を「」を付けて示し、（付紙）と注記した。

一 史料本文の字体は原則として常用漢字を用い、異体字・略字・俗字・あて字については一部を使用し、必要に応じて通用の文字を右行間に（ ）で示した。地名などの表記が通用のものと異なる場合、適宜現行の文字を同様に（ ）で示した。

一 史料を読みやすくするために、適宜、読点（ ）、並列点（ ）を付けた。

一 明らかに誤字・誤記と思われるものは、右行間に正しいものを（ ）で示し、疑念が残る場合は（カ）とした。脱字と思われるものは（脱）（脱力）、重複していると思われるものは（衍）（衍力）とした。意味不明の場合は（ママ）、記載がなく空白となっているところは（アキ）とした。

一 変体かなは平かなに改めたが、格助詞のうち次の文字と、接続詞の「并」は活字を小さくして使用した。

者（は） 江（え） ニ（に） 茂（も） 与（と） 而（て） 而已（のみ）

一 くりかえし記号は、「ゝ」（漢字）、「ゝ」（ひらかな）、「ゝ」（カタカナ）、「く」（二字以上の熟語）を用いた。

一 旧字・古字のうち、次のものは新字体に改めずにそのまま使用した。

龍 瀧 籠 嶋 寫 餘 飴 冑 冨 舛 燈

一 異体字・俗字・略字・合字については、次のものを使用した。

弥（珍）	躰（体）	忤（忤・忤）	舛（忤）	嚙（扱）	并（并）	𠂔（州）	吳（異）
早（畢）	粮（糧）	扣（控）	帑（紙）	欵（歟）	𠂔（最）	窄（牢）	哥（歌）
沉（沈）	礮（礮）	迎（とて）	斛（石）	脉（脈）	吡（嘩）	桧（檜）	𠂔（儘）

蛇(蛇) 蘭(園) 鴈(雁) 鬧(鬧) ヌ(しめ) オ(等) ㇿ(より)

一江戸時代には制度的・慣習的な身分や格式が存在しており、現代からみれば差別的な事実や言動、用語などが一般に通用していた。そのため史料のなかには、そうした表現や事実が記載されていることもあるが、正しい歴史認識を形成するためには、史料に基づいて歴史的な事実を明らかにする必要があるとの立場から、そのまま掲載した。ただし、固有名詞との関連で現在の差別を助長しかねない場合は記載を差し控え、「□」で示したところがある。

一本叢書の企画・編集は、岡山大学貴重資料刊行推進会（平成29年度、岡山大学附属図書館長今津勝紀、同副館長李禎之、岡山大学社会文化科学研究科教授山本秀樹、同准教授徳永誓子、教育学研究科准教授村井良介、岡山大学特命教授（研究）倉地克直、附属図書館学術情報サービス課長森谷めぐみ）が行った。

一翻刻原稿の作成は青木充子と倉地克直が行った。原本との照合・割付・校正および全体の監修は倉地が行った。版組は今津勝紀が行った。

十一 御留帳評定書 天和元年

(表紙)

天和元酉ノ年

御留帳評定書

(貼紙朱書)

「記第五号五十一

共拾貳冊」

(小口書付)

「天和元酉評定」

正月五日 日置左門宅ニ而内寄合之節国枝平介差出

口上書覚

一鴨方村三郎兵衛与申者、小商仕居申候、十月十九日備後ノ宮内江
商ニ参候処ニ、罷歸不申候ニ付、吟味仕候ヘハ、木綿など買懸り
仕参申候由、其時分々尋させ申候得共、行方知レ不申候、女房を
も宮内江参候前、在所他領坂津村親方ヘ遣シ申候、女房江も尋候
得共、不参候由申候事

一三郎兵衛歳三十六、悪昌老反余所持仕候事

天和元年 御留帳評定書

一同村市三郎与申者、小盜仕候を親類共しかり申候ヘハ、何方江か
参候、方々尋候得共、居不申候

一市三郎歳十七、田畠少も持不申候

右両人之者御放者被成被下候者、可忝候、以上

延宝八年十二月廿八日

国枝平介様

御年寄中被申候ハ、右両人之者共之儀、其分ニ而差置候様ニ
と、平介江被申渡候

鴨方村庄屋

甚右衛門

同日

一広嶋方飛脚を以口上書并書付共被差越、国枝平介返事仕趣、附飛
脚之者ニ平介尋申口書共差出写

口上之覚

於当町盗人共在之付召捕候、其内孫七与申者、其御領之者之由申
候間、白状之趣別紙記之、懸御目候、於当所行死罪度存候、母并
妹儀者可指免候、但孫七義御請取可被成候哉、此段自拙者共方内
証可申達由、家老共申候間、以飛脚得御意候、御返事被仰聞可被
下候、以上

十二月廿三日

須田金右衛門

武井又十郎

孫七口上 歳貳拾貳

一生備前領浅口郡本条村、父者市右衛門、七年以前相果申候、伯父
三郎兵衛・与三兵衛、同所ニ百姓仕罷在候、七年以前無首尾成儀
御座候而、母并妹召連在所を罷出、方々仕、御当地江者八月七日

ニ參着仕、西土手町下松屋弥三兵衛所へ參、木之浜之者ニ而候、母相煩候間養生仕度由偽申、宿かり、十月十四日迄逗留仕候、其内所ニ而盜仕候

孫七母口上 歳四十五

一生備前領淺口郡三宅村、弟安兵衛・平兵衛・与右衛門新田作罷在候、孫七儀手前成不申候故、在所を罷出方ニ仕候ニ付、私共も同道仕候、銀子沢山ニ遣申候間、定而盜仕候ものと存候、何事茂知せず不申候故、可申上儀無御座候

孫七妹なつ口上 歳拾貳

一生備前領淺口郡本条村、何事も不存候

広嶋方參候式人之飛脚ニ何か尋申覺書

一口上書ニ当テ所無之、判形無之段如何と相尋候へハ、御尤成御尋、あなたニても其段御尋も候ハ、淺口郡之御奉行御仮名不存候故、当テ所判可仕様無之由、兩人町奉行共申付候、彼孫七申候ハ、右ハ川村平太兵衛殿与申候ニ付、則平太兵衛殿へ書状參候、此口上書之通別成儀も無御座候間、平太兵衛殿江之書状も平太兵衛殿御奉行替被申候ハ、書状を届ケ不申、今之奉行衆へ此書付指出候へと被申付候由申ニ付、左候ハ、平太兵衛方江之書状見可申由申候得ハ、状出見申候、平太兵衛當テ之上書ニ而御座候故、内見申ニ不及候と申、平太兵衛方江之状ハ戻申候

一孫七盜仕候品如何様之事ニ候哉と尋申候へハ、委細之儀者不存候、頃日者殊外盗人火付なども多御座候、付火仕候者共先ニて搦、火あふり其ニ行死罪申候、此孫七八付火ハ不仕候、城下ハ川下在郷ニ而何か盜、城下江罷出、則盜候脇指を指、盜着物着仕居候ヲ、ぬすまれ候庄屋之下人見付、公儀江断申ニ付搦、白状

させ候へハ、書付之通所ニ而盜仕候段申、又同類共之儀を茂申、拾四、五人も同類搦候、皆方ニ他国之者ニて御座候、然共先ニ江付届不仕、死罪申付候、此度御断申儀ハ、孫七母妹を助申ニ付、御断申上由ニ御座候と申候

右ノ書付之返書

備中之内淺口郡伊予守領分本庄村孫七と申者、当八月七日ニ御城下江參着仕、所ニ而盜仕候ヲ御搦被成、孫七白状之趣并ニ母妹口上書迄委細ニ御書付被下、一之承届申候、孫七事其御地にて死罪ニ御行被成度之由、御尤奉存候、孫七爰許ニ居申時分者三太郎と申候、十六歳之時村ニ而盜仕、七年已前欠落仕候故、此方領分放者ニ仕候、少も此者之儀構無御座候間、如何様共其御地御仕置ニ可被仰付候、尤母妹之儀是又御了簡次第ニ可被仰付候、被入御念候段早ニ家老共江申聞、御返事可仕候得共、城下江程遠ニ御座候故、御飛脚待遠ニ可有御座と早速御返事仕候、御書付之趣御念入候段、追付家老共へ可申聞候、以上

十二月廿八日

国枝平助

須田金右衛門様

武井又十郎様

淺口郡本庄村三太郎事

一三太郎今ハ孫七と申由、本庄村之百姓ニ而御座候、親市右衛門と申者之時分抱之田地無御座、日用かせきニ而渡世送申候、親存命之時分三太郎小盜仕候、七年以前ニ親相果申候、其時三太郎十六歳ニ而御座候、村之内善助と申者之所江盜ニ入候ヲ捕、牛綱にて括り置候得ハ、其夜欠落仕候、母妹翌日三太郎ヲ尋ニ罷出、行衛知不申候、其節右之通庄屋方申聞候、兼而放者ニ仕度存候へ

ハ幸之儀、其上悴之事ニ候間、命助放者ニ仕置、自然見合候ハ、
搦候得と申付置候、今度広嶋方之書付弥三太郎ニ相違無御座候、
已上

延宝八年十二月廿八日

国枝平助

正月十日

下濃宇兵衛番

一 国枝平介・春田重兵衛江御勝手之積り御書付左門方兩人へ被相渡、
惣御郡奉行中江見せ申様にと被申渡候

同日

一 岩根周右衛門・山田市郎左衛門申候ハ、頃日被申聞候通、初嶋勾
当ニ申聞せ候へハ、畏入候由申候、勾当ニ申聞せ候口上之趣書付
差出

口上

其方事去年如申聞候、御用ハ不申渡候、然共当町ニ居申候与
相見え候、今度之御法事ニ定而方々座頭共可参候、御用不
承候迎も勾当之事ニ候へハ、配當場ノ座頭共ニ能申付、やか
ましく無之、首尾能様ニ仕可然存候

同日

一 村田小右衛門口上書差出

一 去秋田方取実無御座、猶以留物曾而無御座ニ付、十月畝麦七百石
余借申候、飢人村々改申候へハ、凡四千五百七拾七人御座候、此
者共へ壹人一日麦貳合五勺宛、正月壹ヶ月分三百六拾石遣申候、
残麦凡八百石余御座候、次第飢人も増可申候得共、右之麦ニ貯銀

など指加、育見可申候、郡々貯物当春一度ニ遣切可申候、来ル秋
御物成以御入替可被下候、此段兼而御断申上置候、育手ニあまり
候ハ、追而御注進可申上候

此段当暮御入替可被下共御年寄中不被申候

一 諸郡ニ古来方帳分込二品ニ成申候、然ルニ邑久郡近年者打込かふ
切ニ成、免か検見か一方二片付申候、上り窪所共ニ亘事者無御座、
一方之年貢ハ御百姓弁申候、弥如此被仰付候へハ、公儀御徳ハ
参候得共、其程御百姓困窮仕候、自今以後ハ先年之通ニ二品ニ被
仰付候様ニと私方迄御百姓共相断申候

御年寄中被申候ハ、二ヶ村之事ニ候ハ、帳分ケかふ切ニ仕、

先見申様ニと被申渡候 土師・服部両村之事候由

一 福里村新田代々御奉行悪水拔普請宜申付、悪水大形者抜申候得共、
十分ニ無御座、去年なとハ六拾町余水損仕候、毎年造作空仕、当
年なとハ一入飢人多御座候、人ニハ此新田差上度と存候ても左様
ニも難申模様ニ成、及難儀申候、指上度と望候ものハ心次第二可
被仰付候哉

新田入百姓吟味之上ニ而入可申由、御年寄中被申渡候

一 火事火本へハ何も不被遣候御法ニ御座候、旧冬ハ火事ハ付火多御
座候、御法之通構不申候へハ、当作成不申候、遂吟味弥付火ニ究
候者ニも家建料作食米遣申候様ニ仕度奉存候、類火ハ猶以同断

此段御法之事ニ候間、御扶持方被遣間敷由、御年寄中被申候
一 邑久郡江請取置候平太船大破損仕候、式艘新敷被仰付候様ニ奉願
候、已上

正月十日

村田小右衛門

御年寄中新規二式艘共ニ申付候様ニと被申渡候

同日

一 春田重兵衛書出シ

一 磐梨郡之内保木村治兵衛と申小百性世倅本介と申者、去年池田七郎兵衛ニ奉公仕罷有候、江戸へ御使者ニ被参候時分不届申、途中二暇を遣被申候、此本助不届者ニ付テ、おや治兵衛不通仕追出シ申候、折々保木村又ハ近村へ参、盜を仕候、郡弘ニ成共又ハ御国弘ニ成共被仰付可被下哉之事

御年寄中被申候ハ、本介事捕、爰元へ引越可申候、籠舎可申付由被申渡候

一 飢人共わらひかね掘申度と申候、熊山御赦免被為成候者、野山ニ而掘せ申度奉存候、然上ハ此方る相改、小林孫七方江申通シ、山入之札私方る遣シ、飢人共村所又ハ名ヲ書付、和氣郡江遣申度奉存候、尤磐梨之内随分わらひかね御座候、山々御蔵給所共野山江札を遣シ可申候、他郡江参候故、御断申上候事

此段小林孫七と下ニ而申談、追而相窺可申由、御年寄中被申候

正月十日

春田重兵衛

同日

一 横井次郎左衛門申候、金岡新田堤外ニよしをうゑ申様ニ去々年中付置候、本村る植可申与断申ニ付、植させ候へハ、しかとうゑ不申、無沙汰ニ仕候、新田之者共申候ハ、堤之かこひニ早クうゑ申度様ニ願申候、堤のためニ能御座候間、新田之者ニうゑさせ申度候由申候

御年寄中被申候ハ、本村之者共ニ申聞せ、其上ニ而新田之者ニうゑさせ可然候、いつれの道ニも早ク植させ候へと被申候

正月十六日 日置左門宅ニ而内寄合

一月番春田十兵衛申候ハ、横井次郎左衛門方る申越候、西大寺村大工拾七、八人江戸江家職ニ参度由願申旨申来候、如何可被仰付哉
左門被申候ハ、遣し候へ、江戸へ参候ハ、御屋敷江茂参、相断候へ之由被申渡候

正月廿九日

山田弥太郎番

一 津田重次郎・服部与三右衛門申候、昨日惣郡奉行中寄合、飢人御育之段随分申談候、惣郡飢人改之數書付一通出シ申候

覚

一 三千九百八拾人	御野郡
一 三千六百三拾九人	口上道郡
一 三千百八拾三人	奥上道郡
一 六千四百三拾六人	邑久郡
一 四千五百人	和氣郡
一 四千七拾人	磐梨郡
一 三千八百人	赤坂郡
一 貳千六百人	奥津高郡
一 三千百人	口津高郡
一 壹万七拾人	児嶋郡
一 五千拾人	備中山北南
一 六千百五拾人	同浅口郡

合五万六千五百三拾八人

此扶持方米

三千九百五拾七石六斗六升 但一日老人老合宛ニメ二月朔日

〆四月十日迄七十日分

同日

一惣御郡奉行中存知寄飢人育様之書付一通出シ申候

一邑久郡之儀、郡之貯を以餓死無之様ニ才判仕見可申候、其上にて行届不申候ハ、追而御断可申上候

一御野郡之儀、畝掛麦并少心当仕置候、又ハ旧冬申上候三百石残置候御米にて、餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一奥津高之儀、旧冬申上残置候五百五拾石之御米ニ而餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一和氣郡之義、郡之貯并旧冬御断申上残置候三百九拾石ノ御米にて餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一磐梨郡之儀、少畝麦も御座候、旧冬残置候貳百五拾石之御米之外ニ今百三拾石被下候ハ、餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一口津高郡之儀、少心当も御座候間、只今貳百貳拾石被下候ハ、餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一児嶋郡之儀、郡之貯物并当春御断申上被下候御米三百石、又先日被下候麦貳百石御座候、此外ニ御米三百石被下候ハ、餓死無之

天和元年 御留帳評定書

様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候者、追而御断可申上候

一赤坂郡之儀、旧冬御断申上御延被下候御米五百八拾石之内百五拾石程者何とぞ取立見可申候、郡貯百石并畝麦御座候間、餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一口上道郡之儀、旧冬御断申上御延被下候御米五百石之内百五拾石取立申候、又奥上道郡沼新田悪米百九拾四石、是又御断申上候、然共米殊外悪敷御座候間、百五拾石ニ御立被成、此外ニ只今貳百石被下候者、餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一奥上道郡之儀、旧冬御断申上御延被下候御米五百石之内三百三拾石取立申候、此御米ニ而餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候者、追而御断可申上候

一浅口郡之儀、旧冬御断申上八百石残置候得共、当春少も取立不罷成候、然共新田米其外少心当仕置候間、外ニ只今貳百三拾三石被下候者、餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

一備中山北南、旧冬御断申上貳百石残居申候得共、此内五拾石ならてハ取立成申間敷候、貯之内百石計ハ差加育可申候、只今五百石被下候者、餓死無之様ニ裁判仕見可申候、其上ニ而行届不申候ハ、追而御断可申上候

被下米

合千五百八拾三石

同日

一重次郎・与三右衛門申候、頃日兩人惣御郡廻り申二付、郡々貯之分承届申故、うゑ人御救之儀少茂かけこなし申談、此積二而郡奉行中飢死無之様ニ裁判可仕与申候得共、此後飢人増之程も難知御座候、只今麦貳千石・米千石御蔵ニ有之由御内意承申候、左候者麦貳千石ヲ米千三百三拾石ニ御立被成、今米六百石余御足シ被成、都合御米三千石ニ被成、御渡被成候者、兩人請合候て飢人育ヲ惣郡奉行中可申談由申候

御年寄中被申候ハ、内々御聞候る数も少ク一段之義ニ候間、其程相渡シ可申候間、弥惣郡奉行中申談候様ニと被申渡候

同日

一同人申候ハ、飢人数ニ随ひ扶持方ニ積り候へハ、大分之義ニ而只今御勝手御不自由ニ御座候へハ、難被成候故、右之通郡奉行中請合ニ而右之御米高ニ而育中筈ニ申談候、此余之不足者重次郎手前之御米ニ而救可申由申候

同日

一重次郎申候、一ノ宮領之百姓飢ニ及申候、社人共銘々田地手作仕申義ニ候へハ、御郡奉行方救申義も成不申候、然共捨置申儀茂難仕候由、広内権右衛門申候、是ハ私手前之御米之内 上ニハ御存知不被成分ニ而借シ遣し可申由申候

御年寄中其通ニ仕候様にと被申渡候

同日

一広内権右衛門申候、半田山之内金川道方西之方下刈之儀、先日茂

申上候通、百姓共ニ被下候ハ、横井村之百姓共ニ取せ申度由申候

御年寄中追而差図可有之由被申候

同日

一村田小右衛門書付出シ申候

一此度御成敗被 仰付候盗人佐井田村ノ喜右衛門、田地少御座候、潰百姓故近年散田ニ仕来候

御年寄中被申候ハ、喜右衛門田地之儀只今迄散田ニ仕来り候ハ、其通ニ致置候へと被申渡候

一同断福岡村五郎兵衛田地貳反余御座候、可被 召上候哉

御年寄中被申候ハ、五郎兵衛田地ハ払候て、郡御用ニ致候へと被申渡候

一山田庄村又市と申者、同村小左衛門と申百姓家来筋ニ而御座候、常々病氣者ニ而奉公も不罷成、乞食仕候、然ニ近頃江戸へ罷越、日用なと仕居申候、名寄帳消シ申度と村之者共奉願候

御年寄中被申候ハ、先其通ニ致置、又市行衛可承由被申渡候

一鶴海村次郎兵衛と申者、牛窓村ノ池へ身をなけ相果居申候を見付、極月廿九日私へ相断候、早々死骸改申候、疵も無御座候、此者病氣者故、田畠売、近年日用なと仕候、在所を罷出、先方先江日用ニあるき申候、何之うさん成儀も無御座与一類共申二付、葬申付候、已上

正月廿九日

右之通御年寄中聞届被申候へとも評定も無之

同日

一同人書出シ

一惣御役人上道沼新田砂川御普請へ御雇借之由、然共頃日雨ニ而水支、御普請成間敷哉与横井次郎左衛門申候、弥其通御座候者、右之御役人共邑久郡磯上谷川溝筋御普請申付度奉存候、彼溝下福里新田へ悪水流込、毎年水損、取分去年高八、九百石速与捨り申候、日用米ニ而成共被仰付、大キ成御徳御普請と存候、右之品ニ付去冬中村治左衛門を申請見分仕候、是以私同意ニ存候由申候

御年寄中被申候ハ、次郎左衛門方へ可遣と申、小右衛門郡へ遣し中間敷与中段如何ニ候得共、諸郡共ニ差支候、急之御普請所有之由藤岡内助申候上ハ、邑久郡へ御雇ニ遣し申義難成、諸郡へ割遣シ候間、其通相意得申様ニと被申渡候

一邑久郡飢人育入用取早無御座ニ付、御売米之儀取前中間月番方迄申越、其節相窺候へハ、取早無御座候由被仰之旨申越、承知仕候、米相場日々ニ上り尔今得救不申候、御当地にて米高直ニ買銀不足候へハ迎、御上御苦身ニ罷成候、何とそ少ニ而も米下直ニ求、御上御苦勞ニ不罷成様ニと存候ニ付而、又奉窺候、同者御払米申請代銀指上候様ニと奉願候、已上

正月廿九日

村田小右衛門

御年寄中被申候ハ、御払米無之候へハ無了簡候由被申候

同日

一尾関弥五左衛門書付三通出し申候

口上

一木目村之与七と申者、四年以前迄給銀百目宛ニ三年抱申候、就夫

天和元年 御留帳評定書

去年十二月初頃ニ私所へ参、又奉公仕度候間抱くれ候へと申ニ付、給銀七拾目ニ相定、内三拾式匁前銀遣し可申候間、庄屋之請狀取参候へと申渡候へハ、木目村へ罷戻、同十三日ニ請狀調持参申候得共、私なたやな借り銀存之程調不申候ニ付、自分之御年貢さへ調兼申候故、前銀取申奉公人抱申儀成不申候間、何方へ成共奉公間候へと申候得者、其俣木目村江戻り申候、其刻若年内ニ前銀取不申候ハ、何時成共参候へ、抱可申と申候へハ、又廿七日ニ参、前銀取不申奉公可仕与申ニ付、置申候、然処ニ今月七日ニ正月礼ニ木目村へ参申候、今日なとハ戻り可申与存居申候処ニ、木目村ニ而相果申由被為仰聞ニ付、承申候、右之通私所ニ而ハ何之様子も無御座候、以上

小串村

延宝九年正月十一日

又太夫

右之通相違無御座候、已上

同村庄屋

市兵衛

尾関弥五左衛門様

口上

一木目村与七と申者、去暮る小串村又大夫へ奉公仕居申処ニ、当月七日ニ木目村へ罷歸、從弟ノ小左衛門方へ参候、小左衛門申候ハ、其方家へ歸り申か又ハ兄弟仁右衛門へ参候ハて、何とて此方へ参候そと申候へハ、与七申候ハ、又大夫殿ニ前々居申時分之様ニ奉公も得不仕候故、安キ奉公も有之候ハ、仕候へと被申候故、罷歸候ニ付、兄仁右衛門江参候ても無奉公仕申か又ハ如何様成儀ニ而罷歸候そ、未進銀も急キ申候と申、しかり可申と存、不参と申候、

我家江歸度候へとも女房も飢申躰三候へハ、扶持方もあてかい候へと申せかミ可申与与七郎申候故、小左衛門方ニ而夕食くわせ申候へハ、給候て罷出、万袋一ツ枕箱一ツ宿江なけ込、兄之仁右衛門方へ參申候、仁右衛門茶など吞せ申候へハ、程無ク宿へ歸申候、扱九日之昼時分、組頭長左衛門方へ与七・仁右衛門・小左衛門呼寄、与七ハ礼ニ參候か又ハ暇囉戻り申様ニも見へ申候、いかゝ候哉と尋候へハ、与七申候ハ、腰を痛こゑなども得持不申、前々ノ様ニ奉公も得不仕候故、又大夫殿方左様ニ候ハ、先宿へ歸り養生仕談合致候得と又大夫殿被申候と申候、長左衛門申候ハ、左様ニ候ハ、給銀ヲ下り候て奉公仕候へ、何分ニもいそき小串へ歸り候へと申候、十日之昼九ツ時分ニくひ括り申候、其時分女房ハ蕪ツ

ミニ參申候、世倅ハ山へ參居申候と女房申候、兄仁右衛門与七屋敷近所へ參、麦之こうさく仕居申、与七ハ小串へ戻り不申かと存、与七家へ參候へハ、右之仕合に而御座候故、早々なわをとき申候、ふがんに罷成奉公も得不仕、未進銀も調不申候故、是を難義ニ存、相果申たるかと女房一門共組頭共申候御事

延宝九年正月十一日

木目村庄や

助左衛門

同年寄

惣左衛門

尾関弥五左衛門様

御年寄中被申候ハ、弥五左衛門遂吟味、与七村所一門共無別儀由申上ハ、其通と被申候

口上

一弘岡村小兵衛男子六歳十疋、方々へ養子牛飼ニ遣シ申候へ共、先々ニ而盜仕ニ付、先方ニも置不申、うろたへ弘岡村へ戻り家々江はいり盜仕申候ヲ、正月廿二日親小兵衛捕、しはり申候得ハ相果申候御事

延宝九年正月廿三日

庄屋

五郎右衛門

尾関弥五左衛門様

御年寄中被申候ハ、小兵衛義世倅をこらしめの為と申ながら括殺候段不届者ニ候、追込置候へと被申渡候

同日

一同人申候、頓而公儀巡見衆御廻り可被成由、先年も絵図御用と被仰候由承伝候、其時分絵図無之もめ申由ニ御座候間、絵図用意仕置申度候、先奉行方之伝りの絵図も無之、村田小右衛門ニ先年之扣有之候哉と相尋候得共、無之由申候、御納戸ニ御座候絵図を御かし被成候ハ、写置申度由申候

御年寄中被申候ハ、尤ニ候間用意仕置候へ、御納戸ニ有之候哉相尋可申渡由被申候

同日

一同人申候、岡山町と北浦村家公事之儀、下ニ而事済不申候間、取前差上候書付之趣、御穿鑿被仰付被下候様ニと申候
御年寄中追而御聞可有之由被申候

同日

一同人申候、来月末毎惣郡奉行寄合仕候得共、此度寄合申次手二事
済シ、来月之寄合ハ飢人旁何も手前を取込申候間、延可申と申談
候由申候

其通ニ仕候へと御年寄中被申候

同日

一同人申候、郡々式儀取之御小人御切米、郡ニ残シ有之御米ニ而
差次ニ可被仰付候哉

其通ニ致候へと御年寄中被申渡候

同日

一同人申候、御役人毎三月ニ御出シ被成候得共、当年之義御座候間、
来月御出シ被下候様ニ惣郡奉行申上候

来月御出シ可有由、御年寄中被申渡候

同日

一広内権右衛門申候、式儀取之御小人切米、御残シ米ニ而差次申様
ニと尾関弥五左衛門ニ被仰聞候得共、口津高二ハ御残シ米無御座
候由申候

御年寄中被申候ハ、御残シ米無之候ハ、御蔵方相渡し可
申由被申渡候

同日

一横井次郎左衛門書出シ申候
一奥口上道郡只今迄ハ飢人ニ御米相渡し育申候得共、少又粥を焼育

天和元年 御留帳評定書

申度奉存候、口上道郡ハ敷無御座候間、瓶井龍口之御林ニ而松枝
一曲輪宛被下、又ハ下刈御免シ被成候ハ、かゆたかせ可申候、
奥上道郡ハ御蔵給所共ニ百姓自林ニて松枝おろさせ薪ニ仕せ可申
哉之御事

酉ノ正月廿九日

横井次郎左衛門

次郎左衛門申候、飢人共養ひ申粥たき場三ヶ所ニ申付候て様
子見可申由申候、松木も五、六拾本可被下候、小屋かけ申垣
之杭ニ仕義ニ御座候由申候

御年寄中山奉行共手前聞届、追而可申渡由被申候

同日

一同人申候、最前広谷村之盗申蕪種買申西大寺之次郎右衛門、蕪種
者盗れ申者方へ返させ可申候、相渡申代銀之内一匁五分と米貳升
ハ、盗れ申者之方々次郎右衛門方江出させ可申候哉

御年寄中其通ニ致候へと被申渡候

同日

一寺沢藤左衛門・笠井太郎兵衛申候、先年飢人多キ時分御野口上道
両郡共ニ小魚取申義御免被成候、此度も御免被成可被下由申候

御年寄中被申候ハ、苦ケル間敷候間、取せ申様ニと被申渡候

同日

一春田十兵衛申候、飢人救之為砂取之御普請所磐梨郡之内八ヶ所申
付見可申候、実ニ無之飢人共茂可有之候、見計可申付候、長福寺
などハ村中惣借りニ仕候て、公儀飢ふちハ申請間敷由申候

同日

一同人火事人之書付出シ申候ハ、此者庄屋仕すり切申者、殊ニ岡山江御用ニ罷出、下人式人御座候、麦之相打ニ罷出申跡ニ而御座候ヘ者、家財不残焼申候、帳箱計出シ申候、ちと心付を茂不仕候てハ、うゑ人ほとにも成可申候、御法之義ニ御座候故、御ふちかた被下候様ニとハ不被申上候、何とそ取続申様ニ申付度由申候

御年寄中被申候ハ、御法之義ニ候故、被仰付様も無之候由被申候

同日

一同人書出シ

一磐梨郡佐伯之内田尻村庄屋半兵衛、昨廿八日昼四ツ時分ニかまとの上方火出、三間七間之家焼失仕候、かまとの上す、ニ火付申かと申候、庄屋ハ切手書替ニ廿六日ノ岡山へ罷出、宿ニ居不申候、已上

正月廿九日

春田十兵衛

同日

一上嶋彦次郎火事人之書付出シ申候

岩田村火事人書上

田畠畝数六反五畝拾五歩 高九石八斗五升

一式間ニ五間ノ家 人数四人

喜兵衛

右者正月十四日之夜五ツ半時ニくとの脇方もゑ出、焼失仕候、類火無御座候、已上

赤坂郡岩田村庄屋

延宝九年正月十五日

上嶋彦次郎様

又 六

同日

一同人申候、頃日太田又七ノ郡之樋を改書付出シ申様ニと申越候へとも、只今郡奉行飢人旁取込申時分ニ候間、御延被下候様にと惣郡奉行中申由申候

御年寄中被申候ハ、急ニ無之所ハ追而書出シ申様ニ致シ候得と被申渡候

同日

一同人申候、御延米有之候得共、此取立可仕様無御座候、飢人育ながら御普請所取立可申候、うゑ人之普請之儀ニ候間、遠方者成申間敷候、幾所ニも取立可申由申候

津田重次郎申候ハ、うゑ人之普請ニてハはかく、敷事も有之間敷候、飢人ニ普請申付候様ニ聞え候段も如何ニ候、麦迄相待手強成申時分普請申付候てはいかゝ可有之哉と申候

御年寄中被申候ハ、十二郎・服部与三右衛門・彦次郎相談之上にて裁判申付候へと被申渡候

同日

一小林孫七郎口上書差出シ

一粥煮申薪調候てハ過分之儀ニ御座候間、御林ニ而下刈餓人共江申付、刈せ候而見合ニ御扶持方米遣申度奉存候事、粥場四ヶ所ニ可仕候

正月廿九日

小林孫七郎

御年寄中下刈申付候様ニと被申渡候

同日

一太田又七申候、石関之御番所出来仕候、白土ニ可仕候哉、何方江相渡し可申候哉と申候

御年寄中被申候ハ、雨当り申所ニて候間、白土ニ可仕候、渡し申方者塩川吉大夫へ相渡し候へと被申渡候

同日

一同人申候、釘直段入札ニ申付能程直段下り申候、其内同様ニ札入申者も御座候、是ハ月替りニ可申付由申候

御年寄中被申候ハ、其通ニ申付候得、奥山市兵衛方江茂其通申通し候へと被申渡候

同日

一同人申候、高木左大夫メ判仕置候分見合、私判可仕由申候
御年寄中其通ニ仕候へと被申渡候

同日

一左門塩川吉大夫江被申渡候ハ、一條様江戸へ御越被成候ニ付、御留守江御徒并之者五人御雇被成候、御歩行一円無之候間、渡瀬儀左衛門・村山吉右衛門兩人可申渡候、来月八日何茂発足仕候へと可申渡由被申渡候

同日

一同人寺沢藤左衛門江右同断ニ被申渡、渡部忠右衛門右一所ニ遣し申様ニと被申渡候

同日

一同人御横目共江右同断被申渡、松村甚助・松原新兵衛右一所ニ遣し申様ニと被申渡候

二月十日

近藤寛兵衛番

一笠井太郎兵衛申候、平瀬井関買石七拾坪入申候、調申度由申上候
御年寄中被申候ハ、手前よし運上銀ニ而相調可被申候、已後者いかやうとも又可被申付由被申渡候

同日

一同人申候、新福村孫右衛門代り浜田村之久大夫当分可申付候哉と申候

御年寄中被申候ハ、先其方下ニ而諸事御用申付、弥肝煎之器用も有之候ハ、重而可被申出候由被申候

同日

一尾関弥五左衛門月番ニ付、上嶋彦次郎方油津里村彦兵衛と申者首括り候書付差出申候

油津里村五郎右衛門口上

一彦兵衛首括り居申ヲ見出シ申儀ハ如何様之様子と御尋被成候、一両日前ニ彦兵衛ない置申縄三本借り候て遣申ニ付、其縄返シ申込

二月三日四ツ時分ニ彦兵衛所江持参仕候へハ、戸少明居申ニ付、内へはいり見申候へハ、首括り居申ニ付、けてん致シ隣之仁右衛門呼出シ様子見せ、式人と仕、早々庄屋三郎右衛門方へ申遣、縄を切落申候、庄屋年寄参様子見届被申候、其外何之子細も私共ハ存知不申候

一仁右衛門隣ニ而有之候間、内々ノ様子存知寄ハ無御座哉と御尋被成候得共、常々何之子細茂承不申候、已上

油津里村

延宝九年二月四日

五郎右衛門

同村

仁右衛門

右之通遂吟味、口上書仕せ相違無御座候、已上

齋富村肝煎庄や

惣四郎

上嶋彦次郎様

油津里村庄屋年寄口上

一彦兵衛首括り相果申儀、二月三日四ツ時分ニ五郎右衛門・仁右衛門見出シ、早々私共方へ注進仕申ニ付、罷出、首括り申次第吟味仕見申候得共、何之手疵も無御座候ニ付、兄弟八郎右衛門・弥三右衛門ニ如何様之様子ニ而括り候哉存寄之儀ハ無之かと吟味仕候得共、口上書指上ケ申通ニ御座候ニ付、近所之者共ニも様子相尋申候へ共、如何様之首尾首括り申茂不存之由申候、彦兵衛義彦人身ニて居申候ニ付、飢ニ及申故首くゝり候かと御尋被成候得共、兄弟八郎右衛門・弥三右衛門ハ御断申上、御ふち方囉遣申候へ共、此彦兵衛儀ハ禅門仕、旧冬方々はちをひらき廻り申ニ付、もら

いたため置申物少ハ御座候て、当分ニ飢申共相見不申、其上彦兵衛方方も御扶持方囉くれ候へとも不申ニ付、只今迄御断不申上候御事

油津里村庄や

延宝九年二月四日

三郎右衛門

同村年寄

助兵衛

同断

源兵衛

右之通遂吟味、口上書仕せ相違無御座候、以上

齋富村肝煎庄屋

惣四郎

上嶋彦次郎様

油津里村彦兵衛組頭口上

一彦兵衛首括り相果申ニ付、存寄之儀無之哉と御尋被成候得共、如何様之儀ニ而首括り申事も存当り之儀ハ無御座候、彦兵衛儀彦人者ニて居申候ニ付、飢申故首括り申かと御吟味被成候得共、私見及申処、当分ニ給物無御座候共相見不申、彦兵衛方々飢申断も不申参候故、飢申との御断も可仕様無御座候御事

油津里村五人組頭

延宝九年二月四日

長左衛門

右之通遂吟味、口上書仕せ相違無御座候、已上

齋富村肝煎庄屋

惣四郎

上嶋彦次郎様

油津里村八郎右衛門・弥三右衛門口上

一私共兄弟彦兵衛首括り相果居申由にて、二月三日四ツ時分仁右衛門・五郎右衛門方申越候二付、早々私共罷出様子見申候へハ、首括り相果居申候、其外何之手疵も無御座候、彦兵衛儀首括り相果申二付、何之存寄不審成儀も無御座候哉と御吟味被成候得共、何之存寄茂無御座候、彦兵衛儀不仕合者二而成人成子共三人相果女も相果申候、養子仕候得共、役二立不申候故、在所へ戻シ申候、少御座候田地も速与売申、壹人身二罷成、何共渡世難送候間、私共二養ひくれ候へと去春申候得共、私共申候ハ、自分ノ子共多ク在之候二付、養ひ申儀も只今ハ難成候、乍去子共成人仕候ハ、養イ申様ニ可仕と力を付候得共、とかくさまをかへ口過可仕と申、去年方禪門二罷成居申候、自然給物無之候二付、首括り相果申候哉と御尋被成候、彦兵衛私共二正月廿日ニ申候ハ、御扶持方囉度由申二付、私共申候ハ、禪門二罷成方々打廻りもらいため置申物御座候故、当分ニ給物無御座候共相見不申候間、御断之儀ハ追而申上候へと申候へハ、其方共次第と申、其後者何共不申候、相果申候後入物など見申候へハ、つき米三、四合も御座候二付、飢ニ及、ケ様ニ仕候共存知不申候、其外何之存寄も無御座候、彦兵衛歳七十二罷成申候、已上

延宝九年二月四日

油津里村

八郎右衛門

弥三右衛門

右之通遂吟味、口上書仕せ相違無御座候、已上

齋富村肝煎庄や

惣四郎

上嶋彦次郎様

御年寄中被申候ハ、彦兵衛首括り候儀、此書付之通二候へハ、別条も無之事二候、然共只今之時節故、飢申二付首括り申二てハ無之との申分ケ第一ニ聞へ候、外ニ不審成義無之との義今一往彦二郎方へ申遣し、別義無之候ハ、其通ニ仕置候へと弥五左衛門方より申遣し候へと被申渡候

同日

一尾関弥五左衛門申候、横井次郎左衛門方方飢人粥場之薪ニ仕候松枝之儀并瓶井龍口下刈、飢人御救ニ被仰付被下候様ニと申越候由申候

同日

御年寄中被申候ハ、かゆ場之松枝之儀山奉行中ニ被仰付候束数二而入用積り請取可被申候、下刈之義ハ右両所之山さのミ下草も無之、かり候ても百姓共御たすけニも成申間敷候間、先無用ニ可仕由、右之通申遣候へと被申渡候

一同人申候、広内権右衛門方方も取前申上候通、半田山道より西下刈被仰付被下候様ニと申越候由申候

御年寄中被申候ハ、山奉行中様子相尋候へハ、下刈致候ても御林之構ニも成不申候由、乍去小松共伐候へハ御林之為ニ悪敷候間、山奉行中江権右衛門申談、より能様ニ仕、下刈可申付由、権右衛門郡此度飢人村育ノ書付諸郡ニ勝れ大分在之候、百姓共習も能第一権右衛門裁判能様ニ相聞候、然上権右衛門望之通ニ被仰付候、委細者小仕置中権右衛門方へ可申

參候得共、猶又其方々申遣候へと弥五左衛門へ被申渡候

同日

一宮本小兵衛・永井権助申候、獵船小平田運上取立、只今まで二季
二相定居申候故、下二而舟之持かへ差支、運上銀滞り申候、高瀬
船八月わり二運上取立申候故、取立仕能候故、小平田獵船共二月
わり二取立申様二可被仰付可被下哉と申候

御年寄中被申候ハ、兩人申分も相聞候へとも、又船手二而
何とそ様子も有之候半哉、小仕置中御船手ヲ聞合可被申候、
重而指図可在之由被申候

同日

一中村治左衛門石屋次兵衛願之書付差出申候

同日

口上之覺

一石屋次兵衛手前御石御用被為 仰付候節、上方石切共一日壹人二
付賃銀三匁宛ニ相究り被遣候、此内ニ而其くニ賃銀遣シ外ニ扶
持方米雜用賄仕候、并のミ焼羽かね炭朶をも調申義ニ御座候、此
賃銀御定ハ先年和意谷御用ニ付始而大坂を罷下り候刻御究被遊
候、其節ハ米下直ニ御座候得共、去年より直段高直ニ罷成候故、
賃銀不足御座候而迷惑ニ奉存候旨、今少代銀御増被成被下候様ニ
と次兵衛私共迄へ断申儀ニ御座候、已上

二月十日

中村治左衛門

藤岡内介

此段色々儀有之、賃銀之儀御増被下候ハ、諸職人之障
りにも成可申候哉、次兵衛迷惑仕段も尤二候、何とそ外ニ御
ほうひ被遣、賃銀之儀ハ御構無之も能候半哉と何茂申候

御年寄中被申候ハ、次兵衛義取前も御ほうひ被遣候様ニ覺候
間、川村平太兵衛方御留帳見合可申由、平太兵衛ニ被申渡候

二月廿一日

一上嶋彦次郎窺之書付差出

乍恐言上

一御国之内赤坂郡佐野村山ニろうは土御座候二付、去秋けんほ屋市
左衛門罷下り御断申上、御免シ被為成、ろうはせんし申候得共、
無之由ニ而罷上り申候、此市左衛門ろうはせんし申事無案内ニ而
無之と申上候二付、私罷下り様子見申候得ハ、成程能ろうは御座
候間、被為仰付被為下候ハ、有難可奉存候、御運上之儀ろうは
百斤二付銀子七匁宛無相違指上ケ可申候、以上

大坂北浜本竹屋町柳屋

延宝九年二月十五日

三大夫

上嶋彦次郎様

右之願書岸織部日置左門江見せ申候処、けんほや市左衛門ニ
御僉儀之上ニ而被仰付候、其ニ替義も無之候、けんほや市左
衛門手前致僉儀、何之障りも無之由彦次郎申上者、三大夫ニ
申付候様ニと被申渡之旨、織部彦次郎ニ申渡ス

二月廿六日 日置左門宅ニ而内寄合

一上嶋彦次郎方々之差出シ、広内権右衛門月番出ス

立川村火事人書上

田畠畝数貳町五畝 高三拾五石壹斗七升

一貳間半八間ノ家 人数九人 火本 長左衛門

田畠畝数貳町八反貳畝廿七步 高四拾六石壹斗六升

一貳間半八間半ノ家 人数九人 類火 八右衛門

田畠畝数七反八畝拾九步 高拾三石七斗貳升五合

一貳間五間ノ家 人数六人 類火 五兵衛

右ハ二月廿四日之夜四ツ時分、釜ノ後ハ火出、自火ニ而焼失仕候、以上

赤坂郡立川村庄屋

延宝九年二月廿五日

六右衛門

上嶋 彦次郎様

類火人ニ御法之通御ふちかた遣シ候様ニ、権右衛門方彦次郎方へ申遣候へと日置左門被申渡ル

同日

一 芹川与右衛門方之差出シ

申上ル覚

一 菊と申女私共妹ニ而御座候、久保村太郎兵衛女ニ去五月遣シ、当正月八日ニ夫太郎兵衛氣ニ入不申候哉、何之別義も無御座、暇遣シ申候、此方へ罷歸候て母私共其外家内之者共とも言葉いさかいも仕不申候、今日四ツ時分ニ私共も野江罷出、母者隣ノ家へ用事候て参、其外私妻子共野ツミな致シニ罷出留主ニ、右之菊壺人家ニ罷有、紙を漉居申候、母宿江婦見申候得ハ、菊物置ニ首括り息絶居申候、右之様子ニ御座候得者、くひくゝり申埒何之存知当り

天和元年 御留帳評定書

毛頭無御座候、不計氣違申候て之儀と被奉存候、家内之者ハ不及申上三何へ対候ても少茂不審申分無御座候、尤家内之者と仕打殺シ候て偽を申上、右之通之相果様と申上候者、私共如何様共曲事ニ可被為仰付候、為後日口状書如件

九谷村菊兄

延宝九年二月廿二日

長 助

同

仁左衛門

右之菊首括り相果様色々穿鑿仕候得共、少も不審無御座候、兄長助・仁左衛門口状書之通相違無御座候、首括り候儀少ハ存知当も御座候へとも、其段隠置、此度不申上候と後日ニ御聞被為成候者、私共如何様共可被為 仰付候、為其奥書如件

九谷村庄や

延宝九年二月廿二日

七 兵衛

同村年寄

久 七

同村組頭

二郎兵衛

芹川与右衛門様

同日

一同人差出シ

口上書上覚

一 野原村久藏世倅作兵衛と申者、去暮方上田村助右衛門と申者ニ奉公仕居申候所ニ、腫物相煩申ニ付暇遣候へハ、十力村ニ母居申ニ付、

母方へ参候而申候ハ、腫物相煩奉公も難成御座候由告申候故、母申候ハ、上田村江戻り候へと申候て戻シ申候へ共、上田村助右衛門方ニも病人之義ニ御座候故、抱申事成不申由ニ而当月朔日ニ又母方へ参、同五日ニ備中庚申へ参申候逆罷出、其後者逢不申、奉公かせき申哉と奉存居申候処ニ、野原村池へ身をなけ申躰ニ而ふところニ石三ツ入、相果居申候、昨廿三日ニ死骸浮上り申候ヲ見出し御注進申上候、右之通ニ御座候故、身をなけ申様子若存寄之者も御座候哉と重々吟味仕候得共、村中ニおゐて毛頭存寄之者も又ハ右之作兵衛と言葉論仕候者も無御座候、作兵衛父母手前も念を入相尋申候得共、有残成儀少茂無御座候由申候、以上

野原村庄屋

延宝九年二月廿四日

忠兵衛

下加茂村十村肝煎

次右衛門

芹川与右衛門様

同日

一尾関弥五左衛門差出し

口上書

一当村角助と申者、去年霜月廿日頃方煩出シ、ひたと曰々腹ヲこわらかし煩申候、病氣を苦ニ仕、当二月朔日ニ妻子オハ近所之兄惣右衛門所江用之儀申遣、跡ニ而かミそりを以自害仕り居申候処へ、兄惣右衛門所ニ居申妹ニ而御座候者、角介所江参申候へハ、右之通ニ仕居申候ヲ見付、わめき申ニ付、兄惣右衛門所へ参申候女房も我所江かけ戻り、兄惣右衛門も懸付見申候へハ、未存命ニ相見

申ニ付、とかく仕処へ、庄屋年寄近所之者迄もかけ合、様々看病致シ、早々備中笹沖ニ居申休閑と申医者を呼、薬など服用仕せ置、御郡奉行様御代官様肝煎庄屋迄も注進申上候得者、早々御代官様肝煎庄屋御出、委細御吟味被成、角介口上ヲも御尋被成、私共角助申候も、弥病氣を苦ニ致シ、右之通存切申由ニ御座候、私共存候も、常々之意趣有之様子も無御座候上者、外ニ有残成存義少茂無御座候、兎角病氣ヲ苦ニ仕故と奉存候、当春之儀ニ御座候へハ、勝手迷惑仕候故、正月早々御扶持方も申請遣し候、一門共もとやかくつゝけ候得者、飢死仕埒ニ而も無御座候、右之通御代官様十村肝煎庄屋直ニ御吟味御聞届ケ被成候通ニ御座候、種々念入看病仕候得共、終ニ本復不仕、二月十日ニ相果申候、以上

福田村親

延宝九年二月十二日

与兵衛

兄

惣右衛門

同村庄屋

二郎兵衛

同村年寄

作兵衛

同村組頭

甚兵衛

同

一郎兵衛

同

五兵衛

右之通角助存命之内早々罷越吟味仕、前書之通相違無御座候、已上

鞭木村肝煎庄屋

八郎左衛門

尾関弥五左衛門様

前書之通早々私方へも注進申来候処、御自分岡山御用番にて候故、私ニ早々罷越吟味仕候様ニと被仰聞候故、角介存命之内早々遂吟味候処ニ、前書之通相違無之、有残成儀も無御座候、已上

中村弥右衛門

同日

一横井次郎左衛門方之書出し

一上道両郡之内田方虫指枯申候所多ク御座候、去秋ハ大分枯申候間、当年者太唐植申度と願申候、可被仰付候哉、口上道之畝数九拾四町、此高千七百九拾八石、奥上道之畝数百六町、此高千七百四拾石御座候

願之通ニ可申付由左門被申渡ル

一奥上道藤井・鉄両村馬繼ニて御座候ニ付、唯今迄ハ随分申付ケ、馬持せ申候へとも、最早馬持共勝手続不申候間、飼料少御借被下候様ニと申上候、如何可被仰付哉之事

二月廿六日

横井次郎左衛門

馬之義ハ津田十次郎手前方内証かし可仕由被申渡候

同日

一笠井太郎兵衛書付差出シ

天和元年 御留帳評定書

一当町近所之村々江町人出作之畠返シ申候、百姓共畠大分者作り兼申ニ付、田成三願申候、如何可仕候哉

二月廿六日

笠井太郎兵衛

先右之通ニ差置候へと左門被申渡ル

同日

一尾関弥五左衛門口上書

一当春痛ニ付百姓ニおひしと行詰り糶種致不足、漸時分ニ罷成候得共、何共可仕様無之由数々申出候、去共当春之義 上御手支之時分ニ候へハ、可被仰付存寄も無之候間、随分田畠才も売代かへ候て成共用意仕候へ、此方方兎角可申付品も無之候間、迎も根付仕候ハてハ成不申義ニ候へハ、急度糶種も用意仕候様ニと追かけ置候へとも、作之手立随分仕見、是非難成時ハ田地差上ケ申方外者可仕様茂無之由申者共御座候、日来ハケ様之義申出候へハ、惣作ニも申付、又ハ少之儀ハ村方もとやかく根付仕候へとも、当春之儀ニ候へハ、村ニ而とやかく仕者も漸々銘々ノ種物ならてハ貯無之年ニ候へハ、村江追かけ置候ても、身前ニ忌布いたし、迎も根付快ク仕候事難成模様ニ相見申候、田畠売可申と申候へハ、ケ様ニ糶種迄もすくい申様成百姓者、作徳有之田地八年々ニ売はたし、残ル悪田計持居申儀ニ候へハ、何程下直ニ売可申と申候ても買手一円無御座候故、何共可仕様無之跡ニ御座候、ケ様成至極之者ニハ御米にても御銀ニ而も御救被遣、御百姓ニ取続申様ニ仕度奉存候、当年之儀ニ候へハ、縦村へ追かけ是非惣作又ハ割地ニ申付候ても、身前難義ニ及居申上ハ、迎も不作仕ニ而可有御座候、左候へハ或ハ加損又ハ御検見ニ而大分御物成捨り、万一荒申様成

義も出来候へハ、以ハ御損ニ奉存候、右至極之草臥者共之田地、尤惡田とハ乍申、自分作ニ仕候者惣作ハ手入も能、御物成之捨り実ハ少ク、其身も御百姓ニ取続申ニて御座候、此段乍憚御了簡被為成、飢御扶持方と御名付候てなり共御救奉願候、左候ハ、至極之者共吟味之上ニ而少宛も遣シ、何とぞ取続申度奉存候、右之趣御手支之節ニ候へ共、児嶋郡ニハ貯物も無御座候、少御座候をも飢扶持調、只今何共可仕様も無御座故、申上義ニ御座候、以上

二月廿二日

尾関弥五左衛門

粃種之事ハ何共難被成候、余郡にも若ケ様之類も候ハ、成不申段広内権右衛門方申触候様ニと日置左門被申渡ル

同日

一笠井太郎兵衛差出シ

御野郡津嶋村六右衛門口上

一六右衛門女房備中庭瀬領之内ひはた村三右衛門と申者妹ニ而御座候、十九年以前夫夫婦ニ罷成申候

一六右衛門近年かさを煩、当年者見苦敷罷成申候故、子共四人御座候へとも暇を頻ニ乞申候、当月十一日ニ在所江参戻り不申候、六右衛門迎ニ参候得共、戻り不申候ニ付、六右衛門弟娚迎ニ参候得共、戻り不申候処ニ、廿日ニ女房道具を取ニ戻り申候、六右衛門兎角堪忍難成指殺シ、六右衛門も腹切申候、とゝめさし申所ヲ親おさへ取申候故、未死不申候、女房ニ付不義有之ニ而も村中へ恨有之ニ而も毛頭無御座由申候、六右衛門病氣ニ付不及是非、右之通仕由ニ御座候

一親六兵衛 歳七十二 一六右衛門 歳四十一

一女房 歳三十八 一子太郎 歳十七

一娘女郎 歳十四 一子三 歳十壹

一娘万 歳八

一弟六蔵 歳三十 此者市場村ニ作仕居申候

延宝九年二月廿三日

此段左門被申候ハ、女房庭瀬領之事ニ候間、広内権右衛門方庭瀬へ右之趣申遣、申分も無之候哉、返事取候様ニと被申渡候、権右衛門方一ノ宮村庄屋九郎左衛門ヲ以備中宮内庄屋清左衛門方へ申遣候処、清左衛門方返事口上之趣御留帳雜ノ部ニ具ニ有之

二月晦日

下濃宇兵衛番

一寺沢藤左衛門申候、在々烏はひこり、諸鳥ノ玉子を取、作物なども殊外荒シ申ニ付、兼而巢を落シ捨、或ハ鉄炮ニ而も打申様ニ被仰付候へとも、怠り申様ニ承候間、弥右之通被仰付候様ニ奉存旨窺申候

御年寄中被申候ハ、右ノ通ニ藤左衛門方申付候様ニと被申渡候、然とも在々役ニ懸り不申候様ニ透々ニ巢を落シ候様ニと被申候

同日

一太田又七書付差出

一権現様御拜殿屋根打越六間半横四間両妻登り式間ニ四間葺替

一御幣殿屋根打越四間半横式間半北ノ妻登り壹間よこ三間半葺替

坪数合五拾貳坪

一四拾間兩御殿上軒惣廻り破風しな板共厚貳寸五分ツ、但下軒厚五寸しやはしら共所々繕

木数千三百三拾挺、榎木長三尺五寸木口五寸四寸ニメ

一御拝殿箱棟損シ申候事

一御供所屋根打越六間横六間

坪数合三拾六坪

木数百八拾四挺

榎番

御年寄中被申候ハ、先当年之繕ニ仕置候へと被申渡候

同日

一同人差出し

一二之丸御風呂屋板鋪仕直シ之事

一同所釜所瓦屋根仕直シ之事

一同所打縁大小五ヶ所仕直シ、其外かき縁共仕直シ之事

一同所御菓子部屋東之方中敷居ヲ内へ入仕直シ、同向之方部板仕事

一同所御茶部屋東ノ方ニ口新規ニ明申事

一同所之前濡縁新ニ仕足シ之事

一御台所くと所之上四坪天井新ニ仕事

一同所之板之間繕之事

一同所水掛樋仕直シ之事

一同所濡縁ヲ樽縁ニ仕直シ之事

一御医者部屋ノ口新ニ明申事

一御泉水上塗仕事

一御庭之内萩垣仕直シ之事

一御居間御寢間屋根葺替足留り共仕直、其外ハ瓦屋根共繕之事

二月廿七日

太田 又七

御年寄中被申候ハ、先新規之分ハ相止可然候、先規繕之分ハ此通ニ可仕候、此内御居間ノ屋根葺替無用ニ候、繕ニ仕もり不申候様ニ可仕候、権現様御宮所々破損も当年者繕ニ被成被置事ニ候へハ、御居間之屋根も繕ニ仕可然と被申候

同日

一塩川吉大夫差出し

一御城御居間其外之屋根所々損シ大分御座候、御風呂屋御台所廻り所々損シ御座候

一御納戸後北ノ御矢倉屋根大キニ損シ申候

一御医者部屋外へ之口好ミ被申候

一御玄冠^(四)後へ之口戸損シ立不申所ニ、三ヶ所御座候、其外縁方損シ申候

一御賄所之東馬場口御門とひら一方下りひしと立不申候

一御馬屋へ之口ひらき戸損シ、又東へ之口戸損シ申候、堺目之堀も破損仕候

一東ノうら御門近辺覆之瓦落申所御座候

一外下馬御門一方之とひら少損シ申候

一上之町口御門御番所之西ニ堀少御座候、覆損シ落申候、以上

酉ノ二月晦日

御年寄中被申候ハ、太田又七方々書付差出シ繕之分ハ仕、新規之分ハ無用と申渡し候由被申候

同日

一 広内権右衛門月番ニ付、上嶋彦次郎・芹川与右衛門方へ申越候由
ニ而高瀬舟運上米願之書付差出

口上

一 赤坂郡奥津高口津高郡舟持共之内、高瀬御運上米上納仕義何共難
仕、行当り罷有候、当春之儀ニ候へハ、舟之働一円無御座、其上
米高直ニ御座候ニ付、日来漸渡世ヲ送り申者共只今ハ大形飢人ニ
罷成候、右之趣高瀬御奉行へ相断歎申候へ共、承引不被仕致迷惑
候、何とぞ御了簡被遊、舟をも持続候様ニ被 仰付被下候様ニと
奉願候、是非御運上可被召上候ハ、舟ヲ売少所持仕田畠を茂売
払、非人ニ成可申様ニ奉存候御事

二月晦日

広内権右衛門

御年寄中被申候ハ、高瀬運上米之儀御赦免ハ被成間敷候、
御郡奉行之心得ニ而飢不申候様ニ仕、運上米ハ取立可申由被
申渡候

同日

一 村田小右衛門差出し

乍憚申上ル口上

一 私義無調法者殊ニ無筆同前ニ御座候処ニ、福谷村ニ別ニ庄屋可仕
者無御座候迎、被為仰付候、御下ニ罷有候間、違背可仕様も無御座、
御請申上候御事

一 福谷村御百姓共殊外草臥申候、私無案内ニ御座候故、村之者ニ様
子相尋候へハ、先年洪水之節田畠岸崩、或ハ土流申候て、所々荒
地御座候ニ、御年貢出申ニ付、次第ニ御百姓共迷惑仕由ニ御座候、

此度荒地御改被為成御引被為下、発開も御座候ハ、御改被為成、
御帳面正敷仕申度奉願候、此旨小右衛門様へ宜御相談奉頼上候、
已上

福谷村庄屋

酉ノ二月廿一日

彦兵衛

山口重右衛門様

御年寄中被申候ハ、荒地之事可然申付候様ニと被申渡候

同日

一 岩根周右衛門申候、先日も申上候通、灘屋半十郎札御用相勤申義
御赦免被遊候様ニ奉願候、替りニハ高知屋庄左衛門可被仰付哉、
初々町年寄五人之内相勤申筈ニ被仰付置候間、高知屋庄左衛門前
廉も相勤申候、又此度可申付哉と申候

御年寄中被申候ハ、下ニ而申付可然由被申候

同日

一 日置左門披見被致由ニ而岸織部相渡書付

一 下市町家持吉大夫乱氣之様ニ罷成、当月廿四日之朝、則吉大夫借
屋ニ居申伊兵衛と申瓦屋祢苺、御家中へ細工ニ罷出申節、吉大夫
追掛中脇指ニ而伊兵衛肩少計疵付申候、伊兵衛かなつち持合居
申、其かなつちにて請留候時、伊兵衛指も少疵付申候、早速町
内ノ者共出合候て、脇指を取引分ケ申所へ、目代年寄罷出吟味仕
候へハ、吉大夫申分一円跡先そろわさる申分ニ而御座候、伊兵衛
ニ様子相尋候へハ、何之覚も無御座、少も意趣ケ間敷事無御座候
由申候、吉大夫義弥乱氣ニ相見え申ニ付、内証ニ而五人組共ニ申

付置候処ニ、今朝かミそりニ而自害仕候、傍ニ居申者共驚、剃刀取申候、未助り居申候得共、物申義ハ成不申候

一吉大夫兄権左衛門と申者、町内ニ居申候得共、近年不通仕構不申候

一吉大夫姉一所ニ養置候得共、当春二、三度もふち申二付、いられ不申、弟権左衛門方へ参居申候

一吉大夫姉智柄巻屋吉兵衛と申者、下ノ町ニ居申、是も不通仕由ニ而構不申候

一吉大夫女当月廿日時分ニ女之兄弟参、三歳ニ罷成候男子共引連、在所江参候

一吉大夫従弟式人町内ニ罷有候得共、是も不通仕由ニ而取合不申候
一吉大夫当年三十七歳ニ罷成候、以上

二月廿七日

目代

与七郎

年寄

源兵衛

同

喜右衛門

三月五日 日置左門宅ニ而内寄合

書物之事

一古地村弥次右衛門と申者、家内八人御座候、身躰迷惑仕すきはい何共可仕様無御座候ニ付、申ノ十二月廿六日之夜家内速与立退申候、御年貢其外何ニ而も 御公儀様江御損かけ不申候、向後古地村江罷歸申候而も何之便りも無御座候間、名才帳ヲ外し申度奉存

候、已上

延宝八年申ノ十二月廿八日

古地村庄屋

安右衛門

河合善大夫様

左門被申候ハ、此者之義先尋させ可申候、尋歸候以後追放シに茂可被仰付候由被申渡候

同日

一同人差出し

乍恐仕上口書

一水江村八右衛門と申者、田地屋敷共ニ老反余所持仕候、是も砂入田地ニ而すきはい可仕様も無御座候間、妻子弟壹人召つれ御蔵入片嶋村へ下作ニ罷出申度と奉願申候、被為遣候ハ、弟今一人御座候間、水江村ニ残シ置、右之田地遣シ可申与申候、八右衛門儀ハ先様ニ而如何様及迷惑ニ申候共、二度村江罷歸申間敷と申候御事

水江村

延宝九年二月七日

清左衛門

河合善大夫様

願之通遣し可申由左門被申渡ル

三月廿九日

山田弥太郎番

一尾関弥五左衛門差出シ

小原村弥之介欠落仕候口上

一弥之介田畠少も持不申、妻子も無之一身之者ニ而御座候、常躰心根悪鋪者ニ而御座候、当二月廿一、三日頃ニ自村六兵衛と申者之帷

子壹ツ古着物壹ツ銀札式匆取、欠落仕候、岡山天瀬町茂兵衛と申者之所江、村之者折々参宿仕候、承候得者、其以後茂兵衛所へ弥之介参、かたり言を申、扶持方米壹匆分銀札四匆九分着物壹ツ取走り申候、右之通之者ニ而御座候故、村中之者いやり申候間、其分ニ成被為置候ハ、忝可奉存候、已上

小原村庄屋

延宝九年三月五日

三郎右衛門

同村年寄

新三郎

尾関弥五左衛門様

御年寄中被申候ハ、此者之義此書付之通ニ而も御成敗も被仰付不苦者ニ候、其上先年他所ニ而指を被切歸候時分、庄屋共ハ断可申義、欠落已後断申義御法之儀ニ候ヘハ、其分トハ不成候、尋出シ申様ニ可申付由、猪右衛門被申候ハ、唯今百姓共聞敷時分ハ近辺ヲ相尋、隙之時分ハ程遠尋候様ニ可申付由被申渡候

同日

一岡助右衛門・山脇茂兵衛御勘定済目録読候て、御年寄中へ相渡し申候

同日

一久代小兵衛向十蔵寄せ前先方へ申遣候ても埒明不申儀書付差出シ申候

御年寄中被申候ハ、御年寄中小仕置方先方へ申遣し候てハ、

品ニ急度無之候てハ不成候間、先方之断之品川村平太兵衛下ニ而先承見申様ニと在之、書付平太兵衛江渡し被申候

同日

一同人申候ハ、寄せ滞之儀先々へ申遣し埒明不申分、頭々江申遣シ候得との御法ニ御座候、只今迄先奉行頭々へ申遣候儀者、一兩度も延慮仕来候、寄せ帳一通り繰申ニも中々大分之義ちやくしニ埒明不申候、左候ヘハひとと相延、私共手前ニ而延引之様ニ罷成致迷惑候、此已後其主へ申遣シ候義ヲ直ニ頭々江申遣候様ニ被仰付被下候様ニと申候

御年寄中被申候ハ、願之通以後頭々へ申遣候ハ、埒早ク明可申候間、其通可然候間、其通ニ可心得由被申渡候

同日

一井上藤助・俣野善内申候、寄せ奉行共手前人遣無之、先々へ触遣し候義致難儀候、御足輕式人御かし被下候様ニ願申候間、御渡し可被遣候

御年寄中被申候ハ、寄せ奉行手前へ人遣之為ニ相渡し候ハ、限有之間敷由被申候、善内藤介申候ハ、京都御勘定令埒明不申者多御座候、此分急ニ埒明申様ニ仕度候、此内足輕御かし被成候ハ、三十日程ニハ仕舞可申候、左候ハ、其以後者兩人相ニ老人被下、御小人にて仕廻可申由申候

同日

御年寄中被申候ハ、願之通足輕式人御かし可在由被申候

一岩根周右衛門・藤岡内助絵図を指出し、小橋東之つめ北かわの家
沢屋十右衛門買申、其屋敷北西之隅ニかけ出し作り家柱を立、水
之時分流物懸り水さゝゑ申候、此柱以来立不申様ニ申付、石垣ヲ
右之かけ出し柱之けん半分ほど築出し申様ニ可申付候、洪水之構
ニ成不申由申候

御年寄中其通ニ申付候へと被申渡候

同日

一横井次郎左衛門申候、八幡之まゆミ垣破損仕候、先年ハ高木左大
夫申付候、只今も其通ニ被仰付可被下候哉と申候

御年寄中被申候ハ、毎年繕無之ため生垣仕候、以後者枳殻垣
可然候、間ニ枳殻をうゑさせ可申候、只今之繕鈴木所左衛門
方申付候様ニと被申渡候

四月十日

下濃宇兵衛番

一俣野善内・井上藤助申候、先日頃江戸方御小人御飛脚代ニ成御絵
図入之箱持、八日着ニ参申候、江戸ニ而拾五匁之増路銀借り候て
参申候、此後も御小人御飛脚代ニ参候節、増路銀御定可被遣哉と
申候

此段僉義之上ニ而御年寄中被申候、江戸ニ而かけ取参候十五
匁ノ路銀、以後迄も相定遣し候様ニと兩人へ被申渡候

同日

一同人銀札之退札戻り札残札書付差出申候

退札壹万五百八拾九貫貳百六拾六匁八分

天和元年 御留帳評定書

戻り札八千貳百四貫四百七拾壹匁五分

残札貳千三百八拾四貫七百九拾五匁三分

札改引替作廻書付差出

五月六日方同十九日迄御家中郡々迄相済、十九日方以後ハ改印判
無之銀札取遣り停止、先立テ相触可申由触状案紙出ス

右之通ニ相触可申由左門兩人ニ被申渡ル

同日

一村田小右衛門書付一冊差出

一邑久郡虫明村二三と申者御座候、親類無御座者ニ而御座候、常々
心根悪敷者ニ而御座候、二月十七日虫明土中へ盗ニはいり申之由
にて、庄屋方如此申越候、尔今住所知不申候

一当村三と申者、歳十九ニ罷成申候、今月十七日昼当御家中岩佐安
右衛門様御長屋へ盗人ニはいり、銀札三匁錢七分合三匁七分盗取
申候、早々御見付御吟味被成、百姓共随分相尋申候へ共、何方へ
走り申候哉、行衛見へ不申候、此由岩佐安右衛門様へ申上候へハ見
え不申候ハ、其通ニ致候へと御意被成、岩佐安右衛門様御前ハ埒
明申候

虫明村庄屋

延宝九年二月廿四日

市右衛門

東須恵村

六郎兵衛様

御年寄中此者之義尋させ可申由小右衛門へ被申渡ル

一同郡佐山村九兵衛と申者、二月六日在所罷出、尔今歸り不申候、

方々尋候へ共、住所知不申候、庄屋方々如此申越候

一 佐山村九兵衛と申者、当二月三日岡山へ奉公かせきニ参と申宿ヲ罷出、同三日之夜奥上道郡室山村弟半右衛門所ニ泊り申候、同四日ニ岡山へ参候由室山村庄屋手形取置申候、佐山村又左衛門世倅助左衛門奉公かせきニ岡山へ参居申ニ付、親又左衛門書状ヲ助左衛門方へ言伝遣申候、此返事又津田十二郎様方山田十右衛門様へ之御状助左衛門方々請取、同五日之朝又左衛門ニ右式通ノ御状渡し申候、同六日昼時分身からにて宿ヲ罷出申候、方々尋候へ共、尔今有所知不申候、右之通御郡様江被仰上可被下候、以上

佐山村庄屋

延宝九年二月廿五日

彦左衛門

半右衛門

東須恵村

六郎兵衛殿

御年寄中尋させ候様ニと小右衛門江被申渡候

一同村九郎兵衛娘深溝へはいこみ相果候由承、若親及飢溝へ捨候哉と無心元存、吟味仕候、則親口上書

私娘果申ニ付申上口上覧

一 当二月廿六日ニ私者麦ノ中打仕ニ罷出、女ハ宿ニ居申、娘松三歳罷成申候、門へ罷出遊居申候処ニ、溝坪へはいり相果居申候ヲ忤孫大夫野方罷歸見付、驚引上ケ母ニ其通申候、母も驚罷出見申候へハ、最早相果申候、右之通少も相違無御座候、為後日如此御座候、已上

佐山村親

延宝九年三月朔日

九郎兵衛

右之通前廉方吟味仕候通相違無御座候、為其奥書如此御座候

佐山村庄屋

彦左衛門

半右衛門

年寄

孫右衛門

組頭

六郎左衛門

一同郡西須恵村源十郎と申者、二月晦日ニ氣違自害仕候、百姓見付様子相尋候へハ、何とぞ養生仕くれ候へと計申候、早々養生仕候、御代官山田十右衛門差遣吟味仕候、村中方如此申越候、存究自害仕候ハ、後養生ハ好申間敷候得共、自害之後養生を好候者弥氣違と存候

仕上口上書

一 西須恵村源十郎と申百姓、歳五拾弐罷成候、此者女房同村ノ助二郎と申者之姉ニ而御座候、三歳ニ罷成候娘老女房ニ相添、一兩年以来田地ヲ添追出、五十日三十日宛助二郎方へ遣シ置、氣むき候時分ハ是非共戻しくれ候へと申、彼源十郎助二郎方へ参負候て罷戻候義度々ニ而御座候、別ニ悪敷事も不仕、其外ハ氣違共相見へ不申候、先月晦日之夜庭ニ居候て小刀ニ而ふゑをゑくり切ニ仕、うめき居申候ヲ隣安兵衛夜明ニ聞付候て、隣ニ居申源十郎弟七左衛門ニ申聞候へハ、七左衛門参候ていたき上ケ、其外々兄弟共一門共呼候て看病仕、御医者九右衛門殿御出候て御薬被遣、色

と吞せ見申候、九右衛門殿被仰候ハ、脉も無之、我才療治ニ而相叶不申候間、田淵市右衛門葉ニ仕候へと被仰候ニ付、田淵葉ニ仕、田淵を呼、色々と養生仕申候、御代官様御出被為成、御改被成候へ共、別ニ外疵も無御座候、養生不相叶三月三日ニ相果申候、此源十郎ヲ能給、何とそ仕命ヲのべ申度由申ニ付、随分養生仕とらせ可申と兄弟共申候へハ、おかミ申ニ付、兄弟一門共も扱ハ氣違ニ究り自害仕候と一門共村之者共不残存候、別ニ少も有散成義無御座候、於此者之儀已来何角と申上間敷候、為後日口上書如件

延宝九年三月三日

西須恵村源十郎弟

庄右衛門

同

七左衛門

同

庄兵衛

同

仁左衛門

源十郎組頭

六郎右衛門

山田十右衛門様

一 佐山村又十郎世忤雪隠へはいこミ相果候由承、若親及飢ニ捨候哉と無心元存、吟味仕候

私世忤相果申口上書上

一 当三月十三日ニ私ハ田すきニ罷出、女共ハなつミニ鶴海村へ参候ニ付、世忤十一ニ罷成候と式歳ニ罷成候ヲ宿ニ置申候所ニ、式歳ニ

天和元年 御留帳評定書

罷成候男子六、雪隠へはいこミ相果申候ヲ、私罷歸見付、驚引上ケ申候、右之通少も相違無御座候、為後日一筆如此御座候、已上座候、以上

延宝九年三月廿日

佐山村親

又十郎

佐山村庄屋

彦左衛門

半右衛門

年寄

孫右衛門

組頭

清左衛門

一同郡奥浦村ニ畝数凡三町余新田、延宝元ノ頃ハ彼村庄屋惣兵衛普請ニ取懸り、其年新田出来仕、右入用ヲ新田物成ヲ以立用可仕と安宅弥一郎方ニ申送、俣野助市同前ニ申付、入用之銀延宝六年之物成迄ニ而相濟、同七年春檢地仕、式町式反式畝廿七步外ニ七反廿七步半荒と改出し申候、斗代ハ未究不申候へとも上中下ノ位付究申候、百姓共存候ハ、古地ノ斗代ニ申付候てハ^(も脱力)逆続不申候間、指上ケ申度と相斷、折角新田調上差上申、只今惣作ニ近年成申候斗代之義尤相応ニ下ケ遣候ても位付高ク、庄屋迷惑かり申候間、位ヲ下ケ遣候て地主へ作せ申度奉存候、近年惣作故御物成五、三石ならてハ無御座候、位引下ケ斗代ヲ下ケ遣候ても、百姓自作ニ仕候ハ、御物成ハ結句多ク可有御座候、惣而檢地竿先之義中間

存寄ニ而銘々違御座候、私存候ハ、公義御造作も不參、田地出来ハ未代御調宝、地広ク候てハ百姓すゝミの心も御座候、耕作才念入作徳候て、妻子ヲ養申様ニ仕候ヘハ、以テハ御為と存、児嶋郡ニ罷有候内所々新田竿先百姓迷惑不仕候様ニ申付候、只今以無恙新田所御物成指上候由、右之奥浦新田惣反二三三百歩無之と申ニテハ無御座候得共、何茂檢地堅ク仕候由、其刻之檢地人并地主惣兵衛申候、何とそ竿先用捨仕候てハいか、可有御座候哉、此惣兵衛義此新田ニ付身軀潰れ申候由申候、已上

酉ノ四月十日

村田小右衛門

此段免ニ而引下ケ見合可申由御年寄中被申渡候

同日

一湯浅半右衛門舟持共運賃之儀、米高直ニ付高下之書付差出し候得共、御船手帳ニ具ニ書留ル

四月十六日 日置左門宅ニ而内寄合

一月番村田小右衛門差出シ

覚

一御巡見衆御宿用意ニ付、入用之竹木御留山敷無御座御郡者、御城下方も可被為遣候哉、手寄次第ニ給所ニ而伐せ可申候哉

左門被申候ハ、先年も給所ニ而も伐候ハ、今度も其通ニ仕候様ニと被申候

一御留敷竹伐申候刻ハ、敷奉行衆御出シ可被成候哉

左門敷奉行衆出し可被申由被申渡候

一片岡新田御巡見衆御船上り場ニ波戸申付度奉存候、御船手々見分

之仁御出し可被成候哉

左門被申候ハ、小右衛門見合、しからミ土俵ニ而御船上り場申付候由被申渡候

一御巡見ニ付道作り之事ハ村役ニ可申付候、其外ハ御扶持方被為遣候様ニ奉願候

四月十六日

村田小右衛門

此段僉儀有之、先年も此度も江戸ノ道なと作り申間敷由被仰遣候、然共常迎も作り候ハて不叶道之義ニ候、百姓共折柄と作り申事之由、先年も御扶持方不被下由ニ候、今度も被下間敷由小右衛門ニ被申渡候

同日

一河合善大夫指出シ

口上書上

一私儀下原村ニ而すきはいも不罷成候ニ付、家内妻子共五人不残水谷左京様御領分玉嶋村江罷出申度奉存候、下原村之名歳帳ヲ御除、則玉嶋村へ被遣被為下候ハ、難有可奉存候、以上

下原村

延宝九年正月十三日

半左衛門

願之通遣シ可申由左門被申渡候

一私義八代村ニ而すきはい難仕御座候ニ付、家内妻子共不残四人召連、花房大膳様御領分三嶋村江罷越申度奉存候、八代村之名歳帳ヲ御除、三嶋村へ被遣候ハ、難有可奉存候、以上

延宝九年二月十七日

吉兵衛

右之通願ニ御座候間、吉兵衛三嶋村へ被遣可被下候、以上

八代村

善兵衛

年寄

文右衛門

同

長兵衛

同

吉右衛門

河合善大夫様

願之通遣し可申由左門被申渡候

四月廿一日

山田弥太郎番

一村田小右衛門一昨十九日惣郡奉行中寄合申由ニ而書付差出シ申候

御郡奉行中間寄合書上

一御巡見衆用意為相談一昨日中間寄合申候、御馳走之品替り申候ニ付、追而寄合可申与申合候事

一麦之模様銘々申上候事

一土免之義近年之通差延可申候哉

御年寄中被申候ハ、先近年之通秋免ニ心得可被申候、追而差図可申渡由被申候

一諸運上之儀御侘言申上度趣、兼而民共申候得共、終ニ不申上候、此度船運上御免ニ付只今申上候、外之運上之義御了簡可被下候、以上

四月廿一日

御年寄中被申候、諸運上之義舟運上とハ違申候、只今之通

可被心得由被申候

同日

一同人書出シ

一邑久郡浜村九助御僉儀御指延被下候様ニ奉願候、只今麦刈追付根付仕時分ニ罷成候、籠舎をも被仰付候者之儀御侘言申上ルニてハ無御座候、御僉義御差延被下候ハ、外之者共野藁仕廻せ申度奉存候、以上

四月廿一日

村田小右衛門

御年寄中被申候ハ、御せんさく仕懸候義只今御差延被成候事難成候、左様ニ可被心得由被申渡候

同日

一春田十兵衛書出シ

覚

一磐梨郡可真下村市郎右衛門と申百姓、数年悪人ニ而色々之様子御座候、梶川左次兵衛御奉行之時分ニ山ノ出入なと申、一円無理成儀ニ而佐伯ノ籠舎申付、百日余置申由、其以後尔今至村ニ而も色々非道ヲ百姓共ニ申懸、難儀仕候由、此市郎右衛門義取早村ニ而も如何様之儀ヲ申懸候ても、百姓共おそれ申候ニ仕候故、徘徊仕由村中申候、当春飢人ニ二番ニ罷出、家内五人御座候、庄屋年寄共も未飢前ニ御座候故、除可申と申候へ共、中々聞不申候故、飢人之内へ書入申候、御代官上改之時此者ハ未飢人ニ而無之候故、除申由ニてはね申候、其後村之庄屋又ハ肝煎方へ参、公事ケ間敷申ニ付、村庄屋肝煎も市郎右衛門儀家内五人口御座候、若其内壱人

二而も煩相果申候へハ、飢死と御横目様江可罷出候、家内如何様少
よわり申躰二候と申二付、二月初の飢人之内へ入置申候、市郎右
衛門ハ二兩度御普請所へ罷出、相煩申由二而不罷出、子共女計御扶
持方請取三越申候、飢人共毎日御扶持方相渡シ、兎角其者参かほ
ヲ見不申候てハ、御米ハ遣シ不申と相究置申候、相煩申候ハ、医
者を懸可申と申候へハ、自分かせき三罷出候と申、一円宿三居不申
候、家内子共女計扶持方ヲ取、其身方ハ盗三参申由承及申候、
和氣郡片上へも盗三人、殊外た、かれ、其上同類御座候而、尔今孫
七同類ハ籠舎申付置申由二候、則下村二市郎右衛門兄弟三人居申
候、兄ハ源兵衛と申候、此者先年籠舎之時分市郎右衛門と不通仕
罷有申二付、源兵衛呼寄口上ヲ承申候へハ、何茂村の申段一郎右衛
門義偽二而無御座候、私儀其時分も達而山之儀見仕候得共、聞
入不申籠舎仕候、然上ハ不通と申、私義構不申候、旧冬も源兵衛
方へ参、十ヶ年以前之義ヲ申出シ、兄とても不通仕上ハ他人同前二
候間、不埒候ハ、打ころし可遣と申、まさかりを持参申候、又其
下之弟も出合すかし戻シ申候、如何様此分二而ハ聞申間敷候、焼
打二可仕と申候故、近所之者共迷惑仕、其時分互二用心仕候、其
後源兵衛留主三まいり、源兵衛家之廻りニ請敷御座候、三ヶ二程切
取罷歸申候、然共兄弟之儀無是非堪忍仕、尔今村之者ニも不申と
申候、今度飢人共米渡シ又ハ少宛寸志之御普請仕所へも三、四度も
罷出、奉行共ヲ惡口ヲ申罷歸申候、其段委細承及申候、此度ハ村
之四兵衛と申百姓御座候、此者親ハ郎右衛門と申百姓之由、八郎
右衛門と山之出入仕候、此八郎右衛門不便ヲ加へ、山ハ主利ニも
成候へとも、少身之者ニ候間、其下々田地ハ市郎右衛門ニ其俣作せ
可申と申、不便ヲ加へ作せ申候、八郎右衛門相果、其子只今四兵

衛未若輩者ニ候故、別而此四兵衛ヲ見こなし、田地ノ上ヲ主山と申、
旧冬、林ノ松木拾五本伐り申候、はしこ指候て方々へ売三参候由、
未六、七本切懸、切目ヲ付置申候、庄屋年寄此林之儀其方切り
申害三てハ無之と申候へハ、其方共不存候、我亦田地之上之山二而
候故、我か山と申二付、先年之出入山と申候へハ、それハむかしの
事と申候、縦其方山ニ而も当春御奉行の当春飢人共ニ御扶持ヲ被
遣候上ハ、山林竹木荒シ申間敷候、若断在之候ハ、御聞届御伐せ
可被成と御申候て、村之庄屋年寄書物を仕候と申候へハ、其ハ庄屋
あほうニて書物仕と申候、先日肝煎庄屋共不殘私方へ寄合仕候節、
此市郎右衛門義申出し候へハ、此者ハ其隱も無御座者、山之出入
も様々私共も承申候、其節ハ旧惡おもく、山之出入計ニても無御
座、様々ノ儀共ニ而籠舎、左次兵衛様被仰付、重々書物何枚も此
市郎右衛門分ハ可有御座と申候、此者之儀第一村中ハ密々く
ちを打申様二見へ申、同類も在之候哉、本不知者之宿ヲ可仕と是
のミ氣遣仕候、先年もはくちの義御吟味ニ出申義も御座候と申候、
当月五日の籠舎申付、郡之籠へ入置申候、方々近付も多御座候由
承伝、先々ニ而も百姓共ニ惡敷習計申聞せ候由、郡中ニも市郎右衛
門無事ニ居申候故ハ、科人ハ郡中ニハ無之と末々百姓共粗申由承伝
申候、此度急度被仰付被下候へかしと奉願申候、已上

卯月廿一日

御年寄中被申候ハ、岡山籠江入可申由被申渡候

同日

一同人書出し

一 磐梨郡所々村ニ先年用水溝惡水溝掘申候、溝代立不申所少宛

御座候、此段百性共断申候、吉崎勘兵衛時分ニも掘申と申ニ付、其後御奉行も二、三人替り候へとも、尔今立をくれ申候上ハ、如何可有之候哉、御免帳下札ニも溝代之儀難書加存候、先年之溝代共難成、新溝共難書加存候、此段御老中様迄御窺申上、立可遣と申置候、尤少之儀ニ御座候故、かむり申とても不苦義ニ御座候へとも、用水悪水溝其分ニ仕置申候へハ、百姓之情も悪ク成可申哉と奉存候間、当年方改立遣シ可申哉之御事

卯月廿一日

御年寄中追而可被申渡由被申候

同日

一河合善大夫書出し申候

一備中下秦村権大夫と申者之世倅達左衛門、森川九兵衛ニ奉公仕、江戸ニ而去冬走り申候、尔今行衛知れ不申候、以上

卯月廿一日

御年寄中被申候ハ、此者江戸ニ而取逃も有之事ニ候、百性隙之時分尋させ可申由被申渡候

同日

一横井次郎左衛門申候、浅越村源右衛門と申百性、当十六日首ヲ括り相果申候、様子せんさく仕候へハ、氣違ニ而御座候由申候

同日

一芹川与右衛門差出し申候

口上書上

天和元年 御留帳評定書

一私世倅五助と申者、大久保岡右衛門様ニ御奉公仕居申候得とも、四年已前ニ瘡を煩出シ、奉公難成御座候ニ付、宿入仕居申候、半身叶不申、其上氣違ニ罷成申候、当春私護申義難成御座候故、御断申上候へハ、正月十日方御扶持方被為下候、其外一類共之助ケを以育居申候、当三月廿二日首ヲ括相果申候、已上

井原村

延宝九年三月廿三日

弥市郎

右之通相違無御座候、已上

井原村

与三兵衛

組頭

庄次郎

同村年寄

三郎右衛門

同村庄屋

四兵衛

芹川与右衛門様

右相改相違無御座候、已上

豊岡村十村肝煎

喜左衛門

同日

一同人差出し

口上書上ケ

一私兄清左衛門義、当二月初方ニ岡山へ御奉公ニ罷出申候、岡山

二居不申候ニ付、様子岡山ニ而相尋申候ヘハ、京都ヘ参申由風聞承申候故、其段庄屋方ヘ相断申候ヘハ、急度相尋申候へと申付候故、京都ヘ尋ニ遣申候、幸京都ニ二類御座候故、具ニ立聞申候へと、京都ヘも不参候由申来候

市郎兵衛
同
長兵衛

和田村清左衛門弟

延宝九年四月十四日

助右衛門

芹川与右衛門様

右口上書判形筆本慥見届申候

豊岡村十村肝煎

喜左衛門

御年寄中被申候ハ、百姓共隙之時分尋させ申様ニと被申渡候

同日

一小林孫七郎差出し

乍恐奉申上御訴訟之事

一伊部釜御運上前々ハ壹釜ニ付四拾匁宛被為召上候処、近年者式百目宛ニ被為成、釜焼迷惑仕候、時節ニて御座候故、早々御訴訟申上度奉存候得共、被為仰付候事早々御断申上候儀恐多奉存、只今迄延引仕申候、乍恐前々之通四拾目宛ニ被為成被為下候ハ、難有可奉存候、已上

伊部村庄屋

延宝九年三月十四日

庄大夫

同村年寄

二郎左衛門

同

同日

小林孫七郎様

御年寄中只今迄之通取立候様ニと被申渡候

同村

釜焼不残

一日置左門御横目江被申渡候ハ、にさい八助義鼻をそき追放可仕由被申渡候

同日

一同人上坂外記江被申渡候ハ、来八日 蔵有院様御法事之儀、利光院ニ而被仰付候、諸事申付候様ニと從江戸被仰下候、左様可被心得由被申渡候、奥山市兵衛諸事請込肝煎候へと被申渡候

五月六日 日置左門江村田小右衛門竊之書付

一牛窓村觀音堂跡社頭之内ヲかこい、什物ノ鎧入置并御太刀此度御執行被仰付候御幣入所、角木ニ而指廻し可申候哉、板ニ而かこい可申候哉

左門被申候ハ、此段大森筑後存寄可然之由ニ而、山田一郎左衛門ヘ被申渡、一郎左衛門方ハ筑後江申渡、筑後存寄候ハ、真中壹間四方をかこい、右三種を半間之所ニ置、前ヲ簾とてふ懸、半間之所ニ御膳居申、前ハ披戸両方ニ壹間宛之所御座

候、式枚戸二仕、祭器を入、拝所ニ疊敷可然之由申越候、六月六日左門江此趣窺候へハ、弥筑後申様ニ仕候へと被申渡候一鳥居之儀手輕仕候様ニと被仰下候、手嶋石ニ可仕候哉、丸木ニ而可仕候哉

両様之内下直成を以申付候様ニと被仰、承合申候、手嶋石下直ニ付石ニ而可仕候哉と又窺候へハ、石ニ而申付候様ニと左門被申渡候

一額ハ何と可被仰付候哉、書申義も御指図奉頼候由申候

左門被申候ハ、山田一郎左衛門ニ可被仰渡候由被申候、市郎左衛門方ハ申越候ハ、彼社頭先年松岡市之進五香宮と申候間、此度茂額ニ五香宮と書せ可申候、手跡之義ハ左門江伺書せ可申候由申候

一廻り垣手輕申付候様ニと被仰下候、社頭之廻り玉垣ニ而御座候哉左門被申候ハ、如何に茂玉垣之事ニ候、地松にて申付、下ニ手嶋石一ツならひニ敷、土台木ヲ居、玉垣仕候へと被仰付候、牛窓之前嶋ニ而松を伐、玉垣申付候、土台ハ買角木にて申付候へキ

一幣勧請之儀大森筑後江被仰付候由、左候ハ、用意調候已後、牛窓村之神職筑後方へ遣、諸事相談仕せ可申候

左門尤と被申、遷宮入用銀從、公儀被遣候間、左様ニ仕候得と被申渡候

一彼宮ニ掃除之者亓人召抱候様ニと被仰下候、下祢宜之御心当ニ候哉、番人迄之御心当ニ候哉、御支配如何程可被遣候哉

左門被申候ハ、右両様承候得共、只今者牛窓之神職左右衛門家来同前之心当ニ候、朝夕も左右衛門方ニ食通仕、諸事左右

衛門下知仕候様ニ可申付候、此番之者煩候時者左右衛門方ハ番人申付候へ之由、右之品ニ付給扶持ニ米拾五俵宛可被遣候、但酉ノ五月ニ被仰付候間、当年分ハ月割ニ可被仰付由被申渡候

一番之者本殿ニねふし仕候てハけからはしく候、少之番所申付、如何可有御座候哉

左門被申候ハ、常者玉垣方内へ入候事無用、番所建番屋ニ相詰申様ニ被申付候

一いつれ之宮ニもとうめうとほし申候、是皆氏子之有之故ニ而御座候、此宮ハ此度御取立之儀御座候、いかゝたうめう領可被遣候哉左門被申候ハ、とうめう料迎此度者被遣間敷候、小右衛門裁判を以新田開など出来候砌、追而御窺可申上候由

一夫役之義所之者仕可申哉

左門被申候ハ、從、公儀被仰付事ニ候間、御扶持方可被下由

五月廿一日

長屋新左衛門番

一奥山市兵衛・岩根周右衛門申候、大野十兵衛・大杉平之丞方ハ鍛冶助房儀、御隠居様御用ニ付、五、七日之用意ニ而差下シ候様ニ、御擬作之儀從、殿様被下筈ニ候間、相談ニ而相応ニ相渡候様にと申来候、如何可被仰付候哉

何茂僉儀有之、路錢米七俵人足亓人繼馬亓足被下、作料当地ニ而一日壹匁五分宛被下候間、道中江戸逗留中弟子亓人召連參候間、一日貳人ニ五匁宛被遣可然由左門被申渡候

同日

一武田猪兵衛下人長藏と申者、傍輩之腰本女ヲ召連走り申ニ付、請人方江猪兵衛ヲ申遣シ、近辺尋候得共、未見付不申候由、右長藏在所和氣郡奥吉原、請人同村長夫と申候由、猪兵衛口上書差出シ候ニ付、小林孫七ヲ猶以請人ニ申付、走り人ヲ尋させ候様ニ孫七方へ月番春田十兵衛ヲ申達候へと左門被申渡候

同日

一馬場茂右衛門口上書差出

一三石式斗

岡嶋新兵衛

右之四分御借シ米返上残ニ而御座候、去暮取立跡目知レ不申候ニ付延置申候、如何可被仰付候哉、御手紙被下候様ニ申上度候

五月廿一日

馬場茂右衛門

御年寄中被申候ハ、先年柴岡弥一兵衛世忤ニも加様之類有之候ヲ、御延置候間、是も先差延置可申候、追而指図可有之由被申候

同日

一春田十兵衛申候、磐梨郡土免ニ仕度候、去年八月郡替被仰付候故、去年者村田小右衛門申付候分ニ而、地方之荒不足も不承届候、只今土免相究下札遣し置申度候

御年寄中其通ニ仕候様ニと被申渡候

同日

一同人申候新御制札弥被仰付候ハ、場所用意可仕候哉

御年寄中弥被仰付候間、用意仕候へと被申渡候

同日

一同人申候、山方麦去冬日干ニ而は急不申所、当麦成救ニ遣シ申度存候由申候

何茂僉儀有之、立毛無之所者左様ニ仕候ても可然候へ共、他郡方も似たる事共出候へハ、妨ニも可成候間、見合ニ外之義ニ而救替ニ致シ可然候由、御年寄中被申渡候

同日

一津田十二郎岩井喜兵衛を以粥小屋飢人残人数目録之写一人数百七人

内

五拾壹人

山へ可被遣者

内

五人

捨子

拾三人

山へハ得参間敷由断之者

五拾六人

御国御払可被成者

内

式拾壹人

御国者ニ究り候得共、近年居所不知、乞食仕由証拠無之者

五月廿九日

下濃宇兵衛番

一向十藏申候、山根三郎右衛門手前度々申遣シ候得共、埒立不申候、寄せ滞書付差出、則岸織部江相渡

同日

一山脇茂兵衛・岡助右衛門御勘定済目録式通差出

同日

一笠井太郎兵衛申候、先日申上候御野郡麦成屋敷地、当年百姓共難義仕候年ニ御座候間、御免可被成候哉

左門先当年者差置候様ニと被申候

同日

一芹川与右衛門差出

口上書覚

一木下肥後様御領分之内上高田村九右衛門と申者、私為ニ伯父ニ而御座候処、十四、五年以前ニ相果、跡ニ世忤三右衛門居申候処ニ、是も二、三年前ニ相果申ニ付、私世忤之内忤人繼せ申様ニと九右衛門一門共申候故、世忤之内忤人召連罷越、私義も一兩年之間後見仕度と奉存候、以上

九谷村

延宝九年五月廿七日

七兵衛

芹川与右衛門様

左門被申候ハ、親七兵衛を遣し候事無用ニ候、世忤事ハ願之通遣し候様ニと被申渡候

同日

一同人申候、近藤覚兵衛下人豊岡村之又助と申者、於江戸欠落仕候

天和元年 御留帳評定書

由申来候ニ付、請人申付取替弁出させ申候、今程百姓根草時分ニ成、闇敷御座候間、又助義急ニ尋ニ不参候様ニ仕度存候由申候

左門此段尤ニ候、兼而心懸候様ニ申付、尋させ候様ニと被申候

同日

一春田十兵衛申候、磐梨郡加部村・三宅村・父井村山公事之埒、下ニ而嚙見申度と存候由ニ而、書付三通出し申候

左門被申候ハ、嚙見申度段尤ニ候、得と致了簡、追而可申出由ニ而、書付請取被申候

同日

一河合善大夫申候、備中山北南御領御給領入組之川内村ニ

西阿知・中嶋・水江・酒津・西原・片嶋・連嶋

右七ヶ村入合之悪水川底樋之義ニ付、絵図并書付式通差出

左門被申候ハ、此段只今何共難究候間、先書付善大夫方へ戻し候由

六月六日 日置左門宅ニ而内寄合之節上嶋彦次郎差出

赤坂郡西中村庄屋年寄口上

一森川九兵衛様御百姓二郎兵衛忤長助、六年以前方九兵衛様三三、四年御奉公仕居申候内ニ、如何仕候哉覽、借銀式百目出来申ニ付、御奉公茂難成故、親二郎兵衛伯母岡山ニ久々御奉公仕居申候ニ付、此伯母と兩人銀弁遣シ申候、其故親二郎兵衛田畠五反余作御座候処、式反計売申候、残ル田地ハ悪敷御座候故、御未進をも仕、三年以前ニ絶申候、其上二郎兵衛去年十月ニ相果申候、長助ハ九兵

衛様をハ御暇もらい、其方あなたこなたと御奉公仕居申候ニ付、給米御未進へ少成共入候へと申候得共、左様に茂不仕候故、村ニ而借替、公儀様をハ御皆済仕候、此者給米を取候ても宿之便リニ不仕、其上借銀多分仕候由ニ御座候、親二郎兵衛相果、母ハ継母ニ而御座候へハ、宿をハ構不申候、当二月ニ因幡江御使ニ参申由にて、当村源左衛門所江立寄申由ニ御座候、然共宿へハ寄不申候、其後様子承申候へハ、身躰かせきニ参申様ニ承申候故、五人組頭市兵衛岡山へ参伯母ニ様子尋申候へハ、おは申候ハ、奉公かせき申由ニ而、四、五日も此方へ出入申候、其後者様子不存候、長助義ニ付二度此方へ沙汰仕義無用ニ候、我才構申義成不申と申由ニ御座候、長介尔今当村へも岡山伯母方へも歸不申候故申上候、右ノ長介縦在所江罷歸申候ても、作をもしかと仕者ニ而無御座候、已上

延宝九年五月廿四日

赤坂郡西中村庄屋

多左衛門

同村年寄

夫兵衛

同

長三郎

左門被申候ハ、御法之通先引戻し可申候、其後者追扨ニ成共彦二郎了簡次第二可仕由被申渡候

同日

一同人差出

口上書

一川北平右衛門と申仁、大仁小兒外科金瘡共致養生、殊ニ牛馬療治上手ニ而御座候ニ付、去春折々新庄村へ出入仕候故、宗旨吟味仕申候得者、則旦那坊主岡山磨屋町觀音坊手形致持参、請取置申候、此半右衛門少物をも書被申候故、村之者之子共二日記付指南頼申候、諸事村之為ニ調宝成者ニ而御座候、尤慥成様子ハ安藤次郎左衛門様方頼申との御状被下候、則半右衛門方先祖書も取相添遣シ申候

右之通ニ御座候間、当分新庄村ニ居申様ニ被仰上可被下候、已上

延宝九年五月十八日

新庄村庄屋

孫八郎

年寄

善六

広戸村

六郎右衛門殿

同日

口上之覚

一私之養生国備後屋須那郡之内山野村ニ而御座候、三拾年以前岡山へ罷越申候、池田数馬殿御預り御鉄炮之小頭ニ被召出、拾七年御奉公仕申候内ニ、奥上道郡金岡新田西村源五郎殿御取立ニ而出来申候、則源五郎殿方私兄庄屋ニ被仰付、八、九年程相勤申候処ニ、度々之洪水ニ致迷惑、身躰不罷成候ニ付、庄屋御断申上、差上申候、尔今私兄弟新田ニ作仕居申候、弥次兵衛と申候、佐伯市場村ニ而次右衛門と申者私智ニ而御座候

一私之義ハ数馬殿御果被成候以後、伊木頼母殿へ相渡、四、五年小頭相勤申候、折節永々相煩申候二付、御暇囉申候御事

一安藤次郎右衛門私不通者ニ而御座候故、掛り居申候得共、次郎右衛門小身者之義ニ御座候へハ、少之内ニ而も何とぞ似合之義も御座候ハ、渡世も送り申度と存候処ニ、新庄村半七と申者、右近付ニ而御座候故、半七頼申候、右之通ニ而御座候間、当分ニ而も新庄村ニ致逗留候様ニ御公儀様江可然様ニ御取成偏ニ頼存候、以上

延宝九年五月十八日

河北半右衛門

庄屋

孫 八殿

参

右半右衛門事新庄村之者共願之通ニ申付候へと左門被申渡ル

同日

一芹川与右衛門差出

口上書付

一江戸江参着仕候砌、傍輩権助角助私三人之着類一所ニ柿紙ニ包置申候、四月廿五日之昼私着物と存候て権助着物ニ取違、質物ニ置申候、尤着物之色表ハ紺裏ハちくさ同染色ニ而御座候ニ付、見違候て質ニ置申候、同廿七日之朝旦那樣御供ニ権助参候迎着物見え不申と尋被申由、其時私ハ御馬ニ鞍を置申迎御馬立ニ居中、尋被申様子も不存候、権助御供ハ罷歸着物失申由被申ニ付、若私着物ニ取違申かと存、私着物有之候歟見被申給候得と申候得者、其方着物ハ有之由被申ニ付、私申候ハ、一昨日錢急ニ入用之事有之候て時質ニ旦那様御買付之米屋ニ置申候、扨者其方之着物ニ取違

天和元年 御留帳評定書

申候哉、私着物ニ置替取戻返進可申と申候て、同廿八日之朝関右衛門同道仕、右之米屋江参請返シ、則関右衛門ニ相渡申候、旦那様御聞被為遊候ハ、私心根惡敷候て茂仕候かと被為思召候得者、御奉公も難勤奉存、欠落仕候、町ニ三日逗留仕、細川越中様御帰国ニ付、箱根を御跡をしたい罷越申候、請人母弟迷惑可仕与奉存、五月廿八日ニ私宅へ罷歸申候、以上

豊岡村

延宝九年六月四日

又 助

右之又助口上書承届相違無御座候、以上

豊岡村肝煎庄屋

喜左衛門

同村庄屋

源左衛門

芹川与右衛門様

右又助義郡之籠江入置候様ニと左門被申渡候

同日

一村田小右衛門口上書

一延宝六年伊木頼母失物ニ付盗人ニさゝれ候浜村ノ曾川小兵衛義村へ御預ケ置被成候、此者毎年飢人、依之御造作ニ罷成候、科之輕重不存候故、御佗言不申上候、奉公望申候、願之通ニ可被仰付候哉

左門被申候ハ、此類外ニも有之候間、追而了簡可有之由被申候

一新地村半右衛門と申者、先年ハ酒屋仕居申候、只今ハ飢人ニ罷成

候而、六、七年土佐国ニ罷有候ヲ、御法度故呼返シ申候、此半右衛門申候ハ、御国ニ而ハ口過可仕様も無御座候、近年土佐国之内白浜村と申所ニ少之商人仕居申候得共、御法ニ付御呼返シ罷戻候、願者名歳帳御消シ白浜村へ被遣被下候様ニと願書指上ケ申候

願之通土佐国江遣し候へと左門被申渡候

一先年奥上道郡金岡新田ニ罷有候金屋小兵衛、只今ハ当郡八日市村ニ居申候、此者八日市村住居成不申候、札銀拾貫目借用仕度奉願候、調不申候者御暇申請、大坂江罷登申度与願書御披見入申候

左門了簡之上追而可被申出由

一当郡鹿忍村立石と申所ニ四、五歳計之子沉掛殺置候由、卯月十六日私家来見付申候、其砌ハ私月番ニ而御城下罷有、廿二日罷戻候、早々彼死骸致吟味、無御座ニ付、郡中其村之名歳帳を扣入ニ引合見申候得共、別儀無御座候ニ付、左候ハ、書物仕越申様ニと申付、村之庄屋年寄五人組頭方書物取置申候、則書物御披見ニ入申候

左門被申候ハ、此上ハ穿鑿可仕様も無之候間、其通と被申候

六月廿一日

山田弥太郎番

一横井次郎左衛門書出シ申候

覚

一口上道郡流筋村之儀、惡所ニ成申所多ク御座候、洪水以前之土免ニハ相不申候ニ付、毎年検見仕候、近年之物成平シ見申候へハ、土免ニハよほど不足御座候、百姓共随分情出し作り見申候ても中々土免之御物成ハ出来不申候故、耕作にいさミ無御座と見へ申候、就夫百姓共之存候も、惡所ニ成申候所へ、洪水以前之能時之

免を懸置候義、私之仕様無理之様ニ存候由ニ御座候、此段者尤と奉存候、其上中嶋村之堤荒手ニ被成置候へハ、流筋之村々ハ一円たのしミも無御座仕合ニて候所、洪水以前之土免其俣掛置候てハ、百姓之情も惡敷成可申義と奉存候、然共私不案内ニて只今御免下ケ申儀も難仕御座候間、惡所之田地甲乙ヲ分別仕、少ツ、加損米を立置候ハ、百姓共忝かり耕作にいさミも出来可申候、左候ハ、実ハ検見下りニも御徳可有御座候、又ハ次第田地も能成可申候得ハ、何か御為宜ク義共可有御座と奉存候、如何可被仰付哉之事

洪水流筋 森下村・原村・尾嶋村・沢田村・中嶋村・中川村

此分流筋近年之平シ或ハ百石不足御座候ハ、七拾石程加損立置候ハ、百姓作ニ情を出シ、情も能成、御免も上り可申哉と奉存由申候

大学被申候ハ、何茂致僉儀、次郎左衛門申上候通ニ被仰付、加損米立置候ハ、百姓いさミニ成可申之由、何も申候、明日相窺可申由被申候

御伺被申候処、流筋村々次郎左衛門願之通ニ被仰付候事

一当春之草臥百姓之内飢人同前之者、麦毛不作仕、麦御年貢成不申候分、両郡二百七拾石余御座候、田地家屋敷売不申候へハ、年貢払上候義成不申候、当年之義ニ御座候間、此立毛なしの分引遣申度奉存候、如何可被仰付哉之事

西六月廿一日

横井次郎左衛門

大学被申候ハ、取前春田十兵衛も加様之願書出し申由、何茂一同ニ被仰付可然候、御留帳ヲ見申、明朝持参仕候様ニと川村平太兵衛へ被申渡候

御伺被申候処、奥口上道郡草臥百姓当麦毛なし之分、兩郡
百七拾石余引遣シ申度由、取前春田十兵衛斷ニ付被仰渡候通、
從 公儀者御立被遣間敷候、救替ニ致シ可申事

同日

一小林孫七も麦不足之義書出シ申候

覺

八塔寺村	瀧谷村	東畑村	下畑村	大藤村
飯掛村	牛中村	大岩村	片倉村	杉沢村
南山方村	上田土村	下田土村	木倉村	日笠上村
日笠下村				

右之村々麦蒔付候得共、去冬雨降不申ニ付、惡畠之分一切はへ不
申候、只今払上ケ申麦成高百貳拾石余ニ而御座候、よわ百姓御座
候故、只今麦御年貢払替可仕様も無御座、根付の扶持方他借仕給
申仕合ニ御座候、百姓共の訴訟仕ニてハ無御座候、見及申所難参
ニ付、様子申上候御事

六月廿一日

小林孫七郎

大学被申候ハ、是も同事ニ候間、御留帳之様子次第相伺可申
由被申候

御伺被申候処、山中惡畠麦は多付不申分、右同斷ニ被仰渡候

同日

一春田十兵衛書出し申候

覺

一磐梨郡田原村井関裏破損所、去冬御普請奉行中村治左衛門見分申

天和元年 御留帳評定書

候、間々裏石沉ミ又ハぬけ破損仕候、当春へかけ石取も仕置、
末石も不足仕候、当月来月中ニ右之痛所繕申取中ニ御座候処ニ、
土倉淡路殿江戸御使者ニ付、平役人不残上り申候、上坂外記預り
御鉄炮一組罷出申候得共、是以江戸へ過半参、追々罷歸申由ニ御
座候、一組罷出申候てハはか取不申候、当月来月ニ繕不仕候てハ
何共無心元奉存候間、日用ヲ入急度仕立申度奉存候間、当麦百石
被為下候ハ、郡ニ残シ置、申付度奉存候、此井関大分之大井水
ニ御座候へハ、中水出申候ても大破損ニ罷成可申かと無心元奉存
候御事

六月廿一日

大学被申候ハ、井関破損当年之水上ケ申計ニ候ハ、如何様
ニも輕仕可然候、洪水之痛に茂成可申候ハ、左様ニも成間
敷候、中村治左衛門ニ相尋申様ニと岸織部江被申渡候
御窺被申候処、田原井関之事中村治左衛門ニ様子御聞被成、破
損繕可被 仰付事

同日

一同人申候、石平太船破損仕直シ申度由申候

大学破損繕申付候様ニと被申渡候

六月晦日

長屋新左衛門番

一大学中村治左衛門江被申候ハ、石関水汲場小作事之下江砂置候
て、水筋束之方へ付候様ニ、頃日通り候て見及申候、御用害之所
先年ハ深井所ニ候、池田藤右衛門油断者有間敷候へとも、前々之
通有之候て可然候、御代替ニ候故如何可有之哉、向ニ波戸付ケ

候ハ、水出候時分自然ニ砂流レ可申候

治左衛門申候ハ、水汲場之方埋り候ハ、向土を取申故、川筋向へ付申と相見え申候、中水位之節はね申様ニ向之方波戸仕候者、此方自然ニ掘れ可申候由申候

御伺被申候処、中村治左衛門・藤岡内助もくろミ可申事

同日

一同人被申候ハ、水ノ手御門外方川崎町ノ下迄、前々ハ自然さかりニ有之候、先年御堀さら糸土置候故、小堀彦左衛門後之石垣之根も埋り、石垣ひきく相見え候、井筒石有之候廻り、かたほれも有之候、御巡見衆御越無之内ニ、御野郡へ出候役人透ニ引、平シ候て可然候、土ハ望申者も可有之候得共、むさとほり候へハ一所をかたほれニ致候、置土けつらせ候て置候ハ、取申者も可有之候、右両品共ニ明日ニも池田藤右衛門へ申談、其上にて之義と被申聞候

此段藤右衛門江被仰渡候事

一御横目共申候、所々御門之番人ますかた廻リニ乞食なと伏シ居申候得共、其分ニ而差置申候、又ハ番所之前商人なども寄せ置、御門前ニ人立候ても払申鉢も無御座候、番人定之数程詰申分ニ様ニ相見え申候、右ノ品々制道仕様ニ池田藤右衛門方申付可然と奉存候由申候

大学尤ニ候、左様之義御番人之役ニ候、左様ニ有之可然と被申候、頭々も申付可然由岸織部申候

所々御門番人共心得之事、藤右衛門へ被 仰渡候事

同日

一俣野善内・井上藤助銀札目録三通差出
引替札覚

一千百九拾貳貫六百貳拾壹匁貳分

一百拾九貫三百三拾三匁六分

一百拾三貫四百壹匁六分

一六拾六貫貳百九拾七匁四分

一六拾四貫貳百貳拾貳匁三分

一五拾七貫九拾匁七分

一四拾八貫目

一四拾三貫三百八拾四匁貳分

一三拾六貫六百八拾五匁

一三拾壹貫百三拾九匁六分

一貳拾六貫九百拾貳匁四分

岡山

栄町

和気郡

片上村

邑久郡

牛窓村

山北南

西阿知村

児嶋郡

小串村

赤坂郡

周匝村

奥津高郡

建部村

奥上道郡

西大寺村

奥津高郡

金川村

児嶋郡

下津井村

浅口郡

鴨方村

合千七百九拾九貫八拾八匁 酉ノ五月六日方同十九日迄町在々

札場ニ而引替申分

覚

札高八百六拾貳万貳百六拾枚

一六千八拾五貫四百拾貳匁三分

新加判札并古札共

内

札高五百拾五万六六百拾壹枚

三千六百三拾貫三百七匁五分

新加判札、酉正月廿三日
方同六月十五日迄出来

同三百四拾貳万五千九百八拾枚

貳千四百貳拾七貫百七拾三匁六分

古札、但新加判無之札、
此後追々加判可仕分

同三千百三拾貳枚

貳貫貳百拾貳匁五分

損札、此札数三千四百七
拾六枚、札壹枚ニ付貳錢
宛ニ而替遣、此錢銀八拾
六匁九分、但延宝七年十
月方同九年六月十五日迄
町在々札場ニ而替遣ス分

同貳万五千五百三拾壹枚

拾五貫貳百五匁九分

新加判仕節紙漉場ニ而損
シ札ニ付捨ル分、酉ノ正
月廿三日方同六月十五日
迄之分

四口ノ六千七拾四貫八百九拾九匁五分

同壹万九千六枚

残拾貫五百拾貳匁八分

是ハ他国御国共ニ未替リ不申札并捨
申札と相見ヘ申候、此已後替ニ可参
も難知候

退札

一壹万千六百八拾貳貫八百九拾六匁七分 未ノ十月朔日方酉ノ五

月晦日迄

戻札

一九千百三拾壹貫貳百貳拾目四分

右同断

指引

残貳千五百五拾壹貫六百七拾六匁三分

是ハ御蔵又々所々札場ニ御座候

以上

同日

一俣野善内・井上藤助申候、当麦上り相場之義四拾六匁ニ可被仰付
候哉、只今御家中納麦四拾目方四拾貳匁迄仕候、御年寄中之麦ハ
いまた相場知レ不申候、四拾三匁程ハ可仕候、左候ヘハ四拾六匁
当り之様ニ存候由申候

大学其通可然候、相究候様ニと被申渡候

同日

一大坂西信町御屋敷番人喜左衛門妻子ノ書付、笠井太郎兵衛方書出
シ申候

野田村喜左衛門妻子書上

一喜左衛門

歳五十

女房

同四十七

口津高郡尾ノ上村吉左衛門所ニ奉公仕居申候

子市大夫

同廿

御野郡嶋田村四郎兵衛所奉公仕候

娘鶴

同十六

備中瀬尾新田太左衛門所ニ奉公仕候

子三吉

同十三

五郎左衛門養置申候

子喜藏

同五

同断

人数合六人 内 男四人 女三人

喜左衛門弟

一五郎左衛門

同四十

御百性仕居申候

女房

同三十八

酉ノ六月廿九日

笠井太郎兵衛

大学被申候ハ、右喜左衛門義重ノ不届成者ニ而候、其身生キ候て居申候ハ、何とぞ強ミせしめニも可被仰付義ニ候ヘ共、当座ニ果候間、責而世忤共何とぞ被仰付様可有之候、何茂存寄申出候様ニ被申、僉儀在之、惣領之忤ニ男式人ヲ御追放可被仰付カ惣領計指ニ而も御切せ一人御追放可被仰付カト両様ニ申候、内式人御追放可然と多分申候

御伺被申候処、喜左衛門男子之分払候ヘと被 仰出候事

七月十日

下濃宇兵衛番

一横井次郎左衛門月番ニ而罷出申候ハ、広内権右衛門方ノ申越候、岩子新波戸御普請、長三拾間幅拾間、大形出来仕候、堤際ノ先江拾間程上置不足仕、今程御役無御座、其俣ニ而差置候ヘハ、中水

ニも越シ候ヘハ、藪之根ほれ申候、麦三拾石被遣候ハ、日用ニ而申付度由願申候由申候

大学右之通藤岡内助ヘ被尋候ヘハ、権右衛門申通ニ仕候ハて成不申御普請所之由申候ニ付、右之麦遣し可申由、次郎左衛門江大学被申渡候

一往還駄賃人足代只今迄取来之通郡ノ書付差出、僉儀有之、往還筋ハ卯ノ年之増共二里四十三文、山坂三文増ニ究り有之候、郡ノ脇道ハ一里六分と書付出申ニ付、銭いかほと、改直し可然哉と何茂僉儀在之候ヘ共、只今迄有来候ヲ此節御直し被成候ハ如何可有御座哉、前ノ錢にても銀ニ而も渡シ次第ニ請取申候間、其分ニ被成置可然哉、錢之相場ニ少宛之多少ハ有之候由何も申候

同日

一大坂御蔵屋敷所ノ破損仕段、服部与三右衛門・長屋新左衛門など見申候由申候、就夫大学大杉平之丞江被申渡、奥山市兵衛申合、繕之もくろミ仕越候様ニ俣野助市方ヘ可申遣由被申渡候、書付参候者其上ニ而了簡可仕由被申候

同日

一俣野善内・井上藤助申候、御蔵之内こほれ米、只今迄ハ米指共取来申候、就夫御蔵奉行御蔵横目共申候ハ、米指定候て取申様ニ御座候ヘハ、何と致候てもこほし米可在之様ニ存候、こほれ米御払わけ置、米指其外情出シ候者共ニ可被遣哉と申候、如何可被仰付哉

何茂僉儀有之、大坂御蔵之こほれ米近年払米ニ成申候、左候

へハ御国之も払米ニ仕、代銀御銀奉行江相渡シ候へと大学善
内・藤助江被申渡候

一太田又七申候、京橋繕下用意仕置申候、盆過る取掛候ハ、八月
中ニハ出来可仕候、足代木不足仕候、御林ニ而伐り申度由申候

大学被申候ハ、三河様御通り之時分知れ不申候、頓而御通り
之御左右可有之候間、先其迄相待、弥下用意仕可然候、足
代木も数書出シ候様ニと被申候

同日

一口ミ米留之事何茂僉儀有之、前ミ之通ニ被仰付可然哉と申候、大
学明朝相伺可申由被申候

御窺被申候処、例年之通可被 仰付事

七月廿一日

山田弥太郎番

一御勘定方より出シ申由ニ而岸織部出し申候

御横目江渡ル鉄炮路銀宿錢舟賃

一五拾三匁四分

此錢三貫三百七文

内

三貫六拾五文

大坂より江戸迄次馬半疋ノ代金人ニ壹歩宛

壹貫文

同所より同所迄宿錢十二泊り金人一泊り十六文

宛

貳百三拾八文

荒井・桑名舟賃

一百五拾目

五人之路錢金人二付三拾目宛

右之通延宝五年迄被遣候

延宝六年御簡略ニ成、御鉄炮三人宛給扶持被遣候時之御擬作
一九拾目 三人之路錢金人二三拾目宛

右之年より馬銀宿錢舟賃不被遣

七月十一日

大学被申候ハ、如何様之御僉儀ニ而不被下候哉、何茂覺不申
候哉と被申候、何茂覺不申候、俣野善内・井上藤介へ相尋被
申候、兩人申候ハ、御横目共江被下候御鉄炮、下人同前二付、
被下間鋪との義ニ而不被下候由申候

大学被申候ハ、江戸へも御簡略ニ付、御横目共へ被下御鉄炮
馬銀宿錢舟賃不被遣候由、御勘定所より申遣候得と被申渡候

同日

一笠井太郎兵衛申候、昨日迄三井関閑留、御野郡へ水上より申由承申
上候

一大学小林孫七江被申候ハ、先年伊賀煩ニ付上り候刻、今西友伯与
申医者申候ハ、高原焼三木山石入不申候へハ、出来悪鋪候、近
年石御留被成致迷惑候、承候へハ御細工ニ右之石入申由、焼物ニ
者粉を遣申候、御細工之粉を被下候様ニ願申候、左候ハ、如何
様之焼物ニ而も差上可申由申候故、国江戻り候刻、様子尋可申と
致返答候、如何様之わけニ候哉と被申候

孫七申候ハ、私御郡御用ニ罷出候てハ、御隠居様御用ニ付石
を堅留置申候、御隠居様御意被成候ハ、此石方より參焼も
のなにも入申由、沙汰有之と 御意被成候ニ付、罷戻り相
尋候得共、一円不存由申候、此石ハ八木山ニ而ハ無御座候、
三石之内ニ而御座候由申候、大学被申候ハ、俣野助市方へ申

遣、如何程如何様ニ仕取越候哉、様子申談候へと被申渡候

同日

一 大学被申候ハ、浜村九助一卷穿鑿之趣、大蔵市兵衛重二郎ハ昨日初而可承候、思ひ寄ハ無之かと被申候

其後様々僉義有之、何茂申候ハ、今一往調可被仰付かと申候

七月廿八日

長屋新左衛門番

一月番小林孫七郎・村田小右衛門申候、昨日惣御郡奉行中寄合、存知寄之書付一通差出シ申候

覚

一 郡方御返弁米可被遣哉之事

御年寄中被申候ハ、免之内ニ而被遣候ハきミあい不冝候、弥

豊年二候ハ、御定之通可被遣哉、明朝相伺可申候、とかく

御返弁之埒ハ服部与三右衛門手前割を仕、其上にて之義可

然と被申候

御伺被申候処、御郡奉行共与三右衛門と相談可仕事

一 郡貯物を以飢人育申分

御年寄中先其分ニ而差置可然候、明朝達 御耳可申由被申候

御伺被申候処、先其分ニ可仕事

一 御巡見衆御入用之事

御年寄中被申候ハ、御蔵入用銀相渡シ可然候、明朝相伺可

申由被申候

御窺被申候処、御銀奉行手前可相渡事

一 郡方御救米之事

御年寄中被申候ハ、未遲義ニ候間先へより僉儀可在候由
御伺被申候処、追而可被 仰出事

一 御検見之事

此段津田重二郎申候ハ、大学内談之趣郡を入替検見功者之百姓ニ被仰付、如何可在之哉と昨日惣御郡奉行中へ申談候、笠井太郎兵衛・芹川与右衛門・小林孫七此三人ハ一段可然由申候、残御奉行共ハ先一兩年被仰付、様子御覽可被成哉、士検見ハましニ而可有御座と申候由申候、何茂僉儀有之、可然義と多分申候

御伺被申候処、郡替りニ仕先見可申事

一 郡方之儀御巡見衆御尋之時分御返答之事

御伺被申候処、両通書出シ之品有姿ニ可申事

酉ノ七月廿七日

同日

一 村田小右衛門差出

一 邑久郡之内車村与太郎と申者、牛窓村之五郎大夫と申者之方ニ奉公仕居申候、大坂へ召連罷越、五月十二日頓死仕候、俣野助一方へ早々注進申遣候へハ、御横目指遣、死骸改申候、別義茂無御座ニ付、葬申候由、牛窓村年寄弥右衛門方申越候

一同郡鶴海村忠兵衛と申者之娘拾九歳ニ罷成申候、六月九日朝食過大角豆葉ツミ罷出、遅ク罷歸候付、親類并近所之者共方々尋候へハ、同村ノひしり岩と申池之堤ノ上ニはいふこにさゝけ葉ツミ入、笠と一所ニ有之候、池之内さかし候得者、死骸取揚申候、御代官山田十右衛門指遣、死骸改申候、有残成義無御座候ニ付、則

葬せ申候

一同郡山手村善次郎と申者之悴三九郎、拾三歳ニ罷成候、六月十八日奥上道郡西大寺村観音へ参罷帰候刻、大川渡候迎相果申候、死骸取揚注進申越候、御代官并私御城下罷有候二付、十村肝煎天徳村勘右衛門指出シ、死骸改申候、別儀も無御座二付、葬せ申候
一同郡八日市村之川原二七月二日芸州入野村久三郎と申者之妻子、伊勢参宮仕候迎泊り申候、其夜三歳ニ成申候娘病死仕候、葬申度之由同村庄屋孫兵衛方へ相断申候、則様子承届葬せ申候
一同郡鹿忍村古庄屋仁左衛門、先年酒造来申候、近年手前不罷成候、借銀之方ニ同村源蔵へ酒かふ遣し申度と願書御披見ニ入申候

口上

一私身軀不罷成、大分借銀御座候二付、同村源蔵智之儀ニ御座候へハ、酒かふ蔵諸道具共ニ遣シ、借銀源蔵方相払申様ニ仕度御座候、此旨被仰上埒明申様ニ奉頼候、以上

延宝九年六月廿九日

鹿忍村

仁左衛門

同村庄屋

忠三郎殿

御年寄中勝手次第二仕可然候、明日達 御耳由被申候
御伺被申候处、願之通可申付由被 仰出候事

一同郡奥浦村庄屋惣兵衛兄治兵衛と申者、年久鋪江戸へ罷越居申候、暇もらい在所へ罷帰候、庄屋願書御披見入申候

口上

一私兄治兵衛三拾四年以前ニ伊木長門様ニ一兩年御歩行奉公仕、江

天和元年 御留帳評定書

戸へ御供仕、江戸ニ而首尾能御暇申請、紀笈様御内水野対馬様御舍弟水野八郎様ニ御奉公仕、当夏迄罷有候処ニ、治兵衛病氣ニ罷成候て暇申請、頃日奥浦へ罷越申候、治兵衛義元来在所、其上私兄ニ而御座候間、当村二居申様ニ被為仰付被下候ハ、難有可奉存候、先年江戸へ罷下候節、御改帳ニも除置申候、今度御改帳ニ書入申候様ニ奉頼候

一先年御当地ニ罷有候節、治兵衛宗門代々真言宗鹿忍村安善院旦那ニ而御座候、其後江戸ニ罷有候内宗門真言宗旦那坊主牛込多門院ニ而御座候、御法度之不受不施吉利支丹ニ而ハ無御座候、已上

奥浦村庄屋

延宝九年七月十六日

惣兵衛

近藤三右衛門様

右之通奉願儀御座候、如何可被仰付候哉

七月十六日

近藤三右衛門

村田小右衛門殿

御年寄中被申候ハ、先年長門手前何之滞なく暇遣し候哉承届、別義無之候ハ、其上ニ而入置候様ニと被申渡候

一同郡八日市村ニ只今居申候金屋小兵衛、大坂へ引取申義御留守之内ニも御断申上候、上方之者之義御座候間、御帰城被為成、追而可被仰付と先月初私迄被仰聞候二付、指延置申候、如何可申付候哉、則小兵衛口上書御披見ニ入申候

乍恐口状書を以申上候

一私儀ハ奥上道郡金岡新田ニ罷有候金屋小兵衛と申者ニ而御座候、去ル寛文十一年亥ノ極月ニ上方者御置不被為成候与被為仰出、同

十三年丑ノ二月ニ不殘御国ヲ罷立、上方ヘ罷歸申候、其中二三好三折・鴻池屋仁兵衛・私三人ハ御国御免ニ而、右兩人之者共岡山、私義ハ邑久郡八日市村ヘ罷立候、就夫八日市村ニ少田地を求、耕作仕罷在候、其内三折・仁兵衛ニ者備中浅口郡ニ而新田拾町宛貳拾町五年之作り取、其後ハ免ツ成御下ケ被為遣旨ニ而兩人ニ被下、難有奉存候、私其砌御訴訟可申処ニ、西村源五郎様御逼塞御構不被成、可申上便無御座故、無是非打暮申候、其後次第ニ不作二付、難儀仕候故、責而金岡新田ハ故郷と存候間、売殘シ申田地も御座候間、彼地ヘ罷越度と相望申処ニ、金岡新田江者遣又事成不申候と被仰候、仁兵衛ハ備中ニ而新田拾町拝領仕、剩金岡新田ヘ岡山ノ引越申儀御赦免被為成候、私義ハ如何御思召も御座候哉と奉存、不及是非ニ罷在候内ニ、次第ニ勝手不自由ニ罷成候御事

一奥上道郡中野村忠大夫と申庄屋、去ル寛文拾貳年子ノ極月ニ身軀潰れ、御年貢御勘定立兼候故、既御代官大平善左衛門様御難儀被成、私ヘ御申候ハ、何とそ米三、四拾石才覚仕候様ニと被仰候故、才覚可仕と請相申処ニ、漸拾五石八斗八合御年貢之首尾合申候、此米御渡シ被下候様ニと申上候得者、此米中野惣百姓中ノ出又米ニ候得共、其後洪水或者百姓痛申候間、待候様ニと被仰候、何共不埒ニ候内、終ニ善左衛門様御果被成、御子息ハ御役義代リ被成候、加様之埒も可申上と奉存、金岡新田ヘ引越可申と御侘言申上候得共、其甲斐無御座候故ニ、新田之地も去年売払申事

一私義金岡新田ニ而骨折申義ハ三折・仁兵衛ノハ成程情出し申候と覚申候、此段々ハ末御侍衆中様之内ニも御存知ニ而可有御座と奉存候、三折・仁兵衛並ニ被為仰付被為下候者難有可奉存候、只今可被為懸御意ニ新田所無御座候者、銀札拾貫目何とぞ御預ケ被為

成被為下候ハ、難有義ニ可奉存候、御国ニ罷在候義十七年ニ罷成、上方ヘ罷登申義迷惑奉存候得共、身軀続不申候間、右二色之義叶不申候ハ、上方江罷登申度奉存候

右之段々被為仰上被為下候ハ、難有可奉存候、以上

邑久郡八日市村金屋

延宝九年五月十一日

小兵衛

御 奉 行様

村田小右衛門申候、此者之義上方者ニ御座候故、何とぞ被仰付も可有御座かと存、敢前も御伺申候、如何可被仰付哉

御年寄中被申候ハ、此者ハ鴻之池屋仁兵衛・三好三折とハ違候ヘハ、勝手次第上せ可然候、明朝 御耳ニ達、其上にて可申渡由被申候

一同郡天徳村勘右衛門、古来十村肝煎庄屋仕候、近年役儀断申候、弥病氣ニ罷成候由申候、指免可申候哉

酉ノ七月廿八日

村田小右衛門

御年寄中差免シ可申候、明朝達 御耳可申渡由被申候

御伺被申候処、世忤孫市可申付事

一春田十兵衛指出し申候

口上書上

一当村弥助と申者、寛文四年ノ御小人御奉公ニ罷出、同十年迄江戸二居申候、同年十二月ニ少申分仕、同年十二月廿八日ニ御屋鋪ノ走り、飛驒国ヘ参口すぎ仕居申候由申候、延宝三年ノ大坂ヘ参、同五年之暮迄口すぎ仕居申候得とも、老母御座候ニ付逢申度迎忍

参、在所ニ居申候、考申候得者走り人之儀ニ御座候故、大事ニ奉存、村田小右衛門様江も御内意相窺申候処ニ、不念与御意被成、様子段々相尋、書付を茂取指上ケ候へと被爲仰出ニ付、彼者弥驚在所ヲ立退、備中江参居申候得共、他国之住居成兼申ニ付、去年方隠立寄申候、此分ニ而ハ無心元奉存候間、何とそ御免被爲遊被下候ハ、村中御請ニ罷立、村之人馬帳へも書入判形も取申度奉存候、已上

肩背村庄屋

延宝九年六月十八日

市兵衛

年寄

市郎兵衛

春田十兵衛様

此弥助義何茂如何存候哉と御年寄中被申、僉儀之上、弥介自由ケ間敷様子不届者ニ存候、郡之籠舎被仰付、庄屋年寄百性も御奉行を輕シ申様子、是又不届ニ存候、兩人ニ籠賄可被仰付哉と申候、御年寄中明朝可相伺由被申候

御伺被申候処、庄屋年寄才ニ籠賄可被 仰付事

一可真上村長助母同村和田池へ西ノ六月十六日ニ身ヲなけ相果申様子書上

一母歳七拾八、長助如毎朝おき候て見申候へハ、母祢屋ニ居不申候ニ付、家廻り尋候得共、見え不申候故、其時隣家之者ニもその通申、其方共へハ不被参候哉と相尋申候へとも、隣へも参不申由、度々相尋候へ共、居不申候ニ付、驚、長介ハ彼母常々秋田村江近付所御座候ニ付、彼地へ尋ニ参申候、長助ハ部屋ニふせり居申候、母ハ座鋪ニ常々ふせり居申候ニ付、夜ル出候哉、何時罷出候も、ふ

せり入不存候、朝おき候て見出し申候、其内村之者共山へ参候迎、見出し申候、和田池ニ身をなけ浮上り居申候ヲ見付申、私方へも案内仕候ニ付、私并年寄共早々罷出、死骸取揚させ、相改見申候得共、別ニ手疵其外痛申所茂無御座候

一着類常々着申候單物着爲申候、帶も常之仕分ニ御座候

一彼母男孫右衛門と申候、実子壱人御座候処ニ、是も先年相果、婢も先年相果、幼少之孫子式人御座候、内壱人ハ男子三五郎と申、当年十六ニ罷成申候、娘ハ当年十九ニ成申候、兩人共ニ近年奉公仕居申候、長助義孫右衛門子ニ而ハ無御座候、近年赤坂郡ニ居申候処ニ、孫右衛門相果、孫子共幼少ニ御座候ニ付、家続申間鋪と母色々申候ニ付、五、六年以前ニ御断申上、母一所ニ参居申候、長助女赤坂郡鍋谷村与十郎と申者之娘、三年以前ニ養申候、男子一人当年式ツニ成申候

一先年相果申養父孫右衛門親類、村之内ニ甚五郎と申甥一人御座候、先煙之兄弟共村之内ニ与介・九右衛門・仁左衛門と申三人御座候、此者共又者隣家之者共ニも、常々如何様之挨拶ニ而、此度も何とぞ長助又ハ婢といさかい申候哉と相尋候得とも、別ニ近來少も申分不和成義も無御座候由申候

一母相果申刻、婢首括り可申と申繩なと拵申候ニ付、驚見、先隣家之者番ニ付置申候、何逆左様ニ仕候哉、母相果かなしミ可申処ニ、左様ニ仕段不審ニ存候と申、色々吟味仕候得共、何之心茂無御座あきれ左様ニ仕候由申候へとも、とかく在所へ遣シ親方ニ先置可申与長助申候ニ付、左様ニ仕置申候、其後当村年寄五人組頭三人鍋谷村与十郎方へ遣シ、彼長介女ニ申候ハ、先日ハ何とて左様ニ仕候哉、心底之程聞申度由ニ付、我共罷出候由申候へハ、右申

通ニ驚、左様ニ仕候由申候、其時親与十郎申候ハ、とかく長助方へ返シ可申候、此已後如何様之儀御座候共、此方ニハ構も無御座候由申候ニ付、長介方へ戻り居申候

一右諸親類も色々吟味仕候得共、何ニ而も心懸之儀申分無御座候由申候、いづれも寄合吟味仕候者共、口上相違無御座、印ニ判形仕せ差上ケ申候

一長助儀彼母ニハ独子ニ而其外兄弟老人茂無御座候、以上

可真上村庄屋

延宝九年六月廿三日

忠兵衛

同 年寄

八郎兵衛

同

九郎兵衛

同 五人組頭

三郎右衛門

同

七郎兵衛

小百性六人連判

春田十兵衛様

御年寄中被申候ハ、長助女首括り之用意、何共不審成様子ニ候へ共、夫其外近所之者共別義無之様ニ申上者、先其分ニ候、然共重兵衛此已後逆弥別条無之候哉、不捨置承届可申候、首括り可申との心底難心得、合点不参事ニ候と被申、明朝達御耳ニ可申渡由

同日

一春田十兵衛申候、御内意相同申候、佐伯辺之者共宗門之義取前心次第と被仰付候節、坊主之存知寄も無御座候ニ付、先神道にて居申候、旦那寺など求候後、何とぞ可申上と存居申候、其後神仏之帳ヲ仕直シ申候処ニ、所ニ^ニ方^ニ仏^ニ成^ニ申度と頃日願申者御座候、如何可仕哉と庄屋共申候、如何様ニ可申付候哉

此段津田十二郎申候ハ、竝前左門右之様子私共へ被申聞候御隠居様御時分も心次第と被仰付候、殿様御代ニも心次第と被仰付、度々御念入候処、其節ハ神道ニ而居申、只今仏道と申義、内心ニハ不受不施と存知居申候哉、然共願申義ヲ差留候事成間敷候間、磐梨之先御奉行村田小右衛門を指加、御吟味之上被仰付可然哉と、竝前も小仕置中迄申候由申候、落着無之

同日

一芹川与右衛門差出シ申候

仕上口上書

一水谷左京様御下字蟹村五郎助と申者所へ、私兄弟多ク、小作ニ而御座候ニ付、養子ニ参度奉存候、被為遣被為下候ハ、難有奉存候、已上

奥津高郡虎倉村

延宝九年六月廿三日

市兵衛

右之通相違無御座候、已上

虎倉村庄屋

平兵衛

芹川与右衛門様

勝手次第遣し候へと御年寄中被申渡候

同日

一同人申候、近藤覚兵衛小者取前江戸ニ而欠落仕、在所へ罷歸、其節左門へ申達候へハ、郡之籠へ入置候様ニと被申、其通ニ仕置申候、取早余ほと久敷義ニ御座候間、籠舎御免被成被下候様ニと申候

御年寄中落着不被申渡候

御伺之上取早指免シ可申渡由被申渡候

一小林孫七郎差出し申候

申上口上之覚

一近年世中悪敷五穀高直ニ付、山中木炭灰出し候ても、米下直成時分迄駄壹荷之代物程ニ、式駄三駄出シ候ても取不申ニ付、自ラ山をも伐荒シ申候間、田畠近辺不宜山之分焼切替畠ニ仕、一所ヲ三年或ハ四年作仕、已後者其所ヲ打捨、又外之所ヲ切かへく仕候へハ、殊之外勝手ニ能御座候、又ハ古地之為ニも焼候へハ能御座候、作州播州山中右之通ニ仕候故、勝手殊外宜様ニ見へ申候、両国きりかへ畠村ニ御年貢徳取ニ被仰付候哉、先此近辺之村ニ切替畠ニいまた御年貢少も出不申候由承及候、此村ニ当分徳取之御年貢と御座候てハ難仕候、焼畠成次第勝手次第仕候様ニ被仰付候ハ、先成次第可仕候、年々を以仕覚申時ハ、徳取相応ニ可被仰付候、加様ニ申上候ても今迄之働山ヲ焼、当分すみはい仕おとり候てハ、とくい借り之さゝわりニ成、借シ兼候へハ、ひしと迷

天和元年 御留帳評定書

惑可仕候間、当分ハ不宜荒山、成次第切替畠ニ可仕候、年々仕近国ノことく二百性共願候通ニ被仰付被下候ハ、難有可奉存候、右之段被仰上可被為下候、已上

延宝九年七月廿二日

八塔寺村庄屋惣百性中

瀧谷村庄屋惣百性中

東畑村庄屋惣百性中

下畑村庄屋惣百性中

大又村庄屋惣百性中

大藤村庄屋惣百性中

小林孫七郎様

御年寄中被申候ハ、先願之通申付様子見申様ニと被申渡候

同日

一上嶋彦二郎申候、取前佐野村ニ而ろうは被仰付候三天夫と申者、ろうは仕候得共、存様ニ出来不仕、銀元心元かり申候間、先上方へ罷歸、銀元之埒も申談、其上ニ而之義ニ可仕と申候、勝手次第上せ可申哉と申候

御年寄中勝手次第上せ候へと被申渡候

同日

一河合善大夫差出し申候

口上書

一西郡村仁左衛門と申者、私御請ニ立、守田与五郎様へ当春方御若堂ニ出シ、江戸へ御召連被成候処ニ、御意ニ入不申由ニ而何之御構も無御座、御取替米日算用ニ被仰付、御暇被下候ニ付、少之御

奉公も御座候者、かせき御給米之内返上之分払上ケ、又ハ在所親方へも少之扶持方をも遣可申与奉存、江戸ニ而御家中様を持申候得共、奉公も無御座候処ニ、折節戸沢能登守様大坂御城之御加番ニ御上り被為成候、御家中友野甚五左衛門殿と申御土衆へ在付、御供ニ而八月上旬ニ大坂江参候由、仁左衛門方方申越候、兼而他国江奉公ニ罷出不申候様ニ被為仰付候得共、仁左衛門宿之義飢人同前之者ニ而御座候間、右之御奉公御赦免被為成候様ニ被為仰付被下候者、有難可奉存御事

延宝九年七月廿四日

河合善大夫様

西郡村庄屋

武助

此段何茂僉義有之、御年寄中被申候ハ、大坂侯野助市方へ申遣し、呼戻シ可然哉、但大坂御城番之義ニ候間、来春出替迄ハ其分ニ而指置、請人方方兼々彼者方へ出替之時分罷戻り候様ニ内証申置可然候哉、明朝達御耳ニ可申渡由被申候御伺之上ニ而御年寄中善大夫へ被申渡候

同日

一同人差出し

西郡村八兵衛女房口上

一私親西郡村孫八郎、三十年以前ニ相果申候、其跡へ御領分古地村甚吉と申者後家入仕、此甚吉も十五年以前ニ相果申候、右之甚吉古地村ニ而之悴八兵衛と申を私と一所ニ仕置申候処、彼八兵衛おふちやくものニ而耕作才不情ニ仕、十年程之間ニ五反計之田畠ノ内三反余売、近年奉公ニ罷出申候故、給米を心当ニ仕、残ル壹反

余之田畠を私売人のかせきニて作仕、母と十才之娘七才之男子を育申義ニ御座候へとも、如何仕候哉、給米少も宿之足りニ不仕、其上出入ニ者少宛も宿之役介ニ罷成申仕合ニ御座候得ハ、当年も飢ニ及候へとも、御慈悲之上春を立申候、取早分ニ過申未進借錢仕候、とかく此通ニて八兵衛ヲ心当ニ仕候てハ、母子共私義飢ニ及可申と奉存候付、八兵衛ヲ追出し申候間、此段御断被仰上、八兵衛義村之人帳ニも御はつし可被下候、已上

延宝九年七月廿四日

此口上書之趣御年寄中其分ニ致シ可然と被申候

西郡村八兵衛

女房

同日

一同人申候ハ、備中片嶋村悪水川ニ大嶋無現と申窄人底樋居、連嶋新田へ水取申候、右之底樋都築長左衛門殿へ相伺候て仕候、彼辺新規之事不仕筈ニ御座候、其上悪水ぬけ申障リニも成申由にて、御蔵入百姓御領分之百姓共ニ迷惑仕、御領分之者共長左衛門殿へ御断申上、御承引無御座候ハ、江戸へ成共罷越申度由口上書三通并絵図指出し申候

此段善大夫心得を以無現ニ相談可仕由、無現事林与左衛門と心安之由、与左衛門も無現へ相談申筈之由、大学被申、三通之書付ハ善大夫方へ返し被申候

同日

一国枝平介書付差出式通

一吉利支丹改此節御蔵所水野美作殿水谷左京殿領分など者血判申付

由、十五已上血判又ハ家主老人計血判之所も御座候由、御領分如何仕せ可申哉之御事

酉ノ七月廿五日

国枝平介

御年寄中被申候ハ、先只今迄之通ニ而可然候、血判可宜候ハ、御巡見衆御通り已後可被仰付哉、明日達御耳ニ可申渡由

御窺被申候処、只今迄之通ニ判形可申付由被仰出候事

同日

覚

一浅口郡東大嶋村之内三郎嶋、陸ノ拾貳町御座候、嶋ノ廻リ貳拾貳町御座候、田地無御座百姓共貳拾人計此嶋へ参、開仕住宅望申候、畠ニ成申所八町余御座候、人居申候へハ林なとニも仕候、可被遣哉

酉ノ七月廿六日

国枝平介

何茂僉儀有之、畠高さのミ出来仕ニても無御座候へハ、御無用ニ被仰付可然哉と申候、御年寄中相伺可申由被申候御伺被申候処、先無用ニ可仕由被仰出候事

同日

一同人申候、先年柴木村甚助ニ従少将様被為下候御賞文ニ、天禄と申御文言御座候、禄之字かねへんニ而御座候、示へん宜ク御座候様ニ申者御座候、今度御巡見衆御越、自然御聞及御披見有度と家来衆ニ而も可被申候哉、文字其分ニ而も苦間鋪候哉、為御了簡御賞文持参仕候由ニ而差出し申候

天和元年 御留帳評定書

御年寄中被申候ハ、御右筆之書誤ニ候哉、御披見ニ人可申由

八月十日

下濃宇兵衛番

一邑久郡上等賀村三右衛門口上書、宮城大蔵差出

乍恐指上申口状書

一去ル六月十八日岡山森下町古金屋二郎介と申者ニ、私麦貳拾九石壹斗七升壳申候、壹石ニ付貳拾七匁三分カへ、代銀七百九拾六匁三分四厘之内九匁ハ福岡村ニてまけ申候、又百拾九匁者懸ケ銀ニ請取、又三拾九匁四分七月朔日ニ請取申候、其時二郎介方へ参候而居申内ニ、二郎介被申候ハ、壹石ニ付壹匁宛まけれ候ハ、銀札今日中ニ相渡シ可申由被申候ニ付、貳拾八匁九分四厘まけ申候、残而六百目尔今相渡不申、迷惑仕候事

一右ニ壳申麦岡山中買町仁保屋長兵衛殿へ積廻シ次第、銀札早々相渡可申由、二郎介被申候得共、尔今埒明不申、難義仕候事

一右之内御年貢麦相添壳候て銀札ニ而御給人様へ払上申筈ニ御座候へとも、銀相渡不申めいわく仕候事

一此外駄賃銀七匁五分、是も相渡シ不申候、已上

邑久郡上笠加村

酉ノ七月廿九日

三右衛門

御町御奉行様

前書之通少茂相違無御座候、已上

上笠加村庄屋

六兵衛

御年寄中此段岩根周右衛門へ様子相尋被申候へハ、この二郎介義此跡もケ様之仕形御座候得共、下ニ而相済シ申候、其

節之品書付差出し申候

周右衛門申候ハ、惣別ケ様之類外ニも御座候、相對ニ而仕候儀を取上ケ申付候ヘハ、ちこも無御座候、二郎介不届者にテ御座候間、如何様ニも可被仰付哉と申候

何茂僉義在之、籠舎可被仰付か、但御追放又ハ町ヘ御預ケ置可被成哉、御年寄中明朝可相伺由被申候

御窺被申候処、籠舎可申付由被 仰出候事

一昨日御年寄中其外御用人共何茂浜村九介并部屋頭之六郎兵衛・新七・左之介・長右衛門・弥介申口、銘々聞被申、其上ニ而

対決

九 介
左之介

九 介

六郎兵衛

六郎兵衛

長右衛門

左之介

弥 介

右之者共対決聞被申、其後何茂僉義在之、落着無御座候、相伺可申由御年寄中被申候

達 御耳候処、被 仰出之趣

邑久郡浜村九介手前御穿鑿之一巻、昨日寄合年寄共小仕置其外御用人共直口承候通被 聞召、左之通可申付置旨被 仰出ル

浜村

籠舎

九 介

勘解由者

六郎兵衛

浜村

次右衛門

勘解由者

扶持放在所江可入置申者

新 七

同

左之介

勘解由者長右衛門・弥介義何之御構も無之候、可召仕と存候ハ、勘解由勝手次第第二可仕旨被 仰出ル

八月十一日

右ハ勘解由家頼村瀬安兵衛ニ太学被申渡ル

八月廿一日

山田弥太郎番

一横井次郎左衛門書出シ申候

一奥上道郡広谷村前砂川之橋板くさり破損仕候、御繕被仰付可被下哉之事

御年寄中太田又七へ被申渡候ハ、橋板くさり候由次郎左衛門方申出候間、奉行遣し致見分、古板ニ而繕仕候へと被申渡候、又七樋板などの古板ニ而繕可申由申候

一同郡西大寺村渡シ船くさり破損仕候、御作替被仰付可被下候哉、数度繕申候ニ付、取早繕ニ懸り不申候事

西ノ八月廿一日

横井次郎左衛門

御年寄中作り替ニ仕候へと被申候、次郎左衛門申候ハ、年々

在にて入札仕せ、其銀子御銀奉行に請取申由申候、御年寄中大杉平之丞へ入札究り次第銀子相渡させ候へと被申渡候

同日

一同人申候、御巡見衆之御用ニ竹なとちと入申候、御郡之請敷之内にて伐せ代遣し申様ニ可仕かと申候

御年寄中其通ニ仕候へと被申候

同日

一春田十兵衛申候、磐梨郡佐伯之内頭村源左衛門と申者、作州福元村之小七郎ニ家屋鋪酒かふを質ニ入、銀子拾貫目借り申候、年々致返弁、一兩年滞り申ニ付、右ノ家酒かふ請取可申と申候、源左衛門ハ福岡村平兵衛と申者之出シニ而御座候、右之段書付共数通御座候由申候

御年寄中何茂兼義仕候へと被申候て色々申候、御年寄中被申候ハ、御巡見衆御通り已後、源左衛門平兵衛手前を御穿鑿候て、其後源左衛門作州小七郎手前を御兼儀可然と相究り申候

八月廿九日

長屋新左衛門番

一岩根周右衛門申候、今度御巡見衆御用之人馬当町より出申候、在る能人馬無之候間、岡山之人馬郡より雇候て御国中付廻シ候様ニ取前大学被申候ニ付、其通ニ申付候、其日すきの者共ニ御座候得者妻子共迷惑仕候、在る当分何も遣シ不申候、何とぞ被仰付候様ニ仕度候由申候

天和元年 御留帳評定書

御年寄中被申候ハ、前銀遣シ候ハてハ迷惑可仕候間、横井二郎左衛門只今爰元へ罷出居申事ニ候間、次郎左衛門周右衛門申談、郡方より当町ニ而銀子借り相渡可然候、其通ニ申談候様ニと右兩人江被申渡候

同日

一雲州なとニ而ハ医者針立を茂被遣候、爰元針立之御沙汰無御座候、可被遣哉と何茂申候

御年寄中被遣可然候、相伺可申由被申候

同日

一御巡見衆へ出合候御用人共衣類之儀、絹類着仕可然哉、御祭礼なとも着仕候間、為御馳走江戸衣類可然様ニ何茂申候
御年寄中相伺可申由被申候

同日

一御巡見衆御用之時分来月二日ニ遣シ可然由何茂申候
其心得ニ仕候へと御年寄中岩根周右衛門へ被申渡候

同日

一御巡見衆之医者駕籠かき四人足輕老人薬箱持一人相渡シ可然候、意徳ハ知行取ニ候へととも逼塞者ニ候間、此度者別法ニ御切米取なミニ相渡シ候様ニ岸織部へ御年寄中被申渡候

同日

一太田又七申候、北国方屋栋木参候、殊外下直ニ御座候間、調置申度候、凡代拾貫目計之義ニ而御座候由申候

御年寄中調置可然候、何とそ代才覚候て調候様ニ了簡仕候へと、奥山市兵衛ニ被申渡候

九月廿一日

下濃宇兵衛番

一太田亦七 御廟中庭之指図を出シ破損柱取替候義伺申候

大学明日相伺可申由被申候

同日

一同人差出シ申候

口上

一屋根葺共御作料之儀近年御訴訟申上候処、御聞届不被為成候得共、御用之儀者随分相勤申上候

一上壹人壹匁五分 中壹匁四分 下壹匁三分被下候、右之通ニ而ハ妻子育申事近年者米高直ニ御座候故、勝手ひしと迷惑仕候、其上こくは迄私共取不申故、右作料之内ニ而薪迄相調申義ニ御座候へハ、弥以迷惑仕候、此已後米下直ニ成申候ハ、其刻ハ御意次第ニ可仕候間、米高直ニ御座候内、作料御上ケ被為下候者難有可奉存候、以上

延宝九年酉ノ九月十五日

肝煎

与八郎

同

平兵衛

太田又七様

大学被申候ハ、上中下共ニ作料式宛増遣シ候へと被申渡ル

同日

一俣野善内・井上藤助御払大豆三俵ニ付四拾九匁分落札之由申候其通ニ払候様ニと大学右兩人江被申渡候

九月廿八日評定有之候得共、書留御用も無之候

十月十日

下濃宇兵衛番

一若原監物差出シ

口上

一京銀取立之儀霜月晦日切ニ去年相触申候

一米上之衆中ハ弥当年も米上之事

一銀上衆者米上ニ成共勝手次第之事

此三ヶ条去年之通可然由、僉儀之上ニ而御年寄中被申渡ル一祝言用意銀自今以後米上衆ハ米ニて返シ申様ニと被 仰付候、去年ハ霜月平シ相場ニ而返シ申候、当年も去年之通ニ可仕候哉、但御定相場五拾匁ニて返シ候ハ、銘々手前江米早ク相渡、勝手能可有御座候、平シ相場ニ返シ候ハ、霜月十日過ならてハ割奉行衆へ俵数ヲ申遣候事成不申候

此段霜月十日切之平シ之通ニ被仰付可然と御年寄中被申候

一池田左兵衛・八田弥三右衛門・服部半介、右三人知高之内、上知之分ニハ御役米払上候様ニ被 仰付候間、去暮分ハ自分取之内方払上候間、当春之御役米方上知物成之内ヲ自分へ請込申度由、断ニ御座候、已上

此三人御役米上ヶ知之内ニ而立遣シ可然と御年寄中被申渡候

同日

一太田又七申候、小作事之土取場只今迄御城之向小性町之内ニ而取申候得共、無用之由被仰聞候ニ付、土取場見立申候、森下町後之畠ニ而取可申かと相窺申候

何茂僉儀在之、畠を潰シ申るハ新川水門之上ヶ土、夫役入申共先取候て、考見申様ニと御年寄中被申渡候

同日

一俣野善内・井上藤助新太唐米大坂江差上せ候書付出し申候
一六千七百七拾俵 太唐米

右者九月廿八日と十月九日迄度々大坂江登せ申候

同日

一同人銀札高目録差出し申候

銀札高目録

一八百六拾貳万貳百六拾枚

元

此銀高六千八拾五貫四百拾貳匁三分

札之内

四百五拾三万四千四百六拾八枚 壹匁札

内六拾八万六千九百枚 延宝九年四月に新札出来

此銀四千五百三拾五貫四百六拾八匁

百五拾貳万六千八百五拾枚 五分札

此銀七百六拾三貫四百貳拾五匁

八拾三万七千三百七拾枚 四分札

此銀三百三拾貫九百五拾八匁

八拾万八千八百拾八枚 三分札

此銀貳百四拾壹貫六百貳拾貳匁四分

八拾万貳千八百七枚 貳分札

此銀百六拾貫五百六拾壹匁四分

六万四千七百八拾貳枚 壹匁札五分四分三分貳分共

此銀四拾貳貫八百六匁四分

但御横目寺崎文左衛門・岡部半大夫相改、判押損シ又ハ方

々へ廻り判形惡敷成、歩錢取候て替遣し捨り札共

四万五千百六拾五枚 壹匁札五分四分三分貳分共

此銀拾貫五百七拾壹匁壹分

是ハ延宝七年十月に同九年十月迄方々江廻り札捨り、此

度改ニ歸り不申候札之分

同日

一同人銀札紙漉置候員数書出シ申候

一五拾三束壹帖貳拾九枚

代銀六貫百貳拾貳匁三分

但五百枚切壹束ニ付百拾五匁宛

右者延宝九年四月廿二日ハ銀札紙漉如此ニ御座候

同日

一同人書付差出し

覚

一今度御巡見衆御乗候御船江御貝吹三人被遣候、此者共増御扶持方可被遣哉、只今迄増御扶持方之御法無御座候、御簾小頭老人増、御すへ御番などハ老人半宛被下候、此兩用之内いつれにても可被遣哉

善内申候ハ、先年鹿嶋之御狩ニ御供仕候、其時分之被下様御勘定所見申候得共、御台所ニ而喰捨之御食も被下候哉、書付無御座候由申候

御年寄中被申候ハ、老人扶持被下可然哉、新法之儀ニ候間、明朝達 御耳ニ可申渡由被申候

御窺被申候処、何方江も被遣候節者老人増可被下事

同日

一岩根周右衛門申候、難波町鍋屋太郎左衛門世倅太郎右衛門、丹波より呼申ニ付、参度由願申候、如何可被仰付哉と申、則書付差出し申候

乍恐口上書差上候事

一年内丹後之内田辺ニ被成御座候牧野因幡守様御鉄炮被仰付候、御用ニ付去冬十月十三日御飛脚被遣候ニ、其砌私事ハ池田大学様御鉄炮六貫目包爐工筒被仰付候ニ、早々罷越候事難成、則世倅太郎右衛門指越候処ニ、御鉄炮百目筒三百目筒五挺被仰付候内、冬年先三挺出来仕候て、則因幡守様御披見ニ入、筒御意ニ入申ニ付、私儀中嶋治大夫殿と申候て、田辺之御郡代御仕置者ニ而御座候、然処ニ中嶋殿御取持ニ而拾人扶持ニ而可召置之由被仰聞候処、難有奉存候得共、私事ハ岡山御町奉行様より、他国へ憑申段被遣間敷由被仰付候へハ、早速御請難成旨御理申上候へハ、左候ハ、

私世倅太郎右衛門ニ御扶持可被下之旨被仰付候、然共私義次第ニ歳寄申事ニ御座候へハ、世倅離申儀迷惑ニ奉存候へハ、同者一所ニ御国住宅仕度念願御座候付、恐多奉存候得共、奉願御事

一延宝元年丑ノ年広嶋安芸守様御内禰山左近右衛門殿と申候侍衆大筒安芸守様被仰付候間、罷越候様ニと申来候ニ、其時分芸州江罷越、大筒拾挺鑄立懸御目候処ニ、其砌も御扶持人ニ可被仰付之旨被仰出候故、芸州方罷歸、目代を以其段石田鶴右衛門様へ御断申上候処ニ、家職之事ニ候間、罷越候様ニと被仰聞候キ、其後又萩野六兵衛殿被仰候ハ、尤鶴右衛門殿参候様ニと被仰付候得共、様子御存知無之故其通ニ可有之候へ共、其方事ハ御両 殿様江達

御耳置候へハ、他国へ参候事堅無用之旨、其上拙者心計ニ而指留ニ而無之候、少様子も有之候間、無用之由被仰候故、畏相待候処、私不仕合故六兵衛殿御牢人被成候、又候哉此度因幡守様御扶持可被下候ニ付、御理申上候へハ、御町奉行様不被遣候へハ、手前碯迷惑仕候、及兩度私身躰之極り取外シ申事ニ御座候得共、御下罷有候へハ、御意重ク難振奉存候、然共飢申儀ニ御座候へハ、願之程申上御事ニ御座候

一私義他国へ不被遣候事奉畏入候得共、近年御国御簡略ニ付御家中様方も大筒不被仰付候故、手前九人御座候へハ次第ノ二飢ニ及迷惑仕候事ニ御座候、家屋舗をも質物ニ入置候へハ、取早家ニも離申仕合ニ御座候処ニ、目代影を以漸々取続申候、猶以当年者飢申仕合ニ御座候間、御慈悲と被為思召、銀子拝借仕候者、其銀子ニ而家職之鍋釜へらさき仕出シ、御当地へ売出候へハ、私露命も続申義ニ御座候、尤御町売買人衆も勝手能御座候様ニ奉存候、当分取続可申様難成ニ付、御訴訟申上候

一只今御扶持方奉願度義ニ御座候得共、御簡略ニ御座候へハ憚多奉存、其段不奉願候、私事御陣之時分ハ忝人罷越、先々ニ而大筒五百目六百目筒、尺八九寸五分六三寸五寸迄、炮爐工筒式貫目六五貫目玉迄常躰ニ御座候へハ、五、六十日ニも出来仕候得共、御急用之砌日数ハ五、七日之内ニも早速出来申様ニ鑄立申事ニ御座候、其上当分御城様御台所御料理鍋其外金物之類如何様之事にても仕出シ申儀ニ御座候間、被為仰付候様ニ被仰上可被下候、已上

鑄物師

延宝九年正月十九日

太郎左衛門

難波町目代

長五郎

岩根周右衛門様

御年寄中被達 御耳ニ候処、太郎左衛門世倅太郎右衛門ニ五人扶持可被下之由被 仰出候事

同日

一津田十二郎申候ハ、牧駒三才まで手前ニ置、不冝駒ハ在江遣シ申候、次第二大分御座候故、持おもり仕候、当地へ引寄式、三足程宛乗立申候、此分之飼料被下候様ニ仕度候、又外ニ牧ニ而無之駒式足御座候、是ハ生付能御座候間、御馬屋へ一ツ宛預ケ申度由申候

大学被申候ハ、右之通達 御耳ニ、飼料相渡シ候様にと大杉平之丞へ被申候、外式足之駒ハかんのよきを菅八内方へ遣し候へと被申渡候

天和元年 御留帳評定書

同日

一大学笠井太郎兵衛ニ被申渡候ハ、丹波様御家来山室弥次左衛門立退申候、此妻ハ横山半内妹之由、妻子共ニ半内ニ御預ケ候、弥二左衛門跡ハ關所被 仰付候、女之諸道具ハ半内方へ可遣由、拘之田地之年貢取立可申候、岡村権兵衛と申談候様ニ被申渡候

十月廿一日

長屋新左衛門番

一湯浅半右衛門申候ハ、御国之壳船共大坂町人之荷物積江戸へ参候ニ付、大坂船と申候者借り可申由荷主申ニ付、其通ニ請合参候故下田御関所ニ而も大坂舟と断罷通り候、江戸へ参大野十兵衛方へ参、右之通船頭申断候ニ付、十兵衛申候ハ、大坂舟と御関所へもこたへ申上ハ、上り手形遣シ候ニ不及候由申聞候と、半右衛門方へ十兵衛方申来候ニ付、船頭共手前吟味仕、目録又八十兵衛方船頭名書付参候写差出、向後如何様ニ可申付候哉と申、書付共出候得共、御船手帳之内ニ留置申候

同日

一村田小右衛門・芹川与右衛門罷出、昨日惣御郡奉行中内寄合仕、存知寄書付之由ニ而差出申候

覚

一畠方加損之儀当年も被遣候ハてハ成申間敷事
一田方免請之者共、立毛見分之外曾而取実無御座候、此分にてハ御年貢納所調申間敷候間、御加損被遣候様ニ奉願候事
一救米之義御指図可被成由、最前被仰出候ニ付、御検見仕廻候へとも御帳調不申候事

十月廿日

右三ヶ条内寄合之節、津田十二郎御郡奉行中江申候ハ、一等
二可有之儀之様にも不被存候、銘々存寄老人宛別紙ニ致シ書
付差出し可然と申候由ニ而、老人宛大学へ直ニ相渡申候

覚

一太唐米払上候儀、当年者御郡々御検見遅ク相済候故、野上ヶ延引
仕候、如御定当月中ニ上納難仕御座候間、日限少御延被仰付可被
下候哉

十月廿一日

去年之通十一月十日迄ニ上納指延候由、御年寄中被申渡候

同日

一村田小右衛門差出

覚

一八月五日邑久郡奥浦村ニ、七十歳余之禪門老人行倒レ果居申候、
御代官近藤三右衛門罷出、死骸相改申候、有残成義も無御座候ニ
付、葬申候

一九月十二日福岡村ニ五十歳余之女果居申候、乞食と相見申候、御
代官福尾夫兵衛罷出、死骸相改、胡参成儀も無之ニ付、則葬申付
候

一大富村五右衛門と申者、九月十八日ニ乞食老人打殺申候、村中江
隠シ居申候処ニ、其後露顕仕候ニ付而、九月廿九日走申候、彼村
庄屋年寄市左衛門口上書入御披見ニ候、御法故野上仕廻次第ニ尋
候へと申付候

口書

一当村之内ニ九月十八日之夜かつたい打殺葬申由、風聞ニ承候故、
近所之者ニ様子相尋申候へハ、市左衛門娘ニかつたい御座候ニ付、
ねたり込申ニ付、世倅五右衛門打殺申様ニ承候と申候ニ付、僉儀
致可申上と奉存候処、五右衛門走り申候故、方々相尋させ申候得
共、尔今有所知レ不申候、則親市左衛門口書指上ケ申候、以上

大富村庄屋

延宝九年十月五日

彦三郎

同村年寄

六兵衛

大富村走り人五右衛門親市左衛門口書

一九月十八日昼過ニかつたい私所へ参、勸進遣候へ共取不申、私内
ニかつたい御座候故かねたり込申ニ付、食式盃給させ候へハ、い
また足り不申候間、もつと給可申と申ニ付、左様ニ給させ申事ハ
不成由申候へハ、袋かますへ入申ニ而ハ無之、腹一盃ハ給可申と
申候、世倅五右衛門申候ハ、切々参存外之躰悪キ事ニ御座候、う
ち可申と申候へ共、私申候ハ、左様之義ハ無用と申候ニ付、猶々
かつたいそんくわい申ニ付、五右衛門打殺可申と申候へハ、如何
ニも打ころし被下候へハ、氏神と可存と申候故、棒ニ而突倒シ候
へハ相果申候ニ付、大事と奉存、死骸取捨申候、此段庄屋聞被申、
被致僉儀候由承候故、大事と奉存、五右衛門ハ九月廿九日ニ走り
申候、右之外申上事無御座候、以上

大富村

延宝九年十月五日

市左衛門

一九月廿六日之夜豆田村堤下三十二、三之男脇指ニ而ふへつらぬき、脇指其俥立なから、あおのけニ臥居申候、未明ニ注進申越候ニ付、早々罷出死骸相改、右之通ニ御座候、近所式拾ヶ村計惣百性手前吟味申付、胡参成儀無御座ニ付、書物申付置、近郡へ触遣申候、奥上道郡西大寺村紺屋与右衛門と申者之世忤助三郎と申者ニ而御座候、横井次郎左衛門方る助三郎義吟味仕候得者、常々乱氣之者ニ而御座候、九月廿五日を宿を罷出候、右之乱氣ニ候上ハ、毛頭申分無之由申之旨、次郎左衛門方る申越、彼村より死骸請取ニ参相渡申候、自然銀子など所持仕候ハ、人殺たる事も可有之哉と、死骸請取ニ参候者ニ豆田村之者ニ尋させ申候へハ、少茂所持不申候、依之胡参成儀ハ無御座由申候ニ付、其後僉儀も不仕候、委細ハ次郎左衛門方る可申上候

御年寄中此者之義横井次郎左衛門ニも様子被相尋候処ニ、次郎左衛門申候ハ、親手前吟味仕候得共、何之胡参成存寄も無御座、日来乱氣之躰にて宿ニ差置、家職之手伝仕せ置候由親申候旨申候

一九月廿七日昼牛窓関町七兵衛と申者、剃刀ニ而妻之ふへをかき、己も彼剃刀ニ而自害仕候、浅手ニ而妻隣江参呼り申ニ付、何茂出合申候、注進申越候ニ付、御代官近藤三右衛門私早々罷越、様子承口上書申付候、尤浅手と申ながら所悪鋪御座候故、医者申付療治仕せ候、則口上書入御披見申候、次第ニ平癒仕候

七兵衛口書

一私薩摩山働ニ参久々居申候節、相煩申候ニ付、彦山と申所ノ山伏を頼、何たるわけニ而加様ニ相煩申候哉とはつかけを頼申候へハ、

天和元年 御留帳評定書

山伏被申候ハ、其方女恨在之候由うらなハレ申候、弥々病氣耽と無御座候ニ付、罷登申候、女房前之様ニ無御座候付、扱ハ薩摩ニ而之うらないあい申候と存候て、女ふへ剃刀ニ而かき申候て、我身も自害仕候得共、双方浅手ニ而命別条も無御座、御療治被仰付有難仕合奉存候

一私養子親仁兵衛夫婦共ニ少も申分無御座候、永々相煩申候ニ成程心を付かんひやう被仕候

一私永々相煩申候ニ付、勝手ふつと迷惑仕、何共可仕様無御座候ニ付、心も乱氣ニ罷成、女を指殺、我身も相果可申と存、右之趣ニて御座候、已上

牛窓関町

西ノ九月廿八日

七兵衛

近藤三右衛門様

七兵衛女房口書

一私男七兵衛薩摩山江働ニ参申候処ニ、永々逗留、其内相煩被戻候薩摩ニ而被相煩候ニ付、山伏を頼はつけをくり被申候へハ、我才うらミをなし申とはつけニ出申由、其身相煩被戻候ニ付、我か仕わさにて相煩申様ニ被存候哉覽、此頃与風剃刀にて我才ふへヲかき被申候て、其身も自害仕候得共、双方浅手ニて別条もなく罷在、御療治被仰付有難仕合ニ奉存候、其外何之申分も無御座候、已上

七兵衛

西ノ九月廿八日

女房

親仁兵衛口書

一私養子智七兵衛、此度不慮ニ私娘さんふへをかき、其身も自害仕候得共、双方浅手ニ而別条も無御座、私壱人之仕合ニ奉存候、早

速御療治被仰付有難仕合ニ奉存候、養子智七兵衛少も於私ニ申分無御座候、尤永々相煩申候ニ付、別而かんひやう仕見申候処ニ、右之仕合ニ而御苦身ニ罷成、冥加恐敷仕合ニ奉存候、以上

牛窓関町

西ノ九月廿八日

仁兵衛

近藤三右衛門様

村田小右衛門申候ハ、此者其分ニ而指置候ても又重而勝手指詰り候ハ、何廉申事も可仕様ニ存候、元之在所上寺ニ而御座候間、上寺へ戻シ置可申候哉、いつ方ニ置候ても独り立ハ難成、飢扶持ニ而も不被遣候へハ成申間敷由申候

御年寄中被申候ハ、其俣牛窓ニ指置候ハいかニ候間、元之在所へ入置候様ニと被申渡候

一 去ル七月廿二日相窺候奥浦村庄屋惣兵衛兄馬場次右衛門、先年長門殿方暇申請候品承届、別儀も無之候ハ、在所へ入置候へと被為仰渡、相尋候へハ、年久敷義ニ御座候、何れも不覚、併勘解由殿家来伊木正与也方如此申越候、弥入置可申候哉

此者之儀在所へ入置候様ニと御年寄中被申渡候

一 長沼村近年御留敷ニ被仰付候、万御入用并只今迄運上銀立用仕候へハ、御損之様ニ奉存候、御内意窺尤ニ被思召候ハ、当年より運上敷ニ被仕候様ニと敷奉行衆へ相談可仕候、未之歳方西之年迄三年入用米式石壹斗式升四合、立来之運上九拾目、三年ニ一度竹百式、三拾束御伐被成候ても、御徳ニ而無御座候、其上敷土地差而広クも無御座候ニ付、只今奉窺候

御敷奉行申談、請敷ニ仕候様ニと御年寄中被申渡候

一 百性林三年ニ一度宛奉行江相達、松枝おろし申候、当年も時分ニ

罷成候、申請度由申候内、片岡村之儀取前松枝才伐候儀堅ク申付候様ニと被為仰渡候、定而御蔵林之儀ニ而可有御座候へとも、為念之奉窺候、縦百姓林ニ而御座候共、正儀村、両片岡、藤井村ハ留可申候哉

先只今迄之通留置候様ニと御年寄中被申渡候

西ノ十月廿一日

村田小右衛門

同日

一 国枝平介書出シ申候

一 浅口郡新田諸鳥取申運上銀三枚

一同混魚取申運上銀五拾目

右之通去年迄出シ申候、当年ハ雁鴨少ク混も次第二埋り魚少ク、第一当年ハ鰻一円居不申候ニ付、運上銀御下ケ被下候様にと申候、鳥運上式枚魚運上三拾目ニ可被為仰付哉之事

西ノ十月廿日

国枝平介

御年寄中被申候ハ、加様之所ハ次第二魚鳥少ク成申物ニ而候、運上銀式枚と三拾匁ニ下ケ遣シ可然候、明朝 御耳に茂相達可申由被申候

同日

一 津田十次郎・服部与三右衛門申候、諸郡へ罷出候検見之者共ほね折料如何程ツ、可被遣候哉、御郡奉行共早ク承指引仕度由、如何可被仰付哉と申候

何茂僉儀有之、上ノ検見人ニ四俵、中ニ三俵、下ニ二式俵被下可然候、下ハ有之間敷候へとも、位ハ三段ニ定置可然由、御

年寄中被申渡候

十月廿九日評定有之候へとも書留義無之候

十一月十日

下濃宇兵衛番

一津田十次郎邑久郡新田もくろミ存寄之書付差出シ候へ共、十次郎
江又戻ル

同日

一太田又七郎申候、国枝平介方々指越申由二而備中浅口郡樋目録差
出し申候

浅口郡樋目録

新樋

長老間

一横三尺

高式尺

片戸

亀山村

同断

長老間

一横老尺六寸

高八寸

片戸

同村

同断

長老間

一横老尺四寸

高八寸

片戸

同村

同断

天和元年 御留帳評定書

一長老間老尺

内法七寸四方

片戸

同村

同断

長三間

一横三尺

高式尺五寸

片戸

同村

同断

長七尺

一横式尺

高老尺五寸

片戸

道口村

同断

長三間

一横老尺

高六寸

片戸

同村

同断

長老間老尺

一横老尺

高八寸

片戸

七嶋村

居替

長八間

一横式尺五寸

高老尺

片戸

八重村

同断

長三間

一横三尺

両戸

同村

新樋

一掛樋 長老間四尺 片戸 板村

内法八寸四方

同断

一水拔樋 長老間半 片戸 同村

内法八寸四方

樋数大小合式拾七 内 拾五 新樋

拾貳 居替

右者来春入用樋

天和元年酉ノ十一月五日

国枝平介

太田 又七殿

右之樋僉儀有之、又七被越見及候ハ、関戸ニ仕所も可有之

候哉、樋数も減り申事も可有之、又七可被遣哉と申候

御年寄中明朝相伺可申由被申候

同日

一同人小作事土取場之義絵図を以相伺申候

御年寄中明日御披見ニ入可申由被申候

同日

一同人樋小屋番人手代共之書付差出し申候

口上

一六人 御鉄炮

内

四人ハ 樋小屋御番所式ヶ所

天和元年 御留帳評定書

老入ハ 樋小屋手代三人之内

老入ハ 御材木方手代

只今三人定番之者被為召抱候へハ、右六人指上、番所樋方御材木方手代共ニ相勤可申与奉存候、其上御為ニも成可申候と存寄候品も御座候故申上候

十一月七日

太田又七郎

僉儀有之、御番人三人ハ減り申様ニ候へとも、定番三人唯今被召抱候へハ、多ク成申候、其上定番ニ而候へハ、又悪敷事も在之候間、先只今之通可然哉と申候、御年寄中相伺可申由被申候

同日

一俣野善内・井上藤介御蔵米大坂へ差上せ候書付出シ申候

覚

一八万六千六百六拾壹俵

内

四万八千四百三拾五俵 太唐米

三万七千七百貳拾六俵 次米

右者酉ノ九月廿八日ハ十一月九日迄岡山御蔵片上金岡御蔵方度ニ登せ申候、已上

十一月十日

同日

一同人申候、沢権平・丹羽大助へ被下物、六月迄之分相渡り申候、七月迄之分去年之通ニ金子十両之割ニ可被遣哉、安井長吉も右両

人之通江戸ニ而相渡り申候、御当地ニ而拾兩之割ニ可被遣哉と申候、
右三人共ニ其通ニ相渡候様ニと御年寄中被申渡候

同日

一藤岡内助申候、御足輕御家中役共ニ御役仕廻申候、弥仕廻申候様
ニ可申付候哉、仕懸り之御普請者可申付哉と申候

御年寄中被申候ハ、先御雇分ニ致シ相勤させ候へと被申渡候

十一月廿一日

山田弥太郎番

一春田十兵衛書出シ申候

覚

一磐梨郡井手下大溝筋破損仕候得共、年々当分之繕御普請仕置申候、
来春ハ大溝筋下田原村ハ長福寺村迄溝筋壹里半余御座候、此繕御
普請仕度奉存候、当年も溝筋破損仕、第一之時分五、六日宛兩度
水絶申ニ付、井手下地高六千四百石余ニ而御物成六百八拾石余御
検見下ニ而捨申候、日用米百五拾石被下候ハ、来春早々仕度奉
存候、年々之破損ニ而溝筋根石垣も無御座候故、土手裏薄ク、当
夏も二ヶ所切レ申候、来春早々御普請仕度候事

酉ノ十一月廿一日

春田十兵衛

御年寄中被申候ハ、念之入繕申付候ハ、後々迄能可有之
候へとも、只今之時節左様に茂難成候、切レ申所計念之入繕
候ハ、能可有之候、明朝 御耳ニ達可申由被申候

同日

一同人書出シ

一大内村小幡源八開江百姓壹人出シ申度御事

御年寄中被申候ハ、惣村へ預り置作せ可然候、手遠ク作之
手廻し悪敷候ハ、其時出百姓之義竊可申由被申候

一源八家御用ニ無御座候ハ、申請度奉存候、沖村御郡境往還筋馬
繼ニ而御座候、庄屋方殊外狭ク御座候、少家広ケ置申度奉存候
其外小瀬木村ニ先年吉崎勘兵衛時分会所壹軒立置申候、洪水ニ破
損仕候、此繕ニ残分ハ仕度奉存候事

御年寄中被申候ハ、沖村庄屋家之義協道之事ニ候へハ、其通

ニ可仕候、小瀬木村会所之義先年ハ無之候ても別義も無之事
ニ候、源八家ハ払候て郡之貯銀ニ仕置可申由被申渡候

一佐伯之内父井村本庄屋彦右衛門と申者、大百姓ニ而御座候、近年
手前迷惑仕候ニ付、五、六年も簡略仕新田地壹町五、六反持居申候、
此新田江罷越五、六年之内居申、手前凌申度と申候、家四間ニ拾
壹間計之本屋こわし払家ニ仕、借銀之足りニ仕、跡屋敷田地ニ仕
度と申候、家こわさせ可申哉之事

御年寄中被申候ハ、此方ハ指図仕程之事ニ而ハ無之候、勝手
次第ニ可申付由被申渡候

一取前肩背村庄屋尔今追込置申候、御所務時分大所にて御座候、取
立も無心元奉存候間、御赦免可被為下哉事

御年寄中被申候ハ、此者之義庄屋御取上ケ可被成候哉、今
朝相伺可申由被申候

御竊被申候処、庄屋取上ケ可申由被 仰出候事

一同村御小人尔今郡之籠舎申付置候、此者之義尤重科之者ニ御座候
得共、八十式歳ニ成申母ヲ墓所江立寄申者ノ義ニ御座候間、何と
そ命御助被遣可被為下哉之事

十一月廿一日

春田十兵衛

御年寄中被申候ハ、無別義江戸欠落仕、御国江参候者者、此前も久敷籠舎仕候已後、御ゆるし被成候者も御座候、明朝相伺可申由被申候

御伺被申候処、指免シ候様ニと被 仰出候事

同日

一村田小右衛門書出シ

覚

一邑久郡間口新田毎年夥鋪水損仕候、公儀御損者御構被為成間敷候得共、民毎年折角造作仕、損亡之仕合不便ニ奉存候、新田所窪所、其上所々長谷多ク御座候、只今之分ニ而ハ後々年迎も水亡可仕候間、彼所民御救与被思召、何とそ水除之御普請被為 仰付候様ニと奉願候、若被為 仰付儀ニ御座候者、私之儀取分御普請方不調宝ニ御座候間、為見分御普請奉行衆可被下候

此段僉儀御座候て御普請者大分之義ニ而御物成者纔成所にて御座候、只今之砌御普請被仰付候義如何ニ御座候、村田小右衛門手前ニ而如何様に茂計ヒ申様ニ被仰付可然といつれも申候一同郡福里村新田右同断、当年も八拾町余捨り申候、磯上村水多ク参候節、彼村溝細ク曲り居申ニ付、毎年堤切レ新田江水請込、干申事無御座候ニ付而捨り申候、依之去年冬中村治左衛門呼請、右之溝広ケ直ニ仕度段相談仕候、右之趣治左衛門申上、并私も日用米之儀申上候得共、御不如意之刻被仰付間鋪与被仰候、彼新田百姓右之仕合故、在所々江罷戻申候、只今居申候者共、去年当年私方々之心付ニ而、命なからへ申迄ニ御座候、此新田主無シ地七

天和元年 御留帳評定書

町余御座候、私方々裁判申付根付仕候、凡銀壹貫貳、三百目入壹粒も御物成無御座候、爰ヲ以考候へハ、八拾町之耕作入用銀誠以大分之義、民作倒れ申段不便ニ奉存候、八十町之捨り米去年五百九拾石余、当年五百八拾石余捨り申候、彼所窪り御座候故、如何様ニ御普請被仰付候ても、十分ニハ悪水ぬけ申間敷候、然其外方之水不入候様ニ御普請被仰付、新田之内堀田ニ仕候ハ、縦水損仕候迎も、唯今之様ニハ御座有間敷様ニ奉存候、所々中樋なと御居可然所も可有御座様ニ奉存候、此所迎も私ノもくろミ無覺束奉存候、若御普請被仰付儀ニ御座候ハ、御普請奉行衆見分ニ可被下候、惣而水入悪米少々有之候由、御代官衆被申候得共、万ニ御普請被仰付候へハ悪米ニ而被仰付可然奉存、扣置申候

御年寄中被申候ハ、御普請被仰付候ても能可有之候得共、只今之御勝手其上上参候水強候へハ、上之御普請計ニてハ別条も有之間敷候、先延置可然と被申候

右両所絵図御披見ニ入申候

一虫明村類火人三拾七軒、此人数百七拾人御法之扶持方遣シ申候

以上

西ノ霜月廿一日

村田小右衛門

同日

一同人申候、来年ちやうせん人参候、就夫御扶持方薪才只今郡ニ米御残シ置被成候ハ、御手廻ニ能可有御座哉と伺申候由申候御年寄中被申候ハ、扶持方之義牛窓迄遣シ申義少之間ニ候間、先御蔵江払わせ可然候、薪之義ハ前嶋・鹿喰嶋之松伐せ候て能可有之哉、是も来夏申付可然かと被申候

同日

一同人申候、郡々酒造り申米高之義未被仰付無御座候、何茂様子承
たかり申候

御年寄中被申候ハ、大坂にまた不申来候、申来次第可申
渡由被申候

同日

一井上藤助・俣野善内大坂江上せ申候御米高書出し申候

覚

一八万八千九百貳拾貳俵

内

五万千百九拾六俵

太唐米

三万七千七百貳拾六俵

次米

右ハ酉ノ九月廿八日ノ十一月廿日迄岡山片上金岡御蔵に度々登
せ申候

同日

一岩根周右衛門差出し申候

書上

一児嶋町上之横手妹尾町へ通り筋之橋板長壹丈貳尺は、五尺六寸、
但板数四枚

一同下之横手小原町へ通り筋之橋板長壹丈貳尺は、七尺貳寸、但板
数六枚

一高橋町ノ横町小原町へ通り筋之橋板長壹丈貳尺は、六尺三寸、但

板数五枚

右之橋損シ申候故、通り不自由ニ御座候ニ付、御断申上候

児嶋町目代

天和元年霜月廿日

理右衛門

同

平右衛門

小原町目代

五郎兵衛

高橋町目代

甚大夫

岩根周右衛門様

周右衛門申候ハ、岡山町筋從 公儀被仰付来候内ニ而御座候
由申候

御年寄中被申候ハ、水野三郎兵衛ニ太田又七へ申渡し下奉行
遣し様子見及、破損繕申付候様ニと被申渡候

同日

一笠井太郎兵衛・岩根周右衛門申候ハ、庭瀬口上ノ田町ノ末之橋殊
外致破損、馬者不及申二人も渡り不自由ニ御座候、破損可被仰付
候哉、此橋侍共屋敷之内ニ而町ニ而も在ニ而も無御座候ゆへ、兩人
罷出申候

御年寄中右同前ニ被申渡候

一周右衛門申候ハ、嶋津菊三郎殿当月廿六日宮内御泊り、廿七日藤
井昼休、片上御泊り、廿八日三石昼休之由、使者申候、人馬之義
町人共相尋申候へハ、継馬九拾疋人足三百五拾五人入申候由、宮

内ニ而雇、藤井ニ而繼申由申候、御幼少ニ候故、御泊り相違可有御座も難究候由申候

同日

一笠井太郎兵衛申候、平瀬之新田未高究不申候、只今檢地被仰付時分ニ御座候由申候

御年寄中被申候ハ、程近ニ居申候間、片岡次郎大夫ニ可被仰付か、明朝相伺可申由被申候

御伺被申候處、次郎大夫遣し候へと被 仰出候事

同日

一同人申候、先日出石之火事類火人之内作人御座候、此者在之百姓ニ御座候へハ、三十日分御ふちかた被下候、町之内ニ而御座候間、いかゝ可被 仰付候哉と申候

御年寄中岩根周右衛門へ、町人とも類火之者御扶持方被下候哉と被尋候へハ、不被下候由申候

左候ハ、焼米共御引被遣事ニ候間、御扶持方被下ニ不及候由被申候

同日

一津田十次郎申候、当春飢人共百姓自分ニ育申候者共扶持方之代可被下候哉、但御褒美之様ニ別段ニ可被遣候哉、右之分被遣候ハ、私請込置候米之内ニ而遣し可申由申候

同日

一同人申候、うゑ人共薬用申候者共江者、十次郎手前より薬代遣し可申由申候

同日

一同人口津高郡本明寺村百姓共口書四通差出し申候

同日

一清九郎事御伺之上ニ而籠舎御免、元起者津田十次郎手前ニ有之

十一月廿九日

長屋新左衛門番

一国枝平助・村田小右衛門申候、昨日惣御郡奉行中内寄合仕、何茂相談之上相窺申義共書付出し申候

覺

一当暮御年貢納所難仕者共之内、家売申度与申者ニハ、売せ可申哉之事

此段色々僉義在之、百姓共家売候義ハ、先年方無用と被仰付候、今以其通可然候、然共御年貢差語り候者ハ、御奉行方立替ニ仕、家ハ、公儀家ニ仕置可然哉、明朝相伺可申由御年寄中被申候

一奉公人来春江御延被成可然と申御郡も御座候事

此段僉義有之、前々此義出候へとも、春延ニ成候へハ百姓之為に茂不立候間、年内ニ払可然候、御耳ニも達可申由御年寄中被申候

就夫奉公人出替之時分十月ニも被成候ハ、奉公人未払申為ニ可然哉と御郡奉行中内寄合之節津田十次郎申談候得ハ、何茂可然様

二存候由申候、如何可有御座哉と僉儀有之、出替十月ニ成候ても暮給を取替米ニ名をかへ申たる計ニ而百性共御納所之足りニも成不申事故、僉儀止申候

一御巡見衆万人用銀早ク請取申度奉存候事

西ノ十一月廿八日

御年寄中被申候ハ、御巡見衆入用之事数々之事ニ候間、追而僉義候て可申渡候、道作り之夫役ハ百性共可仕事ニ候間、立被遣間敷事ニ候、明日 御耳ニも相達可申由被申候

同日

一笠井太郎兵衛差出し

御野郡諸事御入用書上

一銀札五貫六百目

四日市大井手切レ口御用御買石四百坪之代、但舟数千式百艘、三艘壹坪ニメ壹坪ニ付拾四匁宛、野口弥平兵衛差紙有之

一同四拾六匁六分

竹田村上二ノ樋前後石垣御用御買石、三坪三合三勺ノ代壹坪ニ付拾四匁ツ、右同人差紙有之

一同百拾五匁壹分

米倉村惠水拔捨石六坪六勺ノ代、壹坪ニ付拾九匁ツ、右同人差紙有之

一同貳百目

四日市大井手切レ口御用明俵四千俵之代、壹匁ニ付貳拾俵宛、右同人差紙有之

一同五拾六匁八分

同所御用大工貳拾貳人結手三人手間賃、但杭木けつりちやかこ竹わりニ仕申候

一同四百八拾九匁九分

福嶋村・青江村・下中野村御弁当所三ヶ所

繕御入用、浜野村・西長瀬村御制札場二ヶ所仕直シ御入用共

合六貫五百八匁四分

右之銀去年御救米之内残シ置払相済シ申候

一銀札七百四拾五匁

平瀬井手繕御買石七拾四坪五合之代、壹坪ニ付拾匁宛、但御野郡よし払代にて相済シ申候、野口弥平兵衛指紙有之

天和元年十一月廿九日

笠井太郎兵衛

同日

一俣野善内・井上藤助申候、米只今町相場上米七拾三匁仕候、大坂

七拾六匁六分ニ売レ申由申来候、御蔵相場御究可被成かと申候

何茂僉儀有之、七拾五匁ニ御定可然由ニ而、則御年寄中被申

渡候

同日

一横井次郎左衛門申候、段ノ原山廻り之家葺替仕候入用、小物成銀ノ内にて遣し可申哉と申候

御年寄中其通ニ仕候様ニと被申渡候

同日

一同人申候、吉井渡シ舟破損繕入用、是も小物成銀之内ニ而遣し可申哉と申候

御年寄中其通ニ仕候様ニと被申渡候

同日

一津田十次郎・藤岡内助・太田又七水戸入用銀つもり目録出シ申候

右三人へ明日御城江持罷出候様にと御年寄中被申渡候

同日

一小林孫七郎差出シ申候

覚

一田畠九反六畝拾九歩

本銀返し三売置申候分

代銀壹貫五百目

一同老町三反七畝廿貳歩

懸物ニ仕置申分

此借銀壹貫七百目

外三百目

当春扶持方不足ノ借銀

借銀合三貫五百目

但利足平シ貳割壹歩

一同老町貳反拾九歩

売残ル浮地

田畠畝数合三町五反五畝

内 八反七畝

田方

貳町六反八畝

畠方

内

家内人数貳拾人

田畠老町八反九畝七歩

自村分手作仕度候

残田畠老町六反五畝廿三歩

福田村分あて作ニ心当テ

加徳米拾石 此銀五百目

但足石ニ付五拾匁かへ

右之通ニ御座候、借銀三貫五百目之分歩安成銀ニ御借替被為成被下候者、元入ニ仕、年々ヲ以相済申様ニ仕度候、老割銀ニ仕候ても世中相違無御座候へハ、拾貳、三年程ニハ皆済可仕と奉存候、只今ノ分にてハ近年之内ニ浮地不残売払、乞食同前ニ罷成申候、

乍恐可然様ニ御相談可忝候、以上

口塩田村

延宝九年八月六日

市兵衛

青木善六様

御年寄中被申候ハ、市兵衛事差而從 公儀御構可有者にても無之候、孫七郎心得ニ而逼塞ニ而も致させ、何とぞ取続候様ニ仕せ見候ハ、可然哉と被申候

同日

一同人品ノ口状書差出シ

一当春牛持不申者共ニ他借を以牛調遣、根付仕せ申候、当春奉存候ハ、秋麦時仕廻候ハ、右之牛取返売払、利分者御郡貯物之内ヲ相添、返弁仕候ハ、来春者自分ニも才覚可仕様ニ奉存候故、右之通ニ申渡シ候処ニ、唯今牛払可申と申候へハ、民も不勝手ニ付、殊外下直ニ申候故、過分之損銀御座候間、其俣牛持せ申度奉存候、此銀元利共五貫百七拾五匁御返弁ニ為遣候ハ、当暮ノ三年ニ利なしニ返上可申付候

牛銀之事、此節 上ノ御かし可被成儀ニ而無之候、又余郡ノ

茂加様之類可申出候、牛ハ有之事ニ候へハ、何とぞ孫七郎作

廻ニ而申付候様ニ申聞可然と、何茂僉儀有之、御年寄中 御

耳ニ達シ可申由被申候

一当年麦不作人共之儀、秋初御理申上候処ニ、他借仕遣候様にと被為仰付候故、則他借仕遣申候、此返弁之儀其節御伺申上候得共、御救米之内ヲ以返弁可仕由被為仰付候、銀高三貫貳百拾匁元利共一当年御制札場繕并新ニ仕候分、樋之繕入用此代銀共小物成銀之内

ヲ以被為仰付被下候様ニ奉存候、銀高五百貳拾九匁貳分ニテ御座候

小物成銀之内ニ而立可遣由御年寄中被申渡候

一八木山御用之石并御作事方入用品ニ度々申来候、只今迄者公事役ニ申付候、毎年人夫過分之儀ニ御座候、和氣御郡之義者往還筋ニテ御座候故、被為思召候方ハ百姓共公事役相勤候間、右之御用之儀相勤候時分ハ、御扶持少宛被為遣可被下候哉、終ニ加様之御訴訟申上候儀無御座候得共、近年ハ打続世中不順ニ御座候ニ付申上候、諸御奉行御扶持方米残居申候、当分ニ此内ヲ被為遣被下候様ニと奉願候事

此段者御扶持方と有之候てハ、終日詰候て勤候ニ而も無之候故、如何ニ候、重而御用之節日用つかい慥成者孫七方ハ見届出シ、賃銀遣シ候様ニ有之可然と僉儀有之

御年寄中明日相伺可申由被申候

一口塩田村往還渡舟損シ申候間、造替被為仰付可被下候事

作り替候様にと御年寄中被申渡候

一延宝七年和氣村往還渡船造替被為仰付候之所、新船入用銀と目録仕候故、御勘定場寄せニ出居申候、同村渡シ舟式艘御座候様ニ、寄せノ表当秋初見申候ニ付、仕替船之由断申候へハ、御手紙無御座候てハ、寄せ消シ申儀難成由ニ御座候、御手紙被為下候ハ、忝艘分寄せ消シ申度奉存候事

御手紙遣し可申由御年寄中被申候

一日笠村御紙漉二郎左衛門、先年銀三貫五百目御借、三人御扶持方被為遣候へとも、不身躰罷成候而銀返弁仕兼申ニ付、御扶持方を御借銀之方江差上申候、当年ひしと迷惑仕候由申候、此二郎左衛

門義紙漉申義上手ニ而候故、殿様御耳ニも相立居申候、今一度様子申上候事

此者今程御用紙も漉不申候へハ、此節之事ニ候間、其分ニ被成置可然と僉儀有之、御耳ニも達可申由御年寄中被申候

一同村兵大夫儀、御勘定場御用紙漉申ニ付、先年潰し申候ニ、利なしニ銀三貫目御借被成候、是も来年方ハ紙漉申義難成由申候、此者之義も如何可仕候哉之事

右二郎左衛門同事ニ被申候

一坂根村ニ渡船御座候、是ハ助左衛門時分方救之内ニテ繕入用など遣申候、川向ニ和氣郡田地御座候而作仕候故、こやし舟ニ而御座候大水之時者御状箱なども此所方越申義も御座候、私御用承候而も貯銀之内などニテ繕遣申儀も御座候、又ハ救之内少遣申義も御座候、是如何可仕候哉、舟も破損ニ及候由断申ニ付、様子申上候事

此段差而 上る被仰付義ニテハ無之候へとも、前々繕遣シ

候ハ、其通ニ仕候へと御年寄中被申候

一申之極月より飢人御座候ニ付、他借仕育申候、明ル春より四月十五日迄御育米片上御蔵ニテ被為下候処ニ、不足仕候故、津田重二郎へ申候得者、兩度之相渡育申候処ニ、四月末方五月ニ成候迄飢人御座候ニ付、年内元末兩度二百三拾七石六斗八升他借仕、育せ申候、此返弁之儀者御郡貯物少御座候間、一、二年ニも返弁可仕と奉存候事

以上

西ノ十一月廿六日

小林孫七郎

是ハ郡貯物之内ニ而返弁作廻仕候様ニと御年寄中被申候

同日

一 国枝平介書出し

覚

一 浅口郡御新田之内三好三折・鴻池仁兵衛ニ拾町宛新田免ニ壹ツ成下ケ永代被遣候、此者共之田地永代ニ売申時ハ先々迄壹ツ成御下ケ被遣ニ而ハ御座有間敷候、年切ニ売申候内者其俣壹ツ成下ケ可被遣哉之事

酉ノ十一月廿五日

国枝平助

此田地縦一年切ニ而も兩人之手はなれ外之者作仕候者、有免ニ申付可然と僉儀有之、御年寄中被申渡候

同日

一 村田小右衛門差出し

一 極月六、七日頃毎年兎狩被 仰付候事

此段達 御耳ニ御意次第ニ可申渡由御年寄中被申候

御窺被申候処、先無用ニ可仕由被 仰出候事

一 上嶋彦二郎在宅終ニ繕不申候、御断申上繕申度由申候

輕ク自分之家之様ニ心得、来春仕候様ニと御年寄中被申候

一 差上銀主共何茂中間方へ罷出相断申候事

只今御手付可被成様無之由御年寄中被申候

一 牛窓村百姓林式年ニ一度宛枝落申候、当年伐別ニ罷成候枝打申度

由申候

十一月廿八日

村田小右衛門

枝うたせ候様ニと御年寄中被申渡候

同日

一 河合善大夫差出し

一 生坂村瀬兵衛与申百姓抱前田畠三町貳反余御座候、悴三人持居申候、戸川内蔵助様御領分中嶋村、元来瀬兵衛在所ニ而御座候ニ付、田地五町余御座候、今度悴之内孫八と申者中嶋村江遣シ申度奉願候、生坂村抱前田地分ケ地ニ仕候得ハ、銘々迷惑仕候、御免被為成被下候者忝可奉存候、以上

生坂村庄屋

天和元年十一月廿八日

助三郎

河合善大夫様

勝手次第ニ遣し候様ニと御年寄中被申渡候

同日

一 同人申候、当夏申上候しうとめノふゑかき候女、尔今籠舎仕り居申候、何とそ可被仰付哉、御穿鑿も被仰付候ハ、唯今者百姓共闇敷御座候間、来春迄御差延可被下哉と申候

御年寄中来春迄差延可申由被申候

一 同人申候、備中荒村吉右衛門と申者、当夏ぬすミニ逢申候、その失物同村庄屋文左衛門悴七右衛門と申者岡山ニ而質物ニ置候段吉右衛門承、盗人ハ七右衛門ニ而可在之と申候内ニ、七右衛門ハ三介と申者之手前右之色物者買申候間、彼三介ヲ尋出シ候て吉右衛門ニ引渡シ可申と存、方々尋ニ出申候由、其跡ニ而七右衛門盗ミ顕れ申候故、欠落仕候とて一類共方々尋ニ出申候由、七右衛門承所存とハ相違仕候間、右之趣上原村安左衛門迄申届、其上ニ而三介尋可申と存候由申、罷歸候ヲ捕置、善大夫方へ断申候故、善大夫七右衛門手前穿鑿仕候得共、分明ニ盗人共難究様子ニ御座候、

此七右衛門親共不和ニ而当春の新庄ノ庚申へ罷出、茶屋仕居申候、

日来何共不知心底之者ニ御座候付、籠舎申付候、七右衛門爲ニハ

吉右衛門伯母智ニ而御座候由、去年荒村普請仕候節、七右衛門砂

ノ入様悪敷候逆、吉右衛門しかり候へハ、翌日昨日之遺恨ニ伯母

智吉右衛門ヲ散々打擲仕候、其節も善大夫承候而即時ニ候ハ、

左様ニも可有之哉、期過親方之者ヲ打申候段不届と申、追込置申

候義も御座候由、取前者吉右衛門善大夫方へ七右衛門儀急度被仰

付可被下候、此者安穩ニ罷出候へハ、私ニ述懐可仕者ニ而御座候

由度々断申候、近キ頃ハ吉右衛門口ふりやわらき、重而七右衛門

理不尽仕間敷由一類共談合候ハ、取早盗物之儀者其分ニ可仕候

間、何分ニも御済シ被成被下候様ニと善大夫江断申候由ニ御座候

御年寄中被申候ハ、七右衛門義彼三介ヲ尋出し可申候、三

助捕出し候ハ、村へ可入置由申付、追込可然哉相窺可申

候由

御伺被申候処、七右衛門事差免、三介ヲ尋ニ参候へと可申付事

同日

一尾関弥五左衛門書出シ

一兒嶋郡浦田新田水入悪米百七俵御座候、右之悪米御普請米として

申請度奉存候、右之新田水よけ川堤幼稚ニ御座候故、度々大雨之

節水越堤破損仕候間、上置腹付川さらゑ仕度奉存候、以上

十一月廿九日

尾関弥五左衛門

御年寄中此悪米之儀遣し可申候、御耳ニ達可申渡由

同日

一同人日比村八大夫尔今籠舎仕居申候、就夫一類共又願之書付之由
ニ而差出シ申候

乍恐口上

一八大夫義ニ付、当正月十三日ニ権之丞私ノ連判書付差上ケ申候、

八大夫義ハ前々度々出入沙汰申出シ候事迷惑ニ奉存、常々呉見

仕申候得共、一円聞入不申、其後数度出入沙汰仕、御公儀様江茂

度々御断ケ間鋪事申上、近年八月々被為仰付御判形も不仕、とか

く我假成心根ニ而氣違同前ノ者にて御座候へハ、御法事ニ付御助

被為下、村へも御入被為成候共、又重而如何様之儀ヲ可申上哉、

左候ハ、重々不届ニ被為思召、重而如何様ニか成行可申与迷惑ニ

奉存、乍恐私之書付差上申候、八大夫義ハ命さへ御助被為下候へ

ハ、他国へ参候てもおち付居申所、方々ニ心当も御座候、妻子之

義ハ村之者共も念頃ニ仕申候故、已来百性ニも取続申候へハ、銘

々口すき共奉存、書付調申時、右之段々妻子ニ申談候へハ、八大

夫女房申候ハ、子として親之義ヲ申上候段如何申候、権之丞ハと

かく能様ニと申候ニ付、書付調判仕候へと権之丞ニ申候へハ、書

テ給候へと申候、私何心も無御座書判仕候、尤文言も私老人之文

にて御座候、已上

日比村

延宝九年十月十九日

二郎左衛門

尾関弥五左衛門様

乍恐申上候

一当正月十二日之夜更、二郎左衛門方私ニ参候様ニと呼二人を越申

ニ付、母私参候へハ、二郎左衛門申候ハ、八大夫籠舎仕候義ニ付

御侘言申上度と申ニ付、私申候ハ、御侘言者如何様ニ可申上哉と

母私申候へハ、二郎左衛門申候ハ、八大夫事狂乱同前之者ニ而御座候へハ、此度御助被為下、所江御返シ被為成候ても、如何様之徒を又仕出し可申茂不知候間、命を御助被為下、他国へ御払被為下候者有難可奉存候との趣ニ而御座候ニ付、母私申候ハ、明日迄相待給かし、在郷ニ居申姉々へも其趣聞せ度と申候得とも、平大夫被申候ハ、明日四ツ方内ニ急キ差上ケ申事ニ而候へハ、相待申事不成と被申、判仕候様ニと被申候へとも、御公儀様又ハ親へ対シ無勿躰存、私名判無用ニ被致候様ニと申、判ハ不仕候、為其如件

日比村

延宝九年十月十九日

權之丞

尾関弥五左衛門様

御年寄中被申候ハ、此八大夫義ハ重々不屈者ニ候へハ、御成敗被仰付候ても可然哉、先一類共願之書付達 御耳可申由被申候

御伺被申候処、八大夫事只今之通籠ニ可差置由被 仰出ル

同日

一蒔田權之佐殿家來る河合善大夫方江差越書狀之写

一筆致啓上候、然者 伊予守様御領分窪屋郡之内八田部新村分之田畠ヲ水谷左京亮様并蒔田權佐領分賀夜郡之内八田部村之百姓共代々持來出作仕候処、權佐百姓共出作分之庄屋茂左京亮様御百姓之内方相勤、備前江之上納其外諸事左京亮様御百姓方へ参埒立申ニ付、万事取またき權佐百姓共不勝手迷惑仕儀共数多御座候間、左京様御百姓衆出作之分ハ、左京様御百姓之内方庄

天和元年 御留帳評定書

屋御立、權佐百姓共出作之分ハ權佐百姓之内方庄屋御立被成被下候様奉願候、則百姓共訴狀ヲ御領分御庄屋西郡武助方迄指上候、此趣数年願申候、今度達而百姓共痛ニ罷成候由申候、早竟者小身之權佐痛ニ罷成候間、此段被聞召届、百姓共奉願候通ニ被仰付被下候ハ、忝可奉存候、右庄屋之儀者先年權佐領分ニ而相勤申義も御座候、此才之趣御了簡被成、願之通偏奉頼候、恐惶謹言

十一月二日

中嶋七郎兵衛

玉田文右衛門

河合善大夫様

乍恐申上訴訟之事

一備前様御領分田地水谷左京亮様御内へ貳百石程、蒔田權佐内へ五百石程、先年方出作仕候、權佐百姓方上納仕候庄屋役も左京亮様御内之百姓相勤申候故ニ、權佐内方備前様江上納仕候義、諸役共ニ左京亮様御内へ参、權佐百姓共埒立申ニ付、諸事またけ、權佐百姓迷惑仕候義多ク御座候間、權佐内方出作仕高之分、庄屋を權佐内百姓ニ向後被為仰付候様ニ御歎申上候、殊今度地頭方領内仕置改申儀共御座候付、指合ニ罷成、弥以難義仕候間、權佐内方備前様江直ニ上納仕候様被為仰付被下候様ニ奉願候、先年者權佐内方茂庄屋相勤申時も御座候間、願之通被仰付候者、難有可奉存候、御領諸事之儀先年方只今迄之通、仰ニ随ひ可奉相勤候、此才之趣御奉行様へ御取成被成候而、願之通御慈悲を以被仰付被下候様奉頼候、以上

蒔田權佐領分

西十月廿六日

備中八田部村惣百姓共

西郡村

武 助殿

河合善大夫ハ蒔田権佐殿家来衆江返書之写

夜前者預貴札拝見仕候、仍 権佐様御領分御百姓衆ハ伊予守領分眞壁村・溝口村之内ヲ作被致候分、庄屋之儀ニ付被仰下御一通、是又拝見仕候、御百姓中ハ伊予守領分西郡村武助ハ申者之方へ遣被申書出シも、昨朝見申候、早速御百姓中望之通ニ可仕義ニ御座候得共、彼地庄屋役ヲ水谷左京亮様御百姓之内善兵衛ハ申者へ頼置申候間、一応申聞、追而從是可申上候、善兵衛方指支申儀ハ有之間鋪哉と存候得共、役義ヲ頼申事ニ候へハ、押而難成様ニも奉存事ニ御座候、先可申上義品ハ被人御念、御紙上忝還而痛入奉存候、何様以折可得御意候、恐惶謹言

十一月三日

河合善大夫

中嶋七郎兵衛様

玉田文右衛門様

御報

乍恐差上申口上書之事

一御領分新村御帳私代ハ預り居申候処ニ、今度 権佐様御領分之御百姓中ハ新儀ニ御帳引分ケ、御庄屋之望被申上候儀、子細可有御座与奉存候処ニ、御訴狀之面ニハ私儀何之如ハも無之由御座候得共、前廉様ハ被申上、今更右之通ニ御座候迎、御帳引分ケ申儀外聞旁迷惑至極ニ奉存候御事

一庄屋之義五十年余勤来申候処ニ、何之様子も無御座、御帳引分ケ被為仰付候へハ、其段ハ幾度も御断可申上候、新村庄屋之義御不勝手ニ思召、御領分ニ御庄屋被為仰付候ハ各別之儀ニ御座候、菟

角入作之内ニ庄屋被為仰付候ハ、仕来之儀ニ御座候間、被為仰付可被下候、帳面御引分ケ被為成候へハ、残ル御百姓中迷惑仕候間、乍恐御了簡被遊可被為下候御事

一帳面分リ不申候得ハ、権佐様御百姓中迷惑被致候由、如何様之儀にて御座候哉難心得奉存候、此段私御地頭ニも申分ケ無御座、迷惑至極ニ奉存候御事

右之趣菟角達而御断可申上候間、乍恐宜様ニ御了簡奉頼上候

新村庄屋

十一月五日

善兵衛

山手村御庄屋

武 助様

一筆致啓上候、弥御堅固御勤可被成与珍重奉存候、仍而先日被仰下候庄屋之儀、善兵衛へ申聞候へハ、何角断共有之候故、御領分之御百姓衆望之通ニも難仕候、乍去貴様方ハ被仰下御事ニ候間、来春此方領分西郡村武助ヲ以善兵衛方今一往申通シ見可申候、将又此間御領分之御百姓衆被參候間、善兵衛断之品粗申聞候、猶期後音候、恐惶謹言

十一月十九日

川合善大夫

玉田文右衛門様

中嶋七郎兵衛様

先日者預貴札忝致拝見候、然者新村分出作之儀付、此方百姓共訴訟之趣御聞届被下候得共、少御遠慮も御座候由、御紙面之通被入御念忝奉存候、急ニ埒明不申義ニ御座候ハ、春ニ罷成思召之通ニ宜様ニ御支配被成可被下候、誠御六ヶ敷事申上候段、御難儀ニ可被思召候得共、右如申上候間、奉頼儀御座候、恐惶

謹言

十一月廿七日

中嶋七郎兵衛

玉田文右衛門

河合善大夫様

御報

猶々早々御報可申上候処、無扨義御座候付、延引御免可被下候、
以上

十二月十日

下濃宇兵衛番

一山脇茂兵衛・岡助右衛門御勘定済目録差出し申候

同日

一国枝平助申候、広内権右衛門方々差越申書付、御代官服部六左衛
門殿手代方之状之写之由二而差出

乍御報貴札致拜見候、然者松嶋村申酉兩年之御成ケ付御書付可
被下候、差上申候間、此方支配下庄村迄可被下候、中足村・惣
善寺村ハ各様御作廻二而無御座候由、得其意存候、右両村ハ御
公領近村二付而御成ケ付書付差上候様ニと江戸御勘定所方被仰
付候間、如此ニ御座候、右両村之御役人相尋申候て可申進之候、
各様方ハ松嶋村計御書付可被下候、恐惶謹言

十二月八日

高野佐左衛門

河合善大夫様

広内権右衛門様

同日

天和元年 御留帳評定書

一春田重兵衛申候、竝前申上候可部・三宅・父井村ノ山公事之儀、

弥御下ケ被下候者囁せ済シ申度由申候

御竊被申候処、春迄相延可申由被 仰出候事

同日

一同人申候、御小人六拾人程御へし被成様ニ原田長左衛門申候、御
給米御年貢ニ当テ居申事ニ御座候間、御扶持被放候ハ、来春戻
り米ニ被成被召上被下候様ニ願申度候、先年茂加様之例も在之由
ニ候、月番故私ニ申上候様ニ何茂中間共申候

御年寄中被申候ハ、只今暇被遣候ハ、左様ニハ成間敷事ニ
候、先年も其例も在之候哉、大杉平之丞ニ吟味仕候様ニと被
申候

同日

一太田又七申候、毎年大工瓦師棟梁共ニ前銀御借シ被成候、当年も
拜借仕度由願申候、屋柵葺木挽ハ終ニ不申上候得共、当年者迷惑
仕候故申上候由

拝借銀之覚

一壹貫四百目 大工棟梁七人

七郎右衛門

角右衛門

一人二式百目宛

六左衛門

権兵衛

茂左衛門

大郎兵衛

次左衛門

次郎左衛門

一五百目

瓦師

与八郎

平兵衛

一六百目

屋柵葺棟梁

一人二三百匁ツ、

一百目

木挽棟梁

弥五兵衛

銀合式貫六百目

酉ノ十二月八日

御年寄中被申候ハ、前々借シ来之者ニハ御かし可被成候、
屋ねふき木挽ノ棟梁共ニハ前銀かし来無之ものハ唯今御かし
被成候ヘハ、外之指支ニも可成候間、御かし被成間敷よし又
七ハ被申渡候

同日

一中村治左衛門磐梨郡飢人共仕上ケ候御普請帳差出シ申候

同日

一同人赤坂郡村々百姓御普請出来目録差出シ申候

同日

一俣野善内・井上藤助申候、作州上大豆三俵ニ付六拾四匁仕候、御
蔵相場式匁上リニ被成、六拾六匁ニ御定可被成哉と申候

御年寄中右之通ニ相定可然と被申渡候

十二月廿五日

山田弥太郎番

一中村治左衛門・藤岡内助・太田又七申候ハ、石屋次兵衛当年借銀
大分ニ罷成、ひしと潰れ申候、度々御用も能相勤申候、何とそ御
了簡被遊可被仰付候哉、ケ様ニ申上候義御用能相勤、其上御足輕
共次兵衛居申ニ付、石をも切習申候、唯今借銀九貫目余御座候、
家を売新田所江引込、御用御座候時分ハ罷出相勤可申候様ニ申候、

然共新田江引込居申候てハ、手前三抱置石切も無御座、急御用之
筈ニハ合不申候、町銀之内ニ而拾貫目計御かし被成、なしくつし

ニ被仰付被遣間敷哉と申候

十次郎申候ハ、和意谷御用二度々損を仕候由承候得共、何共不申
出候故、此方立遣し申義も成不申候、惣而御用之義能勤申者ニ
御座候由申候

何茂僉義仕候様ニと御年寄中被申、何も申候ハ、次兵衛義御
用ニ遣申物ハ不及申ニ、下ニ而自分ニ用之義ヲ申付候ても無
欲ニ埒能仕申者ニ御座候間、取続申様ニ被成被遣可然と申候
御年寄中被申候ハ、五人扶持被下、借銀之義ハ下にてかり
取続候様ニ周右衛門・重次郎江治左衛門・内助・又七計遣し
可然と被申、明日達 御耳可申由被申候

御伺被申候処、石屋次兵衛五人扶持被 仰付候、借銀之儀ハ
中村治左衛門・藤岡内助・太田又七右岩根周右衛門・津田重次
郎江申談、下ニ而借シ年々ニ払上させ候様ニと被仰渡候事

同日

一井上藤助・俣野善内申候、昨日米上リ申、御蔵出来御切手三俵
ニ付七拾六匁五分仕候、式匁上リニ被仰付候得者七拾九匁ニ御座
候得共、七拾八匁ニも可被仰付哉と申候

御年寄中被申候ハ、あまり高直成事ニ候間、先七拾八匁ニ究
候得と被申渡、追而又上リ候ハ、上ケ可申由被申候

同日

一同人書出シ申候

一中持七郎兵衛と申者、御詰米藏廻シ俵之役義相勤させ申候処、諸事作廻能仕候、尤廻し俵出し候時、芸ほこり払、計舛へ米入様共成程念入、御藏御法之通ニ奉行共之心ニ叶候様ニ相勤申候

一百姓并払之者共へ毛頭依怙鬚眉無御座様ニ相見申候

一奉行手前取込之時分ハ右之俵廻し之者勤様能候得ハ、御為又ハ奉行作廻も能御座候、以上

十月三日

御年寄中被申候ハ、此義 上江申上義ニ而ハ無之候、善内・藤助見計ニ可申付由被申候

同日

一同人申候ハ、番兵左衛門来年之役米御藏へ払、切手取置申候処ニ、取前之火事ニ焼申候、重而切手御藏奉行出しくれ申様ニ仕くれ候へと申候由申候

御年寄中被申候ハ、調遣シ候様ニ御藏奉行へ申達候得と被申渡候

同日

一太田又七書出シ申候

一私義在ミ樋之吟味ニ御出シ可被成候と就被仰付候ニ、何れも御奉行共と打寄相談仕候、先年ハ被仰付候樋にて御座候へハ、御郡奉行又ハ百姓共も、樋ヲ関戸分木ニ被仰付候てハ成申間敷由理り申候へハ、押而文木ニ仕候ても、若来年年柄悪敷御座候ても、文木故と申候へハ、申分ケも如何奉存候間、先此通御郡奉行手前御吟味被為成候て、以後罷出候様ニ仕度奉存候而書上ケ申候

天和元年 御留帳評定書

一川筋塩樋堤下之分者樋ニ不仕候てハ成申間敷候

一堤方内溝之樋ハ不残文木関戸ニ被仰付候而苦間鋪と何茂寄合僉儀仕候、若くりぬぎ可申与奉存候へハ、扇板きやふ樋を入可申候、尤橋ニ用申所者、古板を以か丸太ニ而も橋を懸ケ可申候、橋下崩レ申候ハ、是以石垣か又ハ古板を以成共橋台可仕候、若関戸文木ニ仕候て者成申間敷と申上候義候ハ、如何様之悪敷品候由御吟味被成候共、橋ニ用申か又ハ水くり抜申外ハ御座有間敷奉存候、第一文木ノ板ヲ度ミ取置申、手廻シ六ヶ敷奉存、樋ヲ好申と奉存候

一内溝ノ深サ壹尺五寸方内者、関戸文木不仕候而も、土俵関又ハ芝関にても水上リ可申候

一惡水抜も大惡水抜か又ハ底樋などハ樋ニ而無御座候ハ、成申間敷と奉存候、其外少宛之惡水拔者文木関戸ニ而調可申与奉存候

一船通シ樋者猶以関戸ニ而相調可申与奉存候
右之品ミ何茂打寄詮義仕候、右之通ニ從 公儀者不被仰付候間、不仕候而不成所者自分ニ可仕候、此上ニ而も從 公儀被仰付可然所ハ、以御吟味可被仰付候哉、已上

十二月十六日

太田又七郎

御年寄中被申候ハ、尤ノ書出シ候、明日達 御耳可申由
御伺被申候処、郡ミ江舩可申由被 仰出候事

同日

一上嶋彦次郎申候、赤坂郡黒本村庄屋甚三郎無筆ニ御座候ニ付、読書を頼申者ニ庄屋役米を不残遣し申候、外之庄屋ニよミ書不仕人を頼候得共、何も遣し不申者計ニ御座候、右之甚三郎ていしんものニ而御用能相勤申候、何とそ御ほうひをも被下間敷候哉と申候

御年寄中被申候ハ、上^ろ被仰付義ニ而ハ無之候、彦二郎何
とそ心を付遣し候へと被申渡候

極月廿九日
御年寄中右之書付披見之由ニ而左門被相渡候
横井次郎左衛門

同日

一横井次郎左衛門申候ハ、奥上道郡沼村ニ惡米百五、六拾石御座候、
春之飢扶持ニ申上、残シ置候御米を御藏江払わせ、惡米ヲ飢扶持
ニ残シ置申度候、然とも年内余日無御座候間、払替申義来春御藏
奉行請取申様ニ仕度由申候

御年寄中被申候ハ、尤之事ニ候、春へ延候て払上させ可申由
被申渡候

同日

一同人申候、取前も申上候金岡村肝煎庄屋次右衛門跡役、世忤平吉
勤兼申間敷者ニ御座候間、被 仰付被下候へと申候

御年寄中被申候ハ、肝煎庄屋之儀ハ何茂達 御耳候間、明日
達 御耳可申由被申候

御伺被申候処、金岡村肝煎庄屋跡役之事、忤平吉ニ可申付由被
仰出候事

一横井次郎左衛門書出し

一奥上道郡西大寺村之勘兵衛と申候小百姓、極月廿五日之夜首括り
死申候、重々吟味仕候得共、別ニ有残成義も無御座候、田地貳、
三反計作仕候、分限ニ過借銀大分御座候、加様之儀ニ差語り首くゝ
り申候哉と、勘兵衛弟長三郎と申者申候、死骸改申候得共、外ニ
疵も無御座候、已上